

山口大学大学院東アジア研究科

博士論文

長州藩校明倫館における山県周南の教育理論と
その実践に関する研究

平成19年3月

牛見 真博

学 位 論 文 要 旨

学位論文題目 長州藩校明倫館における山県周南の教育理論とその実践に関する研究

申請者氏名 牛見 真博

山県周南（一六八七～一七五二）は、若くして江戸の荻生徂徠（一六六六～一七二八）に学んで古文辞学を修め、徂徠門下では最も早い時期からその薫陶を受けた一人である。のちに徂徠が樹立した、朱子学に敢然と抗する学問体系としての徂徠学にも深い理解を示し、生涯を通じてその継承に努めた。

長州藩が、幕末維新期に数多くの有為な人材を輩出した原動力は、松下村塾を主宰した吉田松陰であり、防長教育の伝統もここにはじまるという語られ方をすることが多い。ただし、松陰もまた、当時防長の地に濃厚に存していた教育風土と、藩学振興の中で育まれた一人であったことを思うとき、藩内教学の中心となった明倫館創設の実質的な立役者であり、その基礎づくりに尽力した山県周南の存在なくしてそれを語ることはできない。

しかし、明倫館における山県周南の教育理論とその実践について論じた個別研究は少なく、その研究も十分に進んでいるとは言い難い。本論文ではそうした現状に鑑み、周南がその創設期から明倫館の様々な面で、師説である徂徠学による教育理論の実践を着実にを行い、教学面における徂徠学の浸透と定着に多大な尽力があったことを明らかにするとともに、未だ定論を見ない学統学派の問題についても言及することを目的とした。各章における考察については、以下のようである。

第一章では、長州の藩学の歴史的経緯を概観するとともに、その全体像の中で山県周南が、長州藩の学問・教育風土を拓いた淵源として位置づけられることを論じた。

第二章では、荻生徂徠への師事が山県周南に多大な影響を与え、さらに師説による士君子育成の重視、個性の尊重、自学独習の重視といった教育論が、山県周南を媒介して明倫館教育の随所に受容されていることを論じた。その一方で、山県周南は教育論に関していえば、教育の範囲を士君子層に限定し、教育の力にも限界を認めていた師説を盲従するものではなく、人は学べば誰でも伸びていくとする教育論を有しており、そこに彼の教育者としての真摯さがうかがえる。

第三章では、山県周南による『孟子』を出典とする明倫館の命名について再検討した。先行研究では、『孟子』を批判の対象としていた徂徠学の影響は認められず、藩主をはじめとする朱子学を重んじる人々への譲歩妥協であったとされてきた。しかし、荻生徂徠が『孟子』を批判の対象とだけ捉えておらず、とりわけ「明倫」の語に対する理解を有していたことや、命名を担当した山県周南自身が孟子を否定するものではなかったことを指摘し、山県周南が徂徠学の教育論の反映も意図した命名を行っていることを論じた。

第四章では、山県周南による明倫館創設期からの集書においても、徂徠学の影響が認められることを論じた。『明倫館国書分類目録』に拠り、旧蔵国書の傾向を検討すると、徂徠学と反朱子学関係の書籍の多さが顕著にみられる。また、経学中心の朱子学に対して、詩文・音楽・歴史の領域が重視されているなど、明らかに徂徠学の教育論の反映が認められる。これにより、蔵書の面でも周南が徂徠学を重んじる教学面での基礎づくりに尽力していたことが分かる。

第五章では、創設当初に朱子学を標榜していた明倫館にあって徂徠学を受容が可能だったのは何故か、その理由の一端を明らかにするため、小倉尚斎との親交について論じた。従来、尚斎は明倫館との関わりにおいて、朱子学を重んじた初代学頭という捉えられ方に終始しており、その学統学派の相違を前提として、徂徠学を重んじた周南との接点や交遊の跡が論じられることはなかった。しかし、二人の親交を示す具体的な詩文を取り上げることで、周南が徂徠学の教育論を明倫館教育に反映することが可能であったのも、尚斎との信頼関係と相互理解があったためであることを論じた。

第六章では、明倫館創設の由来を記した「長門国明倫館記」の訳注を試みた。とりわけ、語釈において出典を掲げることに努め、山県周南が古文辞に精通し、当時の藩内において自他共に認める漢文の書き手であったことを、具体的に明らかにすることを意図した。また解題として、古文辞を重んじる徂徠学の学問水準の高さを示す撰文として、その後の藩内教学における徂徠学の精神的支柱とも言うべき役割を担っていた同記の意義を論じた。

そして各章における考察を通して、明倫館ではその創設期から山県周南の尽力によって徂徠学の教育論が実践され、その影響が随所にみられることを明らかにした。またそれにより、従来、小倉尚斎から山県周南への学頭の交代によって、朱子学から徂徠学へ転換したとされてきた学統学派の問題についても、明倫館には創設期から徂徠学の影響が認められることを指摘した。

藩主吉元が朱子学を重んじたのは、幕府と林家の権威を頼ったこと、幕藩体制を維持する上で好都合であったことが理由として挙げられ、それは表向きな受容にとどまるものであった。その一方で、徂徠学は古文辞を重んじる点で朱子学に勝る学問水準の高さを示すとともに、文学や音楽を人心の涵養に不可欠なものと捉えるなど、朱子学にはない特徴的な学問的方法論や主張に魅力があった。実際には、藩主吉元や小倉尚斎らも巻き込んで、徂徠学が藩内の学問的雰囲気醸成に影響を与えていたのである。そのため、明倫館の学統学派は、創設期に藩主吉元が幕府や林家との結びつきから朱子学を重んじていたとしても、その受容は表向きなものにとどまり、実質的な教学には山県周南の尽力によって徂徠学が受容され、着実に浸透していったのである。

明倫館は山県周南を媒介して徂徠学の教育論による教学を展開することで、多くの子弟を教導し、藩国に有為な人材育成を行った。源泉がなければ流れもない。長州藩が明倫館の創設期に山県周南という人物を得たことは、防長の地に本格的な学問と教育の風土が拓かれる上で、かけがえのない源泉を得たとも言えるのである。

目次

序章	本論文の目的	1
第一章	長州の藩学	
1-1	毛利家好学の伝統	5
1-2	藩校明倫館	6
1-3	重建明倫館	8
1-4	支藩の藩校・郷学・私塾	11
1-5	山口明倫館と萩明倫館	12
1-6	結び	12
第二章	荻生徂徠の教育論と明倫館への影響	
2-1	本章の目的	15
2-2	荻生徂徠への入門と徂徠学	15
2-3	荻生徂徠の教育論	18
2-3-1	士君子育成の重視	18
2-3-2	個性の尊重	21
2-3-3	自学独習の重視	22
2-4	師説の継承と明倫館教育への反映	23
2-4-1	士君子育成の重視—「民の父母」語を中心に—	23
2-4-2	個性の尊重—「達材成徳」語を中心に—	26
2-4-3	自学独習の重視	28
2-5	山県周南の教育論の独自性	31
2-6	結び	33
第三章	明倫館の命名にみる徂徠学の影響	
3-1	本章の目的	40
3-2	荻生徂徠の孟子観	41
3-3	「明倫」の語に託された教育理念	43
3-4	朱子学と徂徠学の接点	47
3-5	結び	48
第四章	明倫館の集書にみる徂徠学の影響	
4-1	本章の目的	51

4-2	明倫館創設と山県周南による集書	51
4-3	国書の収集傾向	52
4-3-1	随叢・漢文・詩文の領域に関する集書の特徴	52
4-3-2	徂徠学の詩文観の反映	57
4-3-3	徂徠学の音楽観の反映	60
4-3-4	徂徠学の歴史観の反映	62
4-4	結び	65

第五章 学統学派をこえた小倉尚斎との親交

5-1	本章の目的	70
5-2	文学者小倉尚斎	70
5-3	山県周南の詩文にみる親交	71
5-4	学統学派をこえて	78
5-5	結び	80

第六章 「長門国明倫館記」訳注および解題

6-1	本章の目的	83
6-2	「長門国明倫館記」訳注	83
6-3	解題—撰文の意義について—	92

終章	結語	95
----	----	----

参考文献一覧

あとがき

序章 本論文の目的

山県周南（一六八七～一七五二）は、若くして江戸の荻生徂徠（一六六六～一七二八）に学んで古文辞学を修め、徂徠門下では最も早い時期からその薫陶を受けた一人である。のちに徂徠が樹立した、朱子学に敢然と抗する学問体系としての徂徠学にも深い理解を示し、生涯を通じてその継承に努めた。その功績は、享保四年（一七一九）に創設された長州藩校明倫館の教育にいち早く徂徠学を導入し、結果として藩内に本格的な学問と教育の土壌を拓いたことである。

山県周南は、明倫館の創設当初から重要な役割を担っていた。「長門国明倫館記」には、
孝孺承乏儒曹、与佐佐木雅真議之政府。規度学宮、注記祭儀、申詳功令。宮成、都名曰明倫館、取諸孟子之言。（孝孺は儒曹を承乏し、佐佐木雅真と与に之を政府に議す。学宮を規度し、祭儀を注記し、功令を申詳す。宮成り、都名して明倫館と曰ひ、諸を孟子の言に取る。）

とあり (1)、山根華陽（一六九七～一七七一）の「明倫館祭酒周南縣先生六十寿序」にも、
藩新興学、使諸大夫国人有所矜式。而春秋、釈奠先聖先師、暨養老之儀、其他凡百爾学宮之式、皆祭酒所制也。（藩新たに学を興し、諸大夫国人をして矜式する所有らしむ。而して春秋、先聖先師に釈奠し、暨^{おほ}び養老の儀、其の他凡そ百爾たる学宮の式、皆祭酒の制する所なり。）

とあるように (2)、明倫館創設の実質的な立役者であった。そして、命名や学則の制定、蔵書の収集、「長門国明倫館記」の撰文など、明倫館教育の根幹に関わる面において徂徠学を導入することで、その教学における基礎づくりを着実に進めたのである。しかし、明倫館に関する先行研究 (3) において、そうした山県周南の教育理論とその実践について論じた個別研究の数は少なく (4)、その研究も十分に進んでいるとは言いがたいのが現状である。

さらに、もう一つの問題として、明倫館創設以来の学統学派の問題がある。五代藩主毛利吉元（一六七七～一七三一）は、その創設に際して、幕府の林大学頭信篤（一六四四～一七三二）に教示を受けており、初代学頭に就任した小倉尚斎（一六七七～一七三七）もまた、藩命により信篤の下で朱子学を学んでいる。そのため従来の明倫館研究においても、こと学統学派の問題となると、石川謙氏が「藩初と藩末との二五ヵ年ぐらいつは朱子学一色であり、その中間の一二七ヵ年間は、徂徠学独占であったのがわかる」と述べるごとく (5)、初代学頭である小倉尚斎が在職の間は朱子学を重んじ、その没後、山県周南が第二代学頭に就任したことを契機に、徂徠学へ転換したという見方で捉えられてきた (6)。

しかし、周南門下の山根華陽は、次のように述べている (7)。

此邦昌明教龐之化、有若物夫子勃興、唱復古之業。五六十年來、多士炳蔚、文者修秦漢已上、詩亦不下開天。吾藩之設校也、先得其教者也。（此の邦昌明教龐の化、物夫子のごとき勃興すること有りて、復古の業を唱ふ。五六十年來、多士炳蔚として、文は

秦漢已上を修め、詩も亦開天に下らず。吾藩の校を設くるや、先ず其の教を得る者なり。）

これによれば、明倫館創設当初からすでに学風は徂徠学であったとされる。近年では、荻生徂徠が弟子の山県周南を通して、早くから萩藩の人々と交流を持っていたという指摘(8)や、明倫館の創設に徂徠学の影響があったとする指摘(9)もなされており、さらに若水俊氏が「萩藩が明倫館を創設した当初、小倉尚斎の場合に見られた如く、朱子学を奉じていたことは事実であるが、これも端的に言えば、それは外面的な姿であって、むしろ内面的には、徂徠学の要素の方が強かったのではないだろうか(10)、また「明倫館の学風は、その設立当初から古文辞的な色彩を有していたのであって、朱子学は表面的な存在に過ぎなかったのである(11)」とする、従来にはなかった見解も提出されている。

しかし、その一方で若水氏自身が、「周南が明倫館の設立に果した努力に比して、彼の護園学的な思想が、特にそこに反映しているとは考えられない(12)、「周南を取りまく環境は朱子学的であった。従って、周南が藩校設立に重要な一翼を担いながら古文辞学を導入せず、妥協と譲歩の精神によって朱子学に接触した(13)」と述べているなどの矛盾もみられる。このように明倫館における学統学派の転換については、未だ見解が定まっておらず、再検討の余地が多分にある。

そこで本論文では、従来ほとんど論じられてこなかった命名や学則の制定、蔵書の収集、「長門国明倫館記」の撰文について、それらを広く山県周南の教育理論の実践として捉えその創設期から周南の尽力によって、明倫館教育に徂徠学の受容が着実に行われていたことを、それぞれの側面から具体的に論じていく。そして、創設時に朱子学を標榜していた明倫館にあって、なぜ徂徠学の受容が可能であったのかについても考察を行う。各章の概要は以下のようなものである。

第一章では、まず長州の藩学の様子を概観する。これにより、長州の藩学の歴史的経緯を概観するとともに、その全体像の中で山県周南の歴史的位置を確認し、次章以降で展開していく論の理解に資したい。

第二章では、荻生徂徠への師事と徂徠学の教育論が山県周南にどのような影響を与えたか、またそれが明倫館の教学にどのように反映されたのかを検討することで、教育者としての山県周南像を論じる。

第三章では、明倫館創設に際しての、教育理念の端的な表明ともいえる命名を取り上げる。「明倫」の語が、徂徠学では批判の対象であるはずの『孟子』を出典としていることについて、先行研究では朱子学への妥協であるとされてきた。しかし、山県周南は徂徠学の教育論の反映を意図した命名を行っていることを論じる。

第四章では、蔵書の傾向は教学の実態を反映しているという観点から、明倫館初期における国書の蔵書傾向について検討する。徂徠学および反朱子学関係の書籍の多さからは、山県周南による国書の収集においても、明倫館教学への積極的な徂徠学の受容が認められ

ることを論じる。

第五章では、創設時には朱子学を標榜していた明倫館において、その当初から山県周南を媒介する徂徠学を受容がなぜ可能であったかの理由の一つとして、初代学頭の小倉尚斎との親交という観点から論じる。

第六章では、山県周南が撰文した「長門国明倫館記」の訳注を試みる。さらに、解題として同記の意義について考察を加え、同記には古文辞を重んじる徂徠学の影響が認められ、明倫館が徂徠学にもとづく教学を展開するうえでの精神的支柱であったことを論じる。

そして各章における考察を踏まえ、長州藩校明倫館において山県周南がその創設期から徂徠学による教育理論の実践として、教学面での多大な尽力があったことを明らかにするとともに、従来の学統学派の問題について新見を提示し、当該研究の進展に寄与したいと思うものである。

注

- (1) 『周南先生文集』 卷七 (山口県立山口図書館蔵)。
- (2) 『華陽先生文集』 卷六 (山口県立山口図書館蔵)。
- (3) 明倫館に関する主な先行研究について、刊行順に列挙すれば次のとおりである。『山口県教育史 (旧版)』 (山口県教育会、一九二五年、のち第一書房復刻版、一九八二年)、『明倫館の教育』 (萩市立明倫小学校、一九五〇年)、石川謙『日本学校史の研究』 (小学館、一九六〇年)、笠井助治『近世藩校の総合的研究』 (吉川弘文館、一九六〇年)、奈良本辰也編『日本の藩校』 (淡交社、一九七〇年)、石川謙『日本庶民教育史』 (玉川大学出版部、一九七二年)、城戸久・高橋宏之『藩校遺構—江戸時代の学校建築と教育—』 (相模書房、一九七五年)、笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究 (下)』 (吉川弘文館、一九八二年)、『萩市史』 (萩市史編集委員会、一九八三年)、『山口県教育史』 (山口県教育会、一九八六年)、海原徹『近世の学校と教育』 (思文閣出版、一九八八年)、小川国治「享保期長州藩の文教政策と藩校明倫館」 (『日本歴史』 五八九号、吉川弘文館、一九九七年)、小川国治・小川亜弥子共著『山口県の教育史』 (思文閣出版、二〇〇〇年)、須藤敏夫「長州藩明倫館の積奠」 (『近世日本積奠の研究』、思文閣出版、二〇〇一年)。
- (4) 当該研究には、藤井明・久富木成大『山井崑崙・山県周南』 (叢書日本の思想家一八、明德出版社、一九八八年)、若水俊「明倫館の設立と周南」 (『徂徠とその門人の研究』、三一書房、一九九三年) があるに過ぎない。なお、明倫館教育との関わりには言及されないが、山県周南の教育論について論じたものに、河村一郎「山県周南一面」 (『長州藩思想史覚書』、私家版、一九八六年)、同「山県周南の教育論」 (『長州藩徂徠学』、私家版、一九九〇年) がある。
- (5) 注 (3) 前掲『日本学校史の研究』、五一八～五一九頁。
- (6) 注 (3) 前掲『山口県教育史』は、山県周南が第二代学頭に就任したことを契機として、「以後明倫館での学派は周南の古文辞学が主流」 (一五九頁) になったとする。
- (7) 「長門癸甲問槎序」 (『華陽先生文集』 卷六、山口県立山口図書館蔵)。

(8) 注(4) 前掲『長州藩思想史覚書』、同『長州藩徂徠学』。

(9) 注(3) 前掲『山口県の教育史』、七七～八〇頁。

(10) 注(4) 前掲『徂徠とその門人の研究』、一七二頁。

(11) 同上、一七三頁。

(12) 同上、一六九頁。

(13) 同上、一七〇頁。

第一章 長州の藩学

1-1 毛利家好学の伝統

中国地方の雄であり、五大老の一人でもあった毛利輝元は、慶長五年（一六〇〇）関ヶ原の役に際して、亡き秀吉の遺託を重んじ、豊臣方の西軍に荷担した。

しかし、東軍の勝利に伴い、輝元は所領八ヶ国（一一二万石）を徳川家康におさめ、同時に家督を嫡子秀就に譲った。その後、毛利家は本州の最西端、現在の山口県にあたる周防・長門の両国（三六万九千石）に封じられた。未だ秀就が幼少のため、実権はなお輝元に存していたが、非常な財政の逼迫にも関わらず、それまで広域に散らばっていた一城一村の領主をはじめとする家臣団は、無禄を覚悟の上で狭い防長両国に参集したという。

新たな城地の候補には、周防灘に面する三田尻（防府）の桑山と、大内氏の本拠として栄え「西の京」とも称された県央部の山口が挙がったが、交通の要衝に拠点を置くことは幕府に許されず、そのため長門国の萩指月山を城地と定め、築城にとりかかった。

いわゆる長州藩とは、秀就を初代藩主とする宗藩としての萩藩に加え、岩国吉川氏（六万石）・徳山（三万石）・清末（一万石）・長府（五万石）の四支藩を合わせた総称である。

毛利家は、文章博士として清和天皇の侍読を務め、江家の祖と称される大江音人まで遡る。以来、院政初期の大江匡房をはじめとする数多の好学の士を輩出した。好学の伝統は、毛利家中興を為し遂げた元就までも着実に受け継がれ、その精神は二代藩主綱広が襲封したのち、万治三年（一六六〇）に制定された萩藩の基本法である「万治制法」にも反映された。同法第二条に「諸士面々常に可相嗜事」として「右、諸士ハ常に文を学び武を翫ひ、忠孝の道に志し仮初も礼法を乱さず、義理を専として公儀をうやまひ法度を守り、其役々に怠るへからず、此法於当家古より定をかるる元就公の制法たり、今以不可怠事」(1)と掲げ、大いに文武を奨励している。三代吉就、四代吉広も儒者山田原欽、山県良斎を重用し藩学の振興を図ったが、藩内には制度改革と財政整理とに急を要するものが多く、全藩的な文教施設を鑑みるまでには至らなかった。

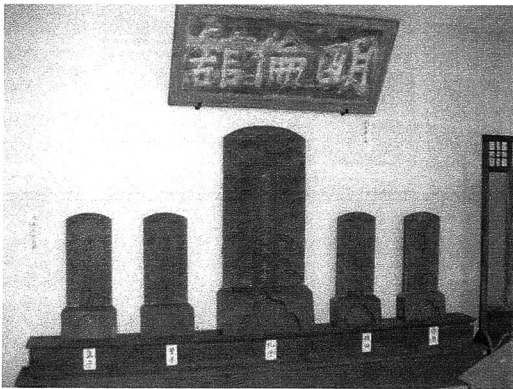
そのうち、「文学武芸等の沙汰も疎に相成、諸士の風俗不宜評有の節は、連歌茶の湯盤上等の翫に移り」(2)、また「文武諸稽古」の教授を家業として仕える「家業人」の身分が低いため、「其業を厭ひ」、「御家来中指南も疎に相成」(3)という始末であった。

この事態を憂慮した五代藩主吉元は、享保三年（一七一八）寺社組の儒者・遠近付の士を大組へ、無給通の士を遠近付へそれぞれ昇格させて地位の向上を図った。その後、吉元は二ヶ条の「御意書」(4)を示し、第一条で諸士に対する文武の奨励、第二条で家業人へ文学・芸術の家業を怠ることのないよう戒め、藩校創設の布石とした。

1-2 藩校明倫館

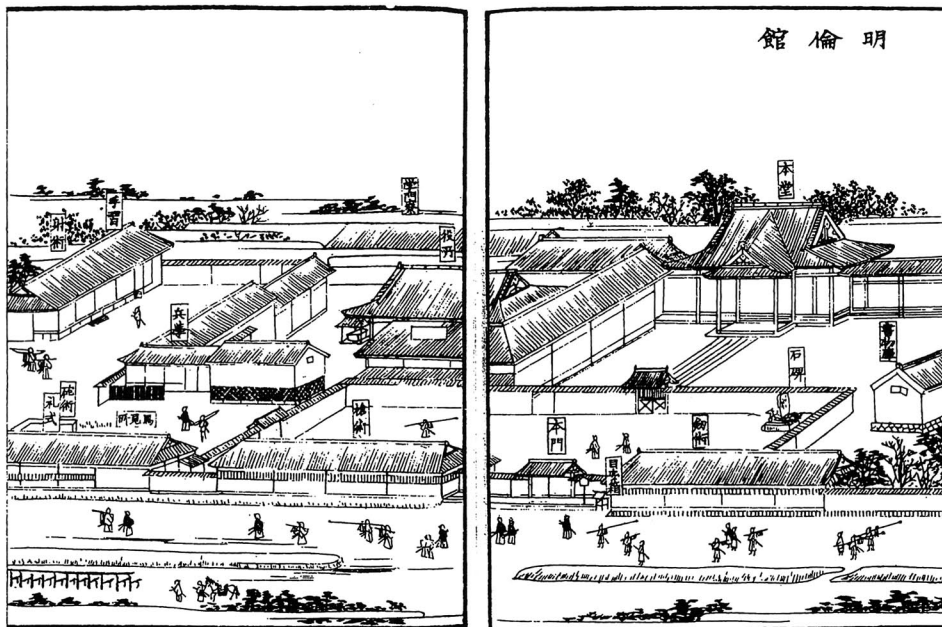
享保四年（一七一九）一月、吉元により萩城三の曲輪内に明倫館が創設された。その名の出典は、『孟子』滕文公篇の「庠序学校を設為し、以て之を教ふ。庠とは養なり、校とは教なり、序とは射なり、夏に校といひ、殷に序といひ、周に庠といふ。学は則ち三代これを共にす。皆人倫を明らかにする所以なり。人倫上に明らかにして、小民下に親しむ。」に基づき、山県周南の撰である（5）。

吉元は長府毛利家より宗家に入り、宝永四年（一七〇七）に襲封した。吉元は林鳳岡に儒学を学び、襲封後も毎月儒者の講釈を聞くなど好学の藩主であった。館の創設に際しても林鳳岡に教示を受け、江戸の湯島聖堂を模範とした。これは幕府と林家の権威を頼ったものと考えられる。吉元の代には、徳山藩の改易・岩国領農民の萩藩領編入一揆・長府藩の一時的な断絶など諸事件が頻発し、家臣の士気が著しく退廃した。そのため明倫館の創設は、藩政の再建に関わる重要な意義をも担っていた（6）。同年二月には釈奠の儀が行な



われ、孔子の木主の傍らに、子思、顔子、曾子、孟子の四賢の木主が配祀された。尊号は林鳳岡の書になる。全敷地九百四十坪、正面奥に聖廟である大成殿、中に講堂を構え、兵書場、礼式場、兵法場、射術場、書庫、諸生寮などを整然と配し、館外南側には馬場を設けるなど、当時その規模と諸施設は充実したものであった。

扁額と木主(萩市立明倫小学校蔵)



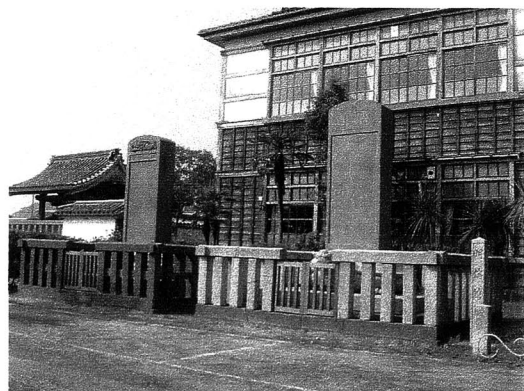
萩八江名所図画(萩市立萩博物館蔵)

明倫館の維持費には毎年五百石が充てられた。職掌として、学頭、講師、助講、兵学、武術などの教官、会頭、舎長、記録方などの運営役が置かれた。館への入学資格は、諸士の嫡・庶子で十五歳から四十歳までの者とされた。また「百姓町人たり共講釈等承り参度志有之ものどもは是又勝手次第袴着用可罷出候事」(7)として、袴の着用を義務づけることで百姓・町人にも聴講が認められた。授業は一月十二日に開始され、十二月十日に終わる。一ヶ月のうち、儒書(十二日)、兵書(六日)、射術(六日)、諸武芸(五日)などを修めるものであった(8)。

初代学頭は小倉尚斎である。尚斎は京都で伊藤担庵に師事し、のち江戸に赴いて林鳳岡の門に入った。その学徳をもって広く聞こえ、のち藩主に招かれて側儒役を務めていた。また、詩才に優れ、正徳元年(一七一)に朝鮮通信使を応接した際には、学士李東郭に賞讃され、六代將軍家宣にも招聘をうけたが、病気を理由に固辞している。明倫館の創設とともに初代学頭に就任してからは、十九年の長きにわたって創設期の館の基礎造りに尽力した(9)。

二代学頭は山県周南である。藩の儒者でもあった父良斎の勧めで、十九歳のとき江戸の荻生徂徠に入門した。当時、古文辞の研究に力を注いでいた徂徠を、安藤東野とともによく助け、その学説の進展にも寄与した。服部南郭・太宰春台らとともに護園八子に数えられ、教育の方面では第一の高弟である。正徳元年八月には、朝鮮通信使を赤間関(下関)に出迎え、学士李東郭らと唱酬した。周南はその才を大いに称せられ、対馬藩の雨森芳洲には「海西無双」と賞賛された(10)。明倫館の創設に際しては、藩主吉元の命をうけ、藩校のあり方を検討し、積菜の方法と学則を定め、明倫館の命名を行うなど、創設の実質的な立役者としての役割を果たした。元文二年(一七三七)学頭に就任すると、新たに「学館功令」(11)を公示し、館の教育理念に「達材成徳」の語を掲げるとともに、公式に徂徠学による学問教育を標榜した。

また元文六年(一七四一)には、六代藩主宗広の命により「長門国明倫館記」(12)を撰文し、敷地内に碑文が建立された。同記では先侯である吉元の藩校創設の事績と、今侯である宗広の藩学振興に対する熱意を述べるとともに、六経精神の尊重をもって自己を形成し、有為な人材となることに学問の価値があるとした。



明倫館碑(左)と重建明倫館碑(右)

(萩市立明倫小学校内)

明倫館における山県周南の影響は大きく、創設時に朱子学を標榜していた明倫館の学問は、着実に徂徠学が受容され重んじられるに至った。そして、第九代学頭の山県太華が朱子学に転換するまで、徂徠学が藩学の主流として行われた。周南は修史事業にも携わり、永田政純を中心とした『萩藩閥閥録』の編述

や『江氏家譜』を監修した(13)。門下には、滝鶴台、林東溟、和智東郊、津田東陽、山根華陽、小倉鹿門、小田村齋山、仲子岐陽、窪井鶴汀、田坂覇山など「周南十哲」と称される俊秀をはじめとする多くの人材が育った(14)。このうち明倫館学頭を務めたのは津田東陽(三代)・山根華陽(四代)・小倉鹿門(五代)で忠実に古文辞学を奉じた。鶴台は七代藩主重就の側儒として仕えたが、太宰春台、平野金華、秋山玉山、細井平洲、山脇東洋といった人々とも親交を持ち、その多彩な活動によって太宰春台から西海第一の才子と称賛された。政策面では、藩の慢性的な財政難に鑑み、「撫育方仕法」を建言して採納された。また明倫館改革の建白書を記し、同館の教学改革にも影響を与えている(15)。

藩主重就は逼迫する藩財政の再建を試み、宝暦十一年(一七六一)より検地を行い、四万六千六百石余の増高を得た。さらに、それを財源とする「撫育方」を設置。以後、一般財源とは別枠での資金の捻出を可能とし、藩政改革の拠点となった。また明倫館における文武を奨励するとともに、江戸と国元に修業の成果を示す帳面を備え、その中から人材を登用し役職に就けるなど、家臣の士気の高揚に努めた(16)。重就以後の歴代藩主も、遊惰・不良者には退館を命じるなど厳しく対処し、積極的に同館の振興を図ろうとした。

1-3 重建明倫館(移転拡充と教学改革)

歴代藩主の様々な館振興策による学事の発展に加え、当時漸く緊迫しつつあった西洋列強の外圧の危機に伴い、藩政の引き締めに資するためにも、さらなる文武興隆のための教育機関の整備が必要であった。

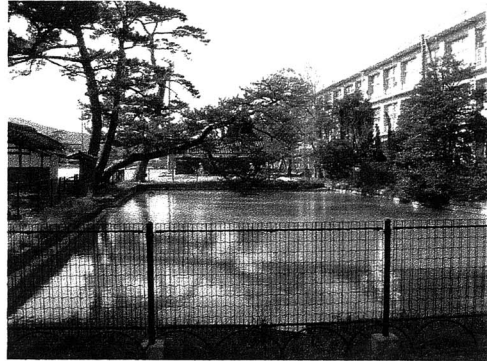
十三代藩主敬親は、村田清風の建言により天保十二年(一八四一)江戸藩邸桜田屋敷内に「有備館」を設けた。これは江戸勤番の諸士の綱紀肅正と文武修養に資するためのものであった。敬親はさらに全藩的な人材育成のために、かねてより明倫館の規模の拡張と教学の改革を志していた。しかし、当時藩の借財は九万二千貫余とも言われ、財源の確保は困難を極めた。そのような状況の下、敬親は弘化三年(一八四六)江戸より帰国すると、藩政改革の担い手であった村田清風を学校御用掛に任じ、移転拡充を担当させた。そして再建費には国元の財源を充て、維持費には江戸方の財源を充てる旨の経理大綱をうちだすことで計画を進め、同藩教育史上の転機となる大事業を成し遂げたのである。

手狭となった明倫館は、萩の江向の地に移され、嘉永二年(一八四九)二月、落成式及び積奠の儀が行なわれた。



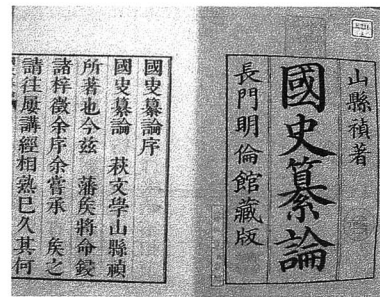
聖廟(萩市海潮寺本堂)

移転後の明倫館は総面積一万五千坪余の敷地を有し、旧館の約十五倍という大規模なものとなった。館の中央に聖廟である宜聖殿、その西側に御殿・講堂・書生寮が置かれ、聖廟の北側には水練池が作られた。その背後には内馬場があり、更にその北一帯の西半は練兵場であった。館の西側には手習場、小学舎、算学所、その北隣に医学所があり、東側一帯には剣術場、槍術場、剣槍上覧場、射術場、礼式、水軍の建物、兵学場などが設けられた。



水練池(萩市立明倫小学校内)

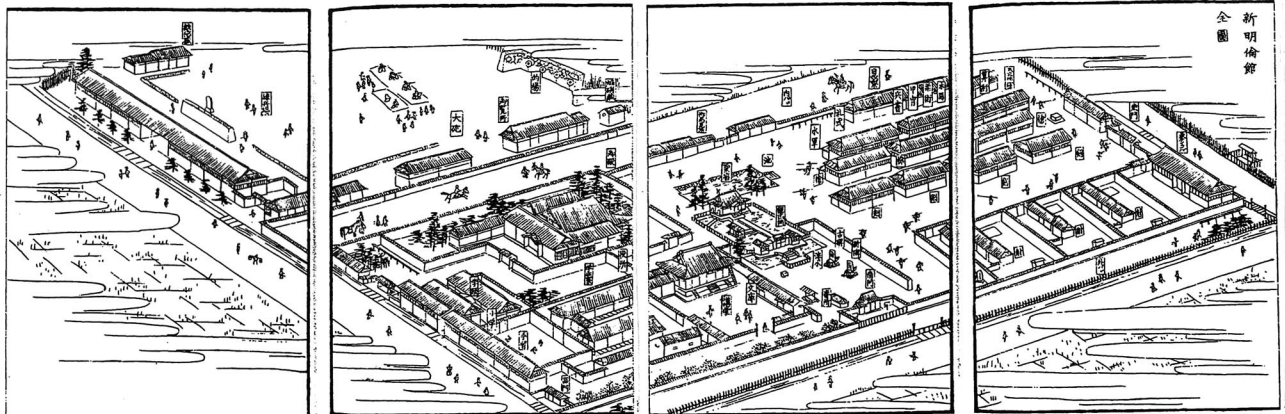
職掌には、学頭、教授、助教、助教添役、講師、講師見習、武芸師、小学教諭、小学講師、小学素読役、都講、舎長、書記、司典、廟司があつた。予算もそれまでの年五百石から、三千五百石が計上されるようになった。また新明倫館発足に伴い、明倫館総奉行役が設けられた。これにより明倫館は、全藩の中心的な文教施設として、以後支藩の藩校(四校)・郷学(十九校)・私塾(百六校)・寺子屋(千三百四校)を指導、統括し得る教育行政的機関ともなり、同館を拠点とする挙藩一致の教学体制が整えられた(17)。なお明倫館では書籍の出版も盛んに行われ、歴代教授の著書や教材の供給にも資した(18)。



山県太華『国史纂論』

(山口県立山口図書館蔵)

この時期の明倫館の運営大綱として最も大きな変化に、従来の徂徠学から朱子学への転換がある。同館の移転拡充に先立ち、天保六年(一八三五)に、九代学頭となった山県太華(19)は、はじめ周南以来の家学を承け、筑前の亀井南溟に師事し徂徠学を学んだ。のち江戸に赴いたが、林述斎、佐藤一斎、安積良斎ら朱子学者に学び、自らも朱子学に転向した。その後、明倫館教授として朱子学を講じていたが、彼が学頭となるに伴い、再び朱子学が正統の学と位置付けられるようになった。



萩八江名所図画(萩市立萩博物館蔵)

天保十一年（一八四〇）には、周敦頤、邵雍、程明道、程伊川、張横渠、朱熹の六子を従祀し、館の規則にも朱熹が掲げた「白鹿洞書院揭示」の精神を加えることを建議し認められた。さらに、嘉永四年（一八五一）には、藩主敬親の命により四書五経の訓点が改められた（20）。

新明倫館の教育は、小学課程と大学課程の一貫教育が基本であった。小学課程は素読と講釈から成り、八歳から十四歳までの子弟が学んだ。「孝経大学科」「論孟中庸科」「五経小学科」の三科とし、さらに「孝経大学科」を初等・上等、「論孟中庸科」「五経小学科」を初等・中等・上等に分け、八段階とした。この三科八等は、毎月三回の内試を行い、全てに好成績を修めた者は一段階を進むことが出来た。

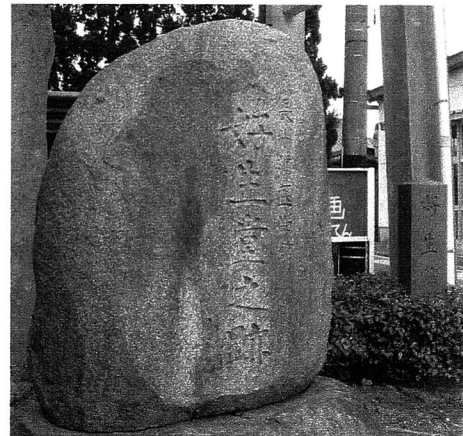
大学課程は小学課程を終えた者で、講釈、会業（小学課程で用いた書を講読）に加え、武芸を修めた。大学生には外書生、入舎生（昼食支給）、上舎生（朝・昼食支給）、居寮生（食費支給）、舎長の五等級があった。

会業書として以下の各書を用い、修了（登科）した者は次の段階へ進めた。初等外書生は『孝経』『小学』『孔子家語』、中等外書生は『大学』『論語』、上等外書生は『孟子』『中庸』、入舎生は『詩経』『書経』、上舎生は『易』『礼記』『春秋』、居寮生は四書五経のうち学頭の指示するものを随時使い、私業書も経翼の書・歴史・諸子・兵書・和書から選択し、学頭より薫陶を受けた。舎長は会業書、私業書とも居寮生と同様であった。

嘉永五年（一八五二）には、山県太華が大学課程の修学について意見書を上申して採納された。これにより、経学・歴史・制度・兵学・博学（安政六年廃止）・文章の六科を設け、経学を必修とし、五科より一科を専攻するものとした。他にも、音楽・医学（漢・蘭）・天文・地理・算術・筆道・礼式・弓馬・劍槍・騎射・大砲・柔術・水軍・遊泳・銃陣など、教授科目は多岐に亘った。

とりわけ洋学の振興には、同時期の諸藩と比べても特に意を注いでいた。館の移転を機に、従来の医学稽古場を拡充して医学所を設け、能美洞庵が頭取役を務めた。後に済生堂と称し、引痘方の設置や舎寮の増設などを経て好生館と改称、能美隆庵、久坂玄機、松島剛蔵等が教授に任じられ、会頭役兼蘭学掛を青木周弼、西洋原書頭取役を田原玄周、青木研蔵が務めた。なかでも周弼は長崎でシーボルトに師事、江戸で宇田川玄真に蘭学を学び、同門の緒方洪庵とともに新進の蘭方医として知られていた。

好生館の医学教育には「漢学」「洋書」「諸科」「専門」の各科が設けられ、「洋書」科はさらに訳書と原書の二科に分かれていた。医学のみでなく、海防学など洋書から得られる知識を積極的に取り入れ、藩の軍事科学的基礎を築く契機ともなった。のちに好



医学校好生堂跡(奥に好生館跡碑)

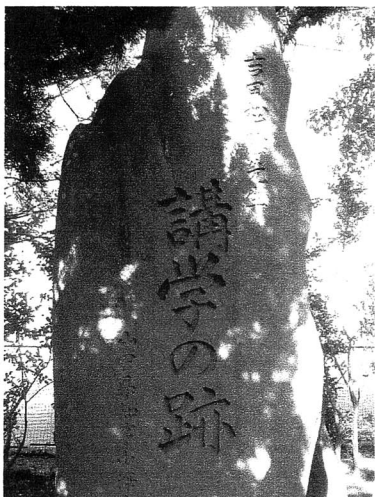
生館の付属機関として西洋学所を設置。さらに西洋学所は博習堂として独立、好生館は好生堂と改称され、それぞれ藩における西洋兵学と西洋医学の教育、研究の拠点となった。

さらに、文久元年（一八六一）に行われた博習堂の改革には、咸宜園と適塾に学んだ村田蔵六（大村益次郎）を登用し、兵学・海軍・陸海兼用砲術の三科を有する教育機関として飛躍的な発展を遂げ、以後の山口兵学寮や三田尻海軍学校の設置に繋がった。

なお幕末期には、桂小五郎（木戸孝允）、久坂玄瑞、高杉晋作、井上聞多（馨）らが明倫館で学んでいる。

1-4 支藩の藩校・郷学・私塾

明倫館は享保四年（一七一九）に創設されたが、支藩の場合はかなり後に譲り、徳山藩の鳴鳳館（後に興讓館に改称）が天明五年（一七八五）、清末藩の育英館が天明七年（一七八七）、長府藩の敬業館が寛政三年（一七九一）、岩国藩の養老館が弘化三年（一八四六）にそれぞれ創設されている。なかでも徳山藩は藩校の創設に先立ち、三代藩主毛利元次が建てた棲息堂に漢籍三万巻が蔵されており、鳴鳳館の蔵書には備わらないものがなかったとされる（21）。各藩校とも明倫館に倣って諸施設が整えられ、文武両道の義務づけによる



調和のとれた人格形成を目指した。藩校に対する藩主の熱意も概して高く、家の嫡子で一つでも落第科目がある場合にはそれを廃し、次男以下の場合は他家への養子資格を剥奪するなど、各藩とも厳しい咎を課すことで館の興隆を図ろうとした。

また一門八家の郷学として、宍戸氏徳修館、右田毛利氏時観園（後に博文堂・脩来院・学文堂・本教館と改称）、厚狭毛利氏朝陽館、吉敷毛利氏憲章館、阿川毛利氏時習館、大野毛利氏弘道館、益田氏育英館、福原氏晩成堂（後に菁莪堂・維新館）があり、さらに藩立、民間有志立による郷

学も設けられた。それぞれに学規学則を確立し、在郷藩士（萩市立明倫小学校内）及び庶民共学の教育機関として展開した。

私塾では吉田松陰の松下村塾が特筆される。松陰は天保十年（一八三九）から遊学に出る嘉永四年（一八五一）まで、明倫館教授として家学である山鹿流兵学を講じた。松陰もまた同藩における藩学振興の中で育まれたが、のちに自らが求心力となり藩の倒幕運動に先鞭をつけた。門下に、久坂玄瑞・高杉晋



松下村塾(萩市松陰神社内)

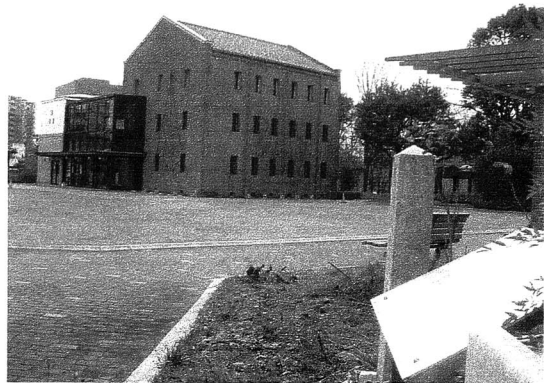
作といった明倫館の俊秀をはじめ、伊藤俊輔（博文）、山県小輔（有朋）、山田市之允（顕義）、品川弥二郎、前原一誠などがいた。

他に私塾として河野養哲の越氏塾、上田鳳陽の山口講堂、村田清風の尊聖堂、僧月性の時習館などが知られている。

1-5 山口明倫館と萩明倫館

寛政十二年（一八〇〇）から文化六年（一八〇九）まで明倫館で学んだ上田鳳陽は、文化十二年（一八一五）山口の中河原に子弟教育のための私塾山口講堂を設立した。その後次第に諸施設が整えられ、藩により名称を山口講習堂（文久元年、亀山東麓に移転拡充）と改められた。ここで学ぶ優秀な子弟は、明倫館へ進学する途も開かれた。後に明治政府の要職を歴任した井上馨は、山口講習堂から明倫館に進学した一人である。万延元年（一八六〇）には、三田尻の越氏塾（元治元年、三田尻講習堂に改称）とともに明倫館の直轄校となり、館に準ずる教育機関としての充実が図られた。

文久三年（一八六三）七月、藩主敬親は時局に対応するため、藩庁を萩から県中部の山口へ移した。それに伴い、十一月には山口講習堂を、文学寮（小学舎・編輯局併設）と兵学寮（歩兵・騎兵・砲兵）からなる山口明倫館と改称した。文学寮は、主に国学を教授する本学寮（神典科・法度科・歌文科）と、儒学と漢文学を教授する漢学寮（経学科・歴史科・制度科・文章科）からなり、兵学寮では西洋兵学をはじめとする洋学を教授した。その後、数次の改革を重ねて藩の文教を担う中心的機関となり、これに伴って従来の明倫館は萩明倫館と呼ばれるようになった。



山口明倫館跡(山口市中河原)

萩明倫館は、明治の学制改革により中等教育機関に移行、支藩の藩校も同様の変遷を辿り、山口明倫館もまた山口中学校・山口高等中学校・旧制山口高等学校・山口高等商業学校と変遷を重ねながら、戦後の学制改革により新制の山口大学へと発展していく（22）。

1-6 結び

幕末・維新时期に、長州藩が多彩な人材を輩出した要因には、明倫館を中心とする教学組織の充実と、江戸期を通じた私塾や寺子屋による庶民教育機会の拡大という両輪の支えが挙げられる。そして、歴代藩主による教育への熱意と、挙藩一致による人材の育成が藩に活力を生み、時代の難局を乗り切る礎になったものと思われる。

長州藩では明倫館を中心として、享保から嘉永期に至る約百二十年間、実質的に徂徠学による教学が展開され、その影響は支藩の藩校や郷校にまで及んだ。天保六年（一八三五）には、第十一代学頭の山県太華によって明倫館の学問は朱子学に転換されたが、この地における徂徠学の長い伝統はすぐに改まるものではなかった。たとえば、吉田松陰が松下村塾において『論語』の講義を朱熹の注に拠らず、徂徠の『論語徴』で行っていたことなどは（23）、藩内における徂徠学の浸透ぶりと、その学問的影響の大きさをうかがわせる。

そのように連綿と続く藩学の歴史を鑑みると、とりわけ山県周南は古文辞を重んじる徂徠学をもって、防長の地に本格的な学問と教育の土壌を拓き、その流れをつくった人物として位置づけられるのである。

注

- (1) 「当家制法条々」（山口県文書館蔵）。小川国治・小川亜弥子『山口県の教育史』（思文閣出版、二〇〇〇年）、四三～四四頁。
- (2) 「明倫館御書付類控」（山口県文書館蔵）。
- (3) 同上。
- (4) 同上。
- (5) 本論文第三章「明倫館の命名にみる徂徠学の影響」参照。
- (6) 注（1）前掲『山口県の教育史』、七一頁。専論に、小川国治「享保期長州藩の文教政策と藩校明倫館」（『日本歴史』五八九号、吉川弘文館、一九九七年）がある。
- (7) 『毛利十一代史』巻五十（名著出版、一九七二年）、二五四頁。
- (8) 同上、二五一～二五三頁。
- (9) 「長肅小倉先生墓碣」（『華陽先生文集』巻八、山口県立山口図書館蔵）。
- (10) 「周南先生墓碑」（『周南先生文集』、山口県立山口図書館蔵）。
- (11) 注（10）前掲『周南先生文集』巻九。
- (12) 同上、巻七。本論文第六章「『長門国明倫館記』訳注および解題」参照。
- (13) 注（10）に同じ。
- (14) 同上。
- (15) 注（1）前掲『山口県の教育史』八八～九三頁。
- (16) 専著に、小川国治『毛利重就』（吉川弘文館、二〇〇三年）がある。
- (17) 校数は、文部省『日本教育史資料』（富山房、一九〇三年）に拠る。なお前掲書の統計処理は、明治十六年の山口県調査による「教育沿革史草稿」に基づくと推定されている（注1前掲『山口県の教育史』）。江戸期を通じて郷学の数は全国で最も多く、私塾は四番目、寺子屋は二番目に多かった。
- (18) 笠井助治『近世藩校に於ける出版書の研究』（吉川弘文館、一九六二年）。
- (19) 専著に、河村一郎『山県太華・吉田松陰考』（私家版、二〇〇四年）がある。
- (20) 明倫館蔵版『改定四書正文』、長門蔵版局『改定音訓五経』（いずれも山口県立山口図書館蔵）。

- (21) 棲息堂の善本類は、幕府に献納されて紅葉山文庫として伝わり、残余の書籍については、山口大学附属図書館に棲息堂文庫として現存している（後掲『明倫館漢籍・準漢籍分類目録』参照）。
- (22) 『山口大学三十年史』（山口大学、一九八二年）。「山口大学沿革図」（資料編1）に、上田鳳陽が設立した山口講堂以来の変遷が載る。
- (23) 横山幾太「鷗磻釣余鈔」（『吉田松陰全集』第十二巻、マツノ書店、二〇〇一年、一八六頁）に、「松陰先生の論語を説かるるや、論語徼に拠り、専ら朱説に拘泥せられざりき」とある。

〈主要参考文献〉

『山口県教育史』（山口県教育会、一九八六年）

『萩市史』（萩市史編集委員会、一九八三年）

『山口市史』（山口市史編集委員会、一九八二年）

『近世藩校に於ける学統学派の研究（下）』（笠井助治著、吉川弘文館、一九八二年）

『山口県の教育史』（小川国治・小川亜弥子共著、思文閣出版、二〇〇〇年）

『明倫館漢籍・準漢籍分類目録』（山口大学人文学部・一九八八年）

第二章 荻生徂徠の教育論と明倫館への影響

2-1 本章の目的

山県周南の教育論は、師である荻生徂徠の教育論の影響を色濃く有している。それはまた周南を媒介して明倫館教育の随所に受容され、教学面に大きな影響を与えている。従来徂徠と周南の師弟関係を踏まえて、明倫館に徂徠の影響が認められることは指摘されながらも、実際には徂徠の教育論がいかに周南に継承され、さらに明倫館教育にどのように反映しているかについて、具体的に論じられることはほとんどなかった(1)。

そこで本章では、師である徂徠の教育論にまで遡り、その上で周南を媒介する明倫館への徂徠学の受容がいかなるものであったかを論じる。さらに師説に捉われることのなかった教育論の独自性についても言及することで、山県周南の教育者像と明倫館教育への影響の一端を明らかにしたい。

2-2 荻生徂徠への入門と徂徠学

山県周南は、貞享四年(一六八七)に儒者山県良斎の次男として、周防国右田(防府)の小野に生まれた。幼少期からの学問への姿勢については、次のように記されている(2)。

天性穎悟、年甫齡受句読。輒誦如流。稍長通四子五經大義。良齋君課子弟学頗嚴、常戒讀書楼上。無故不得下。先生強力專精、日夜在楼、手不釋卷。於是四部羣籍、百家雜説、涉覽功殆遍。(天性穎悟、年甫齡にして句読を受く。輒ち誦すること流るるごとし。稍長じて四子五經の大義に通ず。良齋君子弟に学を課するに頗る嚴しく、常に戒めて書を楼上に読ましむ。故無ければ下ることを得ず。先生強力に專精し、日夜楼に在り、手は卷を釋かず。是に於いて四部の羣籍、百家雜説、涉覽の功殆ど遍し。)

父の良斎は京都の伊藤坦庵、江戸の林鳳岡といった朱子学者に学び、右田の毛利就信に仕え、その子就勝(のちの第四代萩藩主吉広)の侍読を務めていた。子の周南を江戸の荻生徂徠に入門させることにしたのは、当時古文辞学を提唱し始めていた徂徠を漢文の読解力に優れた学者として認識していたためであったと思われる。そして、この入門が周南の学問とその後の人生に多大な影響を与えることになる。

師である荻生徂徠は四十歳頃に、古文辞を提唱した明の李攀龍(一五一四～一五七〇)、王世貞(一五二六～一五九〇)の詩文集の存在を知った。それを契機に徂徠は詩文にとどまらず、古文辞学を六經の注解のために適用したのである。宝永六年(一七〇九)には、日本橋の茅場に居を構えて「設園」と名付けて塾を開き、朱子学に敢然と抗する学問体系を志向するようになっていった。それと同じ頃、周南が徂徠に師事した様子は、同じ徂徠門下の服部南郭(一六八三～一七五九)の「周南先生墓碑」(3)に詳しい。

年十九東遊、師事物夫子。夫子以修古為本。經義文章、皆由是出。時方始唱、和者蓋寡。独有滕東壁從焉。先生至則大說其學、与東壁相視切劘。夫子亦自称得其人。爾後物家之學日興、從者益盛。遂至海内靡然嚮風。吾党至今以二子羽翼、伝為稱首。居東三年、業成而帰。(年十九にして東遊し、物夫子〈荻生徂徠〉に師事す。夫子修古を以て本と為す。經義文章、皆是より出づ。時に方に始めて唱へ、和する者蓋し寡し。独り滕東壁〈安藤東野〉有りて焉に従ふ。先生至れば則ち大いに其の學を説き、東壁と与に相視て切劘す。夫子亦自ら其の人を得たりと稱す。爾後、物家の學〈徂徠學〉日に興り、從者益々盛んなり。遂に海内靡然として風に嚮ふに至る。吾党今に至りて二子〈周南・東野〉の羽翼を以て、伝へて稱首と為す。東に居ること三年、業成りて帰る。)

周南は、宝永二年(一七〇五)、十九歳の時に徂徠に入門した。これによれば、周南は体系的な徂徠學確立以前からの弟子である。安藤東野(一六八三~一七一九)とともに、「修古を以て本と為す」とする、すなわち当時すでに古文辭學の立場に立っていた徂徠の學問思想に触れながら、徂徠が打ち立てようとしていた學問體系の根基を修得することに努めていたことが窺える。

古文辭とは、明の李攀龍・王世貞によって提唱された復古の文体である。金谷治氏は、次のように解説している(4)。

それは宋・明の詩文を否定して、盛唐の詩を模範とし漢以前の文体にかえろうとしたもので、一時的ではあったが当時の文壇を蔽う大きな勢力となった。徂徠のころでは、すでにその形骸化した修辭の模倣性と難澁さが鋭く批判されて、当の中国ではもはや時代おくれの文体となっていたのであるが、しかし徂徠は四十歳ごろに始めてそれに接して強い印象をうけた。それを目にするのができたのは「天の寵靈による」ものであり、それを研修すること十年にして始めて徂徠學は完成した、と自覺されている。徂徠の學を古文辭學とよぶのはこのためである。ただその名の一致から徂徠學のすべてを明の古文辭の影響とみるのは、もちろん誤りである。

明の古文辭學と徂徠學とは決して同義ではない(5)。徂徠學の學問的性格は、荻生徂徠による朱子學および伊藤仁齋(一六二七~一七〇五)批判からの照射によって示される(6)。

程朱諸公、雖豪傑之士、而不識古文辭。是以不能讀六經而知之。獨喜中庸孟子易讀也、遂以其与外人争者言、為聖人之道本然。又以今文視古文、而昧乎其物、物与名離、而後義理孤行。於是乎先王孔子教法不可復見矣。近歲伊氏亦豪傑、頗窺其似焉者。然其以孟子解論語、以今文視古文、猶之程朱學耳。……又未免和語視華言。(程朱の諸公は、豪傑の士なりと雖も、古文辭を識らず。是を以て六經を讀みて之を知ることを能はず。独り中庸・孟子の讀み易きを喜ぶや、遂に其の外人と争ふ者の言を以て、聖人の道本より然りと為す。又今文を以て古文を視、而して其の物に昧く、物と名と離れ、而る後に義理孤行す。是に於いてか先王・孔子の教法復た見るべからず。近歲、伊氏

亦豪傑にして、頗る其の似れる者を窺ふ。然れども其の孟子を以て論語を解し、今文を以て古文を視るは、猶之程朱の学のごときのみ。・・・又未だ和語もて華言を視るを免れず。)

程明道・程伊川や朱熹は、宋代の言語をそれより千年以上も前の経書にあてはめて解釈しようとするため、六経の本義を明らかにすることはできないとする。また当時、反朱子学の学問として影響力を持つに至っていた伊藤仁斎の唱える古学についても、『孟子』の解釈を通して『論語』を理解しようとする学問的方法を批判し、今文によって古文を理解しようとする点においては朱子学と同じであるとする。古文辞を修め、原典に直接あたらないければ、六経の本義を理解することはできないというのが徂徠の批判する内容である。そのため本論では、明の古文辞学の主張に示唆を受け、それを經典解釈に適用し、古代中国の文献を朱子学のように後世の語ではなく、古語によって解釈するべきであるという方法論によって、六経の全体を把握し、天下を安んずる先王の道に近付こうとした学問を徂徠学と定義しておく。古語によって古語を理解しようとする学問的方法は、朱子学の古典解釈を否定するのに十分な説得力を持っていたものと思われる(7)。

周南は徂徠学について、当時の学問の主流であった朱子学とは全く異なる学問的方法に、一種の驚嘆に近い思いを抱くと同時に、そこに真の学問の姿を見出して師説の体系化によく尽力し、自らも徂徠学の積極的な受容に努めるのである。そうした中で、周南は徂徠の弟子の中で最も早く詩文で名声を得ることになる(8)。その契機となったのが朝鮮通信使との詩文の応酬である。帰郷後間もない正徳二年(一七一二)、周南が赤間関で出迎えた朝鮮通信使との詩の応酬について、次のように記されている(9)。

正徳三年韓使来聘。朝命其所經郡国、例当饗賓使。舟至長門封疆赤馬関館焉。侯乃遣諸文学待接、先生与焉。先生年尚少。而与韓諸書記応酬敏捷。文才僑逸、韓人大賞異之。対州雨伯陽亦擯賓。座次交歡先生、目以海西無双。韓三使睹先生所作、至因伯陽格外請見先生。詳見問榘畸賞及先生集中。於是声名籍籍、著聞海内。(正徳三年韓使来聘す。朝命ありて其の経る所の郡国は、例もて当に賓使を饗すべし。舟は長門の封疆赤馬関に至り館するなり。侯乃ち諸文学をして待接せしめ、先生焉に与る。先生年尚少し。而れども韓の諸書記と与に応酬すること敏捷なり。文才僑逸にして、韓人大いに之を賞異す。対州の雨伯陽も亦た擯賓す。座次先生に交歡し、目するに海西無双を以てす。韓の三使先生の作す所を睹て、伯陽に因て格外に先生に見ゆるを請ふに至る。

詳らかに問榘畸賞及び先生の集中に見る。是に於いて声名籍籍として、海内に著聞す。)

周南は韓人に大いに称揚され、対馬藩の雨森芳洲(一六六八～一七五五)にも「海西無双」と賞賛された。二年後には、芳洲が江戸の徂徠を訪ねていることをみても(10)、この出来事が周南の名声のみならず、古文辞を重んじる徂徠学の水準の高さを広く世に知らしめる契機となった。その後の徂徠と周南の師弟関係の深さは、徂徠の周南宛書簡(11)や、徂徠を思慕する周南の文章から知られる(12)。体系的な徂徠学が樹立される以前からの

弟子である周南は、徂徠にとってその生涯を通じて最も親しい理解者であった。

夫道者堯舜創焉。仲尼述焉。荀孟以下能述、而不晰其歸、聖学之旨荒矣。独我徂徠先生生於百世之後、禹跡之表、而乃能得孔子之旨、而明先王之道。孔子之学至今、而有光焉。(夫れ道は堯舜創れり。仲尼述ぶ。荀孟以下能く述ぶれども、其の歸を晰かにせずして、聖学の旨荒む。独り我が徂徠先生百世の後、禹跡の表に生れて、乃ち能く孔子の旨を得て、先王の道を明らかにす。孔子の学今に至りて、光有り。)

堯・舜が創り、孔子が述べた先王の道は、荀子・孟子以降の学者がその解釈を明らかにしなかったために荒んでしまった。ひとり徂徠先生だけが、千数百年の後に生れて、先王の道を明らかにしたのであると述べている(13)。周南にとって、徂徠に師事したことはこの上ない誇りであり、生涯を通してその学問の継承に努めていくのである。「周南先生行状」(14)に、

其学一遵徂徠先生教、以経術文章為宗。(其の学は一に徂徠先生の教へに遵い、経術文章を以て宗と為す。)

とあることから、周南にとって徂徠の影響がいかに大きなものであったかが窺える。そのため、周南の教育論を論じるうえで、まず師である徂徠の教育論についてみておかなければならない。

2-3 荻生徂徠の教育論

徂徠の教育論については、従来、学問の目的、教育の範囲をはじめ、個性の尊重、自学啓発主義といった特徴が指摘されてきている(15)。ここでは先行研究を踏まえながら、士君子の育成、個性尊重、自学独習を取り上げてその内容を論じ、周南による師説の継承を論じるための土台としたい。

2-3-1 士君子育成の重視

荻生徂徠は、学問の目的について次のように述べている(16)。

学者謂学先王之道也。先王之道、詩書礼楽。故学之方、亦学詩書礼楽而已矣。是謂之四教、又謂之四術。詩書者義之府也。礼楽者徳之則也。徳者所以立己也。義者所以従政也。故詩書礼楽、足以造士。(学なる者は先王の道を学ぶを謂ふなり。先王の道は、詩書礼楽に在り。故に学ぶの方も、亦詩書礼楽を学ぶのみ。是を四教と謂ひ、また之を四術と謂ふ。詩書なる者は義の府なり。礼楽なる者は徳の則なり。徳なる者は己を立つる所以なり。義なる者は政に従ふ所以なり。故に詩書礼楽は、以て士を造るに足る。)

これによれば「先王の道」を学ぶ士の育成にこそ、学問と教育の目的がある。「先王の

道」を学ぶためには「義の府」である「詩書」と、「徳の則」である「礼楽」を学ばなければならぬ。徂徠が最も重んじる「先王の道」の真髄は、「詩書礼楽」のうちにこそあり、これらを学び修めることが徂徠学の要諦であった。その重要性については次のようにある(17)。

先王之教、詩書礼楽、辟如和風甘雨長養万物。万物之品雖殊乎。其得養以長者皆然。竹得之以成竹、木得之以成木、草得之以成草、穀得之以成穀。及其成也、以供宮室衣服飲食之用不乏。猶人得先王之教、以成其材、以供六官九官之用已。(先王之教へ、詩書礼楽は、辟へば和風甘雨の万物を長養するがごとし。万物の品は殊なりと雖も、其の養ひを得て以て長ずる者は皆然り。竹は之を得て以て竹を成し、木は之を得て以て木を成し、草は之を得て以て草を成し、穀は之を得て以て穀を成す。其の成るに及んでや、以て宮室・衣服・飲食の用に供して乏しからず。猶人の先王之教へを得て、以て其の材を成し、以て六官・九官の用に供するがごときのみ。)

「詩書礼楽」を学ぶことで、各人の能力はその分に応じて相応に伸長し、世に役立つ人材になることができる。こうした考え方は、人は誰でも「気質」を変化して「聖人」に至ることができるとする朱子学とは、全く相容れないものであった。朱子学の教育目的について、久富木成大氏は次のように述べている(18)。

宋儒、つまり朱子など宋代の中国の学者たちは、人間であるかぎり、聖人も凡人も共通する先天的な性質を持っていると考えた。そして、これを「本然の性」といった。さらに、人はそれぞれ異なる後天的な性質を、「本然の性」のほかに持っており、これを「気質の性」と宋儒は呼んだ。そして、「気質の性」は人によって清濁があり、それが濁っている場合には、「本然の性」をいちじるしくそこなう。そこに、聖人と凡人の差ができるのである。そのため、学問や種々の修養によって人間を磨き、「気質の性」の濁りをすて去れば、人は誰でも聖人になりうると宋儒は考えた。だから、朱子学者たちは、学問の目的を聖人になることにおいていた。

しかし、徂徠は朱子学のように「本然の性」と「気質の性」という二種の性が存在することを認めない(19)。

性者生之質也。宋儒所謂氣質者是也。其謂性有本然有氣質者、蓋為学問故設焉。亦誤読孟子、而謂人性皆不与聖人異、其所異者氣質耳、遂欲變化氣質以至聖人。(性なる者は生の質なり。宋儒の所謂氣質なる者は是なり。其の性に本然有り氣質有りと謂ふ者は、蓋し学問の為の故に設く。亦孟子を誤読して、人の性は皆聖人と異ならず、其の異なる所の者は氣質のみと謂ひ、遂に氣質を変化して以て聖人に至らんと欲す。)

徂徠の人間観には、生まれながらの能力は人それぞれにすでに異なっているという前提がある。そして、その人にすでに備わっている能力については、後天的に伸ばしていくことも可能であるとする(20)。

人之性万品、剛柔軽重遲疾動静、不可得而変矣。然皆以善移為其性。(人の性は万品に

して、剛柔・軽重・遅疾・動静は、得て変ずべからず。然れども皆善く移るを以て其の性となす。)

こうした徂徠の考え方は、学べば誰でも聖人に至ることができるとする朱子学の教育論(21)とは一線を画するものである。人間の能力も分も生来の差があり、教育力にも一定の限界があるということについて、徂徠はまた次のようにはっきりと述べている(22)。

天命之謂性。人殊其性、性殊其徳。達財成器、不可得而一焉。孔門諸子、各得其性所近者、豈仲尼之教有所不足乎。譬如時雨化之、莫不生焉已。大者大生、小者小成。豈不欲小者大生邪。実命不同。君子知命。故不强之。及乎器之成也、雖聖人有所不及焉。故聖人不敢強之。是故人可皆為聖人者非也。性可易者非也。君子之不器、水可舟而陸可車者非也。(天命之を性と謂ふ。人其の性を殊にし、性其の徳を殊にす。財を達し器を成すは、得て一にすべからず。孔門の諸子は、各其の性の近き所を得し者にして、豈に仲尼の教へに足らざる所あらんや。譬へば時雨の之を化するがごとく、生ぜざることなきのみ。大なる者は大生し、小なる者は小生す。豈に小なる者の大生するを欲せざらんや。実に命同じからず。君子は命を知る。故に之を強ひず。器の成るに及ぶや、聖人と雖も及ばざる所有り。故に聖人敢へて之を強ひず。是の故に人は皆聖人たるべしとする者は非なり。性は易ふべしとする者は非なり。君子の器ならず、水には舟なるべくして陸には車なるべくとする者は非なり。)

徂徠が理想とする社会は、各人各様の能力がそれぞれの立場において十全に発揮されることであつた。そうすれば社会は自ずと治まっていくというのが徂徠の持論であり、各人に与えられた能力や分は、生まれた時からすでに異なっているというのが人間観の前提にある。そのため、徂徠は環境の差異、能力の差異については、如何ともし難い「命」と捉えている(23)。

夫六経残欠矣。生於今世、孰見其全。命也。僻邑無師友命也。家貧無書命也。雖然心誠求之、天其佑之。仕不優無暇命也。故己不能学者、喜人之学也。力能使人学者、使人学也。雖不学猶学也。何必才知德行出諸己、而後愉快乎。故命也者、不可如之何者也。故学而得其性所近、亦猶若是夫。達其財成器、以共天職古之道也。(夫れ六経残欠す。今の世に生れて、孰か其の全きを見ん。命なり。僻邑にして師友なきは命なり。家貧しくして書なきは命なり。然りと雖も心に誠に之を求めば、天其れ之を佑けん。仕へて優ならずして暇無きは命なり。故に己の学ぶこと能はざる者は、人の学ぶを喜ぶなり。力めて能く人をして学ばしむる者は、人をして学ばしむるなり。学ばずと雖も猶学ぶがごときなり。何ぞ必ずしも才知德行諸を己より出だして、而る後愉快とせんや。故に命なる者は、之を如何ともしすべからざる者なり。故に学んで其の性の近き所を得るも、亦猶是のごときかな。其の財を達し器を成して、以て天職に共するは古の道なり。)

徂徠によれば、自己に与えられた範囲で能力を伸ばし職責を全うすることにこそ、重き

が置かれるのである。そして民間の人々に対しては、「民間の輩には孝悌忠信を知らしむるより外のこと不入なり」(24)として、庶民に学問・教育は不必要であるとまで述べている。

ただし、それは学問が単に自己の身を修めるためではなく、あくまでも天下を治め、民を安んずるためのものであるとの認識に立った言であった(25)。

先王之道所以安民也。故学先王之道、而不知其所以然、則学不可得而成矣。(先王の道は民を安んずる所以なり。故に先王の道を学べども、其の然る所以を知らずんば、則ち学は得て成すべからず。)

学ぶ者は、「先王の道」が「民を安んずる」ためのものであることをはっきりと自覚して学ばなければならない。封建社会を肯定し、生まれながらの能力や分の違いを肯定する祖徠にとって、とりわけ社会のリーダーたる士君子の育成は、社会の安定に関わる最優先事項であった。それは、『弁道』における「大なる者を立つれば、小なる者おのづから至る」との言にも端的にあらわれている。祖徠の教育論には、こうした人間観・社会観が底流にあることをまず踏まえておかなければならない。

2-3-2 個性の尊重

祖徠が士君子の教育において重んじたのは個性の尊重であった。祖徠は次のように説明している(26)。

才材同。・・・人随其性所殊、而各有所能。是材也。(才・材は同じ。・・・人は其の性の殊なる所に随ひて、各々能くする所あり。是材なり。)

祖徠がいう「材」とは、各人が有している才能や個性である。さらにそれは天から与えられたものであり、決して変化することはないとしている(27)。

変化氣質、宋儒所造。・・・且氣質者天之性也。欲以人力勝天而反之、必不能焉。強人以人之所不能、其究必至於怨天咎其父母矣。聖人之道必不爾矣。孔門之教弟子、各因其材以成之、可以見已。(氣質を変化すとは、宋儒の造る所なり。・・・且つ氣質なる者は天の性なり。人力を以て天に勝りて之に反せんと欲するも、必ず能はざるなり。人に強ふるに人の能はざる所を以てすれば、其の究み必ず天を怨み其の父母を咎むるに至らん。聖人の道は必ず爾らず。孔門の弟子を教ふるや、各其の材に因り以て之を成すは、以て見るべきのみ。)

祖徠の教育は、孔子の教育理念であるところの、各人の「材」である個性の充実を重んじるものであった。人それぞれの性質が異なることを踏まえず、その本質を変えようとするれば、そこに無理が生じ、ひいては必ず天を怨み、その父母を責めるに至ると述べている。

さらに具体的な例として、次のように述べている(28)。

氣質は何としても変化はならぬ物にて候。米はいつ迄も米。豆はいつまでも豆にて候。

只氣質を養ひ候て。其生れ得たる通りを成就いたし候が学問にて候。たとへば米にても豆にても。その天性のままに実りよく候様にこやしを致したて候ごとくに候。……宋儒之説のごとく氣質を変化して渾然中和に成候はば。米ともつかず豆ともつかぬ物に成たきとの事に候や。それは何之用にも立申間敷候。

「其生れ得たる通りを成就いたし候が学問にて候」という一文には、徂徠の教育観が端的に示されており、各人が天から与えられたそれぞれの「材」をいかに育ていくかに重きを置いていたことが分かる。徂徠の個性尊重については次のような一節もある(29)。

人ヲ用ル道ハ、其長所ヲ取テ短所ハカマハヌコトナリ。長所ニ短所ハツキテハナレヌモノ故、長所サヘシレバ、短所ハシルニ不及。唯ヨク長所ヲ用レバ、天下ニ棄物ナシ。必長処短処ヲ具ニ知ラントスレバ、短所ヲ氣ヅカウ心ツヨキユヘ、長所ヲ快ク用ルコトナラヌモノ也。

ここでも端的に、長所さえ知れば短所は知るに及ばず、長所をうまく用いれば天下に棄物はないとする。このように徂徠は、教育における個性の尊重を重視していたことが分かる。

2-3-3 自学独習の重視

徂徠の教育論におけるもうひとつの特徴は、学問に取り組む姿勢として、自主性を重んじた点にある。徂徠は当時の朱子学における、講釈の聴講に重きを置いた受け身の学問姿勢を非難している(30)。

今ノ世ノ陋習ニ、講釈ト云モノアリテ、学問ヲスルトイヘバ、貴賤トモニ必講釈ヲ聴コトニスルナリ。其講釈ノ仕様ニ一定ノ法有テ、四書・近思録ナドヲ次第シテヨムコトナリ。……サテ其修行ノシカタヲミレバ、木ニテ人形ナドヲ作ル如ク、次第階級詳ラカニ、道理ハ聞ヘタルヤウナレドモ、畢竟人ヲ死物ニナシテ見タルモノニテ、人ノ材徳ヲ養フハ草木ニコヤシヲシテ長養セシムル如ク、聖人ノ道ヲ学ベバ自然ニ知見開テ、材徳ワレト発達スルモノナリ、ト云コトヲシラズ。

講釈中心の学問、教育は、人を死物同然に扱うのに等しいとして批判している。これは当時の朱子学の学問、教育方法への批判である。徂徠はまた、講釈に対する批判として次のような理由も挙げている(31)。

総ジテ聖人ノ教ハ、ワザヲ以テ教ヘテ、道理ヲ説カズ、偶ニ道理ヲ説ケドモ、カタハシヲ云テ、其人ノ自得スルヲ待ツコトナリ。其故ハ人ニ教ヘラレタル理窟ハ、皆ツケヤキバニテ、用ニ立ヌモノ也。一切ノコト、我身ニナサズシテ其理ヲ知ルコトハ、決シテナキコトナリ。善教ル人ハ、一定ノ法ニ拘ハラズ、其人ノ会得スベキスヂヲ考ヘテ、一所ヲ開ケバ、アトハ自ラ通ズル者ナリ。然ル時ハ、皆自心ニ発得シテシル故ニ、シリタルコト皆我物ニナリテ用ニ立也。

学問とは断片的な知識の切り売りではなく、自らが求めて会得することが肝要であり、人に教えられた理窟などは、付け焼き刃同然で役に立つものではないと断じている。また学ぶ者の性質を踏まえて、一人一人にあった教え方で導き、その人が自発的に学んでこそはじめて知識は身に付き、役に立つのであると述べている。そして、朱子学の教育論には次のように異を唱える(32)。

聖人ニ成ランコトヲ求メ、変化モ成ラヌ氣質ヲ変化セント云ヒ、聖人ノ教ハ、皆其自得スルヲ待コトナルニ、一定シタル道理ヲコシラヘ、聒クトキ立テ、是非ノ弁キビシク、人ヲ咎ムルコト甚シ。コレニヨリテ学問ヲスレバ、人ガラ悪シクナルト云テ、嫌フ人モアリ。理窟斗ニテワザナキ教也ト云テ、軽ンズルモアリ。儒学ハ偏局ニカタキ教也ト思フ人モアリテ、人心ノ赴カザルハ、其儒者ノ過モ過半ハアルコトナリ。

ここにも徂徠と朱子学との教育観の違いが、対照的に述べられている。聖人の教えは、各人の自得を待つものであるとする徂徠に対して、朱子学では一人ひとりの違いを踏まえることなく、誰もが画一的に聖人を目指すことを求め、変えることの不可能な氣質までも変えようとする教育観にもとづいている。徂徠はこれを実現不可能なことであるとして、儒学を軽んじ、心が向かない風潮があるのは、そうした偏頗な考え方をする朱子学を重んじる儒者に原因があると述べている。このように徂徠は、朱子学の教育論を批判しながら、それとは異なる自らの教育論を鮮明に打ち出しているのである。

2-4 師説の継承と明倫館教育への反映

山県周南の教育論は、師である荻生徂徠の教育論に多大な影響を受けている。それが、明倫館創設期の教育理念にも大きく反映していることは、従来ほとんど論じられてこなかった(33)。ここでは、さきに指摘した徂徠の教育論の主要素である、(1) 士君子育成、(2) 個性尊重、(3) 自学独習の重視を取り上げ、周南の教育論に影響を与え、明倫館の教育理念としても反映された点について論じていく。

2-4-1 士君子育成の重視—「民の父母」語を中心に—

元文六年(一七四一)、周南が明倫館創設の意義とその経緯を記した「長門国明倫館記」に、士君子育成を重視していた徂徠の教育論の反映が認められる。それは後半に見られる次の一節である。

君子若欲綢繆国家、宜莫若学。愷弟君子民父母。(君子若し国家を綢繆せんと欲せば、宜しく学ぶに若くは莫かるべし。愷弟の君子は民の父母なり。)

ここで着目したいのは、「民の父母」の語である。この語は君子祝頌の詩である『詩経』小雅「南山有台」第三章の、

南山有杞	南山に杞有り
北山有李	北山に李有り
樂只君子	樂しき君子は
民之父母	民の父母
樂只君子	樂しき君子は
德音不已	德音已まず

を出典としており(34)、君子のあるべき姿をいうものである。徂徠によれば、この「君子」の解釈は、次のようである(35)。

滿世界の人ことごとく人君の民の父母となり給ふを助け候役人に候。如是御覽候はばよく相濟可申事に候。此故に士大夫の事を君子と申候。君子と申候は。子は男子の通称にて。君徳ある男子と申事にて候。

徂徠の人材論の特徴として、臣は君と天職を共にするという考え方がある。徂徠による「士大夫は皆其の君と天職を共にする者なり」(36)、また「天、我に命じて、天子と為り、諸侯と為り、大夫と為り、士と為らしむ。故に天子・諸侯・大夫・士の事とするところは、皆天職なり」(37)の言を踏まえたうえで、田原嗣郎氏は、「社会全体を見渡す場に立てば、君臣＝天子・諸侯・大夫・士は民を安んずるという『天職』を共にした存在なのである」と指摘している(38)。

さらに田原氏は、徂徠による「夫れ民をば『天民』と曰ふ。諸れを君に属せずして諸れを天に属す。臣は則ち皆君の臣なり。古への道なり」(39)を踏まえて、「ここに表される思想は人民は君(天子・諸侯)のものではなく、『天』に直属し、『天』がその『民』を安んぜしめるために、『君・臣』＝『天子・諸侯・大夫・士』から成る治の組織を設けたとするもの。この考え方では天子から士に至る組織が天と民とに奉仕すべき職務を負っているとし、その限りで君と臣とは天職を共にする」と述べている(40)。このように徂徠が重視する「民の父母」の語には、君と臣との関係に同等性の要素が含まれているのである。

さきに触れた徂徠のいう「材」や「徳」の涵養については、同時に「仁」が重要な観点として引き合いに出される。徂徠は『弁道』において、

若或不識用力於仁、則其材与徳、皆不能成。(若し或は力を仁に用ふることを識らざれば、則ち其の材は徳とともに、皆成すこと能はず。)(41)

あるいは、

修徳有術。立其大者、而小者自至焉。此孔門所以用力於仁也。(徳を修むるに術あり。其の大なる者を立つれば、小なる者自ら至る。此孔門の力を仁に用いし所以なり。)

と述べているのである(42)。徂徠はまた、「仁」について次のように捉えている(43)。

孔門之教、仁為至大。何也、能舉先王之道而体之者仁也。先王之道、安天下之道也。其道雖多端、要歸於安天下焉。・・・学先王之道而成徳於我者、仁人也。雖然、士欲學先王之道以成徳於我、而先王之道亦多端矣。人之性亦多類矣。苟能識先王之道要歸於

安天下。而用力於仁、則人各隨其性所近、以得道一端。(孔門の教へは、仁を至大と為す。何となれば、能く先王の道を挙げて之を体する者は仁なればなり。先王の道は、天下を安んずるの道なり。其の道は多端なりと雖も、要は天下を安んずるに帰す。……先王の道を学びて徳を我に成す者は、仁人なり。然りと雖も、士は先王の道を学びて以て徳を我に成さんと欲するも、而も先王の道も亦多端なり。人の性も亦多類なり。苟も能く先王の道の要は天下を安んずるに帰することを識りて、力を仁に用ふれば、則ち人は各々其の性の近き所に隨ひて、以て道的一端を得ん。)

徂徠による学問および教育の目的は、天下を安んずる君子の育成にある。そのための重要な観点の一つに「仁」がある。『徂徠先生答問書』には、「就中君子之道を申候はば仁之外に又肝要なる儀無御座候」とあり(44)、徂徠が君子のあるべき姿を語る際に、「仁」をいかに重視していたかが分かる。

それでは徂徠のいう「仁」とは、具体的にはどのようなものか。同じく『徂徠先生答問書』には、「仁は慈悲の事と大形は心得候得共。慈悲に様々御座候故。的切之訓解にては無御座候」とある(45)。また『孟子』の「惻隱の心は仁なり」の解釈を、「惻隱之心は。大形は尼御前などの慈悲に罷成候故今日難取用候」と斥けた上で(46)、さきの『詩経』小雅「南山有台」における「民の父母」語を持ち出し、「是に踰候よき注解無御座候」(47)、さらに「民之父母と申所より了簡を付不申候へば。それぞれの職分も済不申事に候」(48)として、次のように述べる(49)。

人の上に立候人は。身の行儀悪敷候へば。下たる人侮り候而信服不申候事。人情の常にて御座候故。下たる人に信服さすべき為に身を修候事にて。兎角は天下国家を治め候道と申候が聖人の道の主意にて御座候。たとひ何程心を治め身を修め。無瑕の玉のごとくに修行成就候共。下をわが苦世話に致し候心無御座。国家を治むる道を知り不申候はば。何之益も無之事に候。依是民之父母と申所より見開き不申候はば。何程の金言妙句も。孔子之御相傳被成候堯・舜・禹・湯・文・武・周公の道とは。雲泥萬里の相違にて御座候。

人の上に立つべき君子は、下の人々を教化し、感化できるように身を修めることこそ、天下国家を治める道であり、聖人の道の主意である。それには君子としての徳を示す「民の父母」という観点に立ち戻って考えなければ覚束ないと主張している。徂徠の教育論の対象は、つねに天下国家を治める君子を想定している。そうした徂徠の影響をうけて、周南の『為学初問』においても同様に、君子の理想像を語る際、「民の父母」の語が用いられているのである(50)。

君は民の父母なりといへり。世を保つ人は、世は皆我赤子なりと思ひ給へり。大学の教、養老序齒の礼を本として、天下に孝弟を教へ給ふ。

さらに周南は、同書において次のようにも述べている(51)。

儒者の道は先王の道なり。先王といふは天下の主にて、民の父母なり。天下に充滿し

たる我子なれば、善も悪もありぬべし。悪ければとて子を棄る道やある。すたらぬ様に謀るこそ、父母の道なるべけれ。

そして、さきに田原氏の指摘として、徂徠が「君臣＝天子・諸侯・大夫・士は民を安んずるという『天職』を共にした存在」であると考えていたことに触れたが、周南もまた同様の認識を有している(52)。

首上たる士は、假令一介士にても王者の羽翼となりて、天職を佐け奉る故に、士大夫の職をも天職といふなり。其の故は假令いかなる明主にても、一人の力にて国家を治め給ふ事ならず、いかなる賢臣にても、一二人の力にて国家の用を達する事能はず。必ず百官有司下部奴隷に至るまで、それぞれの役そなはりて国家の事全し。

このように、「長門国明倫館記」に見られる「民の父母」語の援用は、徂徠が重んじた天下を安んずる人材の育成を、明倫館の教育理念として反映していることを指摘できるのである。

2-4-2 個性尊重—「達材成徳」語を中心に—

元文二年(一七三七)、明倫館初代学頭である小倉尚斎の逝去にともない、山県周南が第二代学頭に就任した。周南は「学館功令」(53)を定め、明倫館諸生に学ぶ者としての心構えを示した。その冒頭は、

学校之設、達材成徳、上焉以供国家之用、下焉以使有所矜式也。(学校の設は、材を達し徳を成し、上は以て国家の用に供し、下は以て矜式する所有らしむるなり。)

とあり、「達材成徳」の語を掲げ、藩校創設の意義と教育理念を説いている。

「材」と「徳」とを教育の意義として一対で用いた最初は『孟子』である。尽心章句上に、「有成徳者、有達財者」(徳を成す者有り、財を達する者有り)と見え、その疏に、「以其有財之具而不能用者、則教而達之也」(其の財の具有りて用ふる事能はざる者を以てすれば、則ち教へて之を達するなり。)とあることから(54)、身に備わる才能を教育によって伸長することを言う。以後、「成徳達材」の語は、教育の意義を端的にあらわす語として用いられるようになった。

ここで注意すべきことは、「学館功令」に見られるように山県周南は「達材成徳」として、あえて「材」を「徳」に優先させて用いている点である。この意図的な語の用い方に、徂徠による個性の重視が反映しているのである。河村一郎氏は、周南の教育論について次のように述べている(55)。

周南の教育論は、要約すれば、「達材成徳」を目的として、「大器大成、小器小成」—すなわち個人の能力の全的な発現を求めるところに帰着する。(中略)この考えは、徂徠の教育論を踏襲するものであった。享保五年と思われる周南宛の書牘(『徂徠集拾遺』周南宛第一書)において徂徠は、「詩書礼楽、先王之妙術、其教各殊。君子学之、以成

其徳。材小者小成、材大者大成」と教示している。

徂徠が重んじた「材」は、各人の能力と分によって異なるものである。「其生れ得たる通りを成就いたし候が学問にて候」(56)として、各人に与えられたままの「材」を育むことを重視していたことはすでに論じたところである。

ここでは、もう一方の「徳」についても見ておきたい。徂徠は「徳」について、次のように定義している(57)。

徳者得也。謂人各有所得於道也。或得諸性、或得諸学。皆以性殊焉。性人人殊。故徳亦人人殊焉。夫道大矣。自非聖人、安能身合於道之大乎。故先王立徳之名、而使学者各以其性所近、拋而守之。修而崇之。如虞書九徳、周官六徳、及伝所謂仁智孝弟忠信恭儉讓不欲剛勇清直之類、皆是也。蓋人性之殊、譬諸草木区以別焉。雖聖人之善教、亦不能強之。故各隨其性所近、養以成其徳。徳立而材成、然後官之。(徳なる者は得なり。人各々道に得る所有るを謂ふなり。或は諸を性に得て、或は諸を学に得る。皆性を以て焉を殊にす。性は人人殊なる。故に徳も亦人人殊なる。夫れ道は大なり。聖人に非ざるよりは、安んぞ能く身の道の大なるに合せんや。故に先王は徳の名を立てて、学者をして各々其の性の近き所を以て、拋りて之を守り、修めて之を崇ばしむ。虞書の九徳、周官の六徳、及び伝に謂ふ所の仁・智・孝・弟・忠・信・恭・儉・讓・不欲・剛・勇・清・直のごとき類は、皆是なり。蓋し人の性の殊なるは、諸を草木の区して以て別るるに譬ふ。聖人の善く教ふと雖も、亦之を強ふること能はず。故に各々其の性の近き所に隨ひ、養ひて以て其の徳を成す。徳立ちて材成り、然る後に之に官するなり。)

虞書の九徳とは、『書経』皐陶謨に「寛而栗、柔而立、愿而恭、乱而敬、擾而毅、直而温、簡而廉、剛而塞、彊而義」(58)、周官の六徳とは、『周礼』地官・大司徒に「一曰六徳、知・仁・聖・義・忠・和」(59)とあるのに拠る。これらの徳を行うことで、諸侯となり国を保つことができるとする。「徳立ちて材成り、然る後に之に官するなり」の言説が示すように、「材」と「徳」とは不可離のものであり、各人の個性に応じて「徳」を備えることに努め、その結果として「材」も成り、世に有為な人物にもなり得るとしている。各人が有するそれぞれの個性を伸長しながら身を修め、「天下を安んずる」ためのしかるべき役割を果たす人材を育成することは、徂徠の教育の主眼であった。こうした「材」や「徳」に対する考え方は、周南に次のように影響を与えている(60)。

人心同じからざること、その面のごとしと言へり。人の性質人々同じからず、品々の生あり。されど礼楽を学び教化を経れば、義理に通じ君子の道を知る故、性質相応の才徳成り立つなり。其器量に応じ、大なるは大官を授け、小なるは小官を授け、百官庶司それぞれに配当して用ひらるる時は、都て国家の用に立たずといふことなし。

各人が性質相応の才徳を養い、各人の器量に応じた形で国家の用に供すという考え方は、明らかに徂徠の教育論を祖述したものであり、それはまた周南が「学館功令」で掲げた「学

校の設は、材を達し徳を成し、上は以て国家の用に供し、下は以て矜式する所有りて使ふなり」という藩校教育の意義でもある。各人に与えられた性質相応の個性の伸長を重んじるといふ徂徠の教育論を継承した周南は、それを「達材成徳」の語として掲げ、自らの学頭就任に際して公示した「学館功令」において、明倫館教育の根幹に位置づけたのである。

2-4-3 自学独習の重視

周南は師である徂徠の教育姿勢を「和風甘雨」の語を用いて述べるとともに、また自らの教育論を展開している(61)。

其教人也、如和風甘雨之於草木。其学曰、先王之道、敬天為本、小大莫不用其敬。何容不敬。不佞既已奉遺教周旋。常恐俾疑夫子於西河之民。不敢師道自居。且教導子弟。恒恐傷其天材、而害人之子。往往從其所欲。待其自成之。籍第令繩之以規矩、督之以檟楚、立則如尸、坐則如齋。出入必抑裁其所為乎。若其人樸楸、非任道之器、則日憔悴、必也萌芽而銷。(其の人に教ふるや、和風甘雨の草木に於けるがごとし。其の学に曰く、先王の道、敬天を本と為し、小大其の敬を用いざる莫し。何ぞ不敬を容れんや。不佞既已に遺教を奉じ周旋す。常に恐る夫子を西河の民に疑はしめんことを。敢へて師道もて自ら居らず。且つ子弟を教導する。恒に恐る其の天の材を傷ひて、人の子を害せんことを。往往にして其の欲する所に従ふ。其の自ら之を成ることを待つ。籍第令之を繩すに規矩を以てし、之を督すに檟楚を以てするも、立てば則ち尸のごとく、坐すれば則ち齋むがごとし。出入するに必ず其の所為を抑裁せんや。若し其の人樸楸にして、道を任ずるの器に非ずんば、則ち日に憔悴し月に銷し、必ずや萌芽にして銷せん。)

「和風甘雨」が万物を伸長するがごとく学生の教育にあたり、受身ではなく自主的に学問に向かう重要性に気付かせるという徂徠の人柄と教育論を掲げながら、朱子学の教育に対する反駁を行っている。周南が最も恐れるのは、生まれつき与えられている各人の性質を、人為によってねじ曲げるようなことをしているのではないかというものである。自主的に求めて学ぶように仕向け、その上で人格の完成を待つことが徂徠学における教育論である。それを一人一人の性質の相違を考慮せず、無理強いし、あるいは杓子定規の教導で、画一的に導こうとしても教育の効果は上がるはずもなく、むしろ伸びるべき芽を摘んでしまうことにもなりかねないとする。そして、徂徠が提唱する古文辞による学問、教育の正当性について次のように述べる(62)。

昔聞之夫子。先王之道六經炳如。吾与之優遊於其中、積久而知至矣。及知至也、小者小成、大者大成。無所容我力矣。雖或不至焉者、曾無害其天。是先王之道也。孔子之所由以教人也。(昔之を夫子に聞く。先王の道は六經に炳如たり。吾之と与に其の中に優遊し、積久して知至れり。知至るに及ぶや、小なる者は小成し、大なる者は大成す。

我が力を容るる所無し。或は至らざる者と雖も、曾ち其の天を害すること無し。是先王の道なり。孔子の由りて以て人を教ふる所なり。)

「先王の道」は古文辞である六經にこそあり、その理解の度合いによって人格も伸長する。そのため、自分の力で教導するということがなく、天が与えた性質、能力を損なうこともない。これが先王の道であり、孔子の教育方法でもあると述べる。続けて、学問的な方法とその水準の高さにしても、古文辞はすぐれているとする(63)。

太氏解古書、天下難事。漢儒去周時未遠。齊魯諸儒、師授猶存。然其解經、十失四五。況於後世乎。雖徂徠之博、安能得厭人人、而息争訟。唯其說、不主己見。專徵古言而斷。是其所以超諸子為儒宗也。迺至若謂孔子之学与先王之教有異。仁齋先生駟夫及舌。假令孔子不奉先王之教、而別創學術、乃夫子則異端之渠魁也。豈謂天縱聖人有之哉。徂徠先生弁之甚勤、煥若日星。竊異、館下聰敏、未究其說乎。抑囿旧見乎、私心太惑焉。館下才高学博文辞縱横。非吾輩腐儒所敢企望、而今先以繁生、謙虛下問。敢竭鄙衷、不避忌諱。伏惟采摭。(太氏古書を解するは、天下の難事なり。漢儒周の時を去ること未だ遠からず。齊魯の諸儒、師授猶存す。然れども其の經を解するに、十に四五を失ふ。況んや後世に於てをや。徂徠の博と雖も、安んぞ能く人人を厭かしめ、争訟を息むることを得ん。唯其の說、己が見を主とせず。専ら古言を徵して断ず。是其の諸子を超へ儒宗と為す所以なり。迺ち孔子の学先王之教と異有りと謂ふがごとくに至りては、仁齋先生駟も舌に及ばず。假令孔子先王之教を奉ぜずして、別に學術を創めば、乃ち夫子は則ち異端の渠魁なり。豈に天縱の聖人之有りと謂はんや。徂徠先生之を弁するに甚だ勤め、煥たること日星のごとし。竊に異とす、館下は聰敏なれども、未だ其の說を究めず。抑旧見に囿せらるや、私心太だ惑ふ。館下才高く学博く文辞縱横なり。吾輩腐儒敢て企望する所に非ずして、今先んずるに繁生を以てし、謙虛下問す。敢て鄙衷を竭し、忌諱を避けず。伏惟采摭す。)

古書の解釈は天下の難事である。齊魯の儒者でさえ、十に四五の解釈を失っている。ましてそれ以降の儒者にとってはなおさらである。徂徠の学問は、自分の恣意的な見解を主とするのではなく、古文辞によって古書を解釈する点が孔子以来の学問の正統であることを力説している。明倫館諸生の才は優れているにも関わらず、いまだそうした学問体系である徂徠学を究めていない。そのため多くの諸生の願いとあわせて、徂徠学への理解を求めると述べている。

こうした徂徠学にもとづく教育は、周南によって明倫館教育の随所に反映されていくが、元文三年(一七三八)に周南が定めた「学館功令」でも、次のように掲げられた日課において実現されている(64)。

卯(午前六時～)起床、うがい、結髪、講堂にて經書の温習。

辰(同 八時～)会食、寮にて喫茶。

巳（同 十時～）寮にて自習、講義日には講堂にはいる。講義後は寮にて自習。

未（午後二時～）会食、寮にて喫茶、会業日以外は休息、外出者は酉の刻までに帰寮。

酉（同 六時～）寮にて自習、会読。

亥（同 十時～）日課を終えて休息、必要あるものは十二時まで自習。

周南は六経を存分に学ばせるためにも、明倫館諸生に対して学問への自主的な取り組みを重んじた。これは講釈という学習形態を重んじていた当時の朱子学派にみられた、形式的、画一的な教育の弊害に陥らないためのことであり、やはり朱子学を標榜して開校した明倫館創設当初の日課とは大きく異なる。因みに、明倫館が創設された享保四年正月公示の「文学并諸武芸稽古之次第」には、日課について次のようにある（65）。

一 儒書講釈例月十二日充之事

但於講堂可講之

一 兵書之講釈例月六日充之事

但於兵法場可講之

右講釈者朝五ツ時始可申事

これによれば、創設当初の明倫館教育が講釈中心のものであったことが分かる。徂徠学の教育論はあくまで自主性を重んじるものであり、それは受身的な態度を免れない講釈を重んじ、学習形態としても段階的で明確な基準を重んじていた朱子学的な発想とは相容れないものであった。

ただし、自主性が重んじられることは同時に、学問に対する各人の強い意志が持続されなければならない。「学館功令」ではその冒頭において、学ぶ者の心構えを次のように説いている（66）。

昔者我徂徠先生、年方四十始修古文辞。蓋十年作弁道。先生之於文也、可見焉耳。諸生遊館下、三年為一限、僅得千有余日。白駒之過、可立而竣。朝夕孜孜、務就功令、猶且恐不及焉。一日之中、遊惰竟時、俄失日半、三年不下二三百日。古者女功一月得四十五日。加之以夜之半也。勤惰之分、有如是者。（昔者我が徂徠先生、年方に四十にして始めて古文辞を修む。蓋し十年弁道を作る。先生の文に於けるや、見るべきのみ。諸生館下に遊ぶに、三年を一限と為し、僅かに千有余日を得る。白駒の過ぐるや、立ちて竣つべし。朝夕孜孜として、務めて功令に就くも、猶且つ及ばざるを恐る。一日の中、遊惰し時を竟らば、俄に日の半ばを失ひ、三年も二三百日を下らず。古者女功一月に四十五日を得る。之に加ふるに夜の半ばを以てするなり。勤惰の分、是のごとき者有り。）

師である荻生徂徠は、十年の歳月をかけて古文辞学を修めた。翻って、明倫館諸生が学ぶのはわずか三年間でしかない。それも日々の努力を怠れば、実質は二三百日を数えるに過ぎない。その一方で、古の機織りが夜を日に継いで一月を四十五日分としたごとく、勤勉と怠惰による差異はこれほどまでに大きいのであるとして、明倫館諸生への学問に対す

る真摯な取り組みを求めたのである。このように周南は「学館功令」において、徂徠の教育論に裏打ちされた自主性を重んじる学問観を打ち出しているのである。

2-5 山県周南の教育論の独自性

ここまでは師説の継承に焦点をあてて、周南の教育論について論じてきた。このように徂徠学を明倫館教育の随所へ受容することに努める周南ではあるが、教育論に関して言えば、単に師説を盲従するものではなかった。そこで、ここでは周南の独自の教育論について考察していく(67)。周南は『為学初問』のなかで、次のように述べている(68)。

人に上智中人下愚の三等あり。上智は聖人なり。堯舜禹湯文武周公孔子なり。其の仁天の如く、其の智神明の如し。天に日月あるが如く、物に麟鳳あるが如く、一有て二なし。学んで及ぶべからざる者なり。下愚は心耳閉塞して、義理の道なく、道を聞き大笑すといふ輩にて、聖人も之を何若ともする莫し。中等の人は、「性相近く、習相遠し」と孔子曰へり。善悪智愚の差別ありと雖も、五分七分の差ひにて、莫大の差なし。假令偕もよき生質なりと誉られし人も、志なく無能無才にて生長すれば、一生物の用にも立ず。劣りたりといはれし人と、さのみ差別なし。学問修行に志厚く、諸事に心を寄て器量を琢く人は、いつとなく才器のび上り、人の上にこゆるなり。

人には「上智」「中人」「下愚」の三種があり、「上智」とは「堯舜禹湯文武周公孔子」といった「聖人」を指す。人がいくら学んだとしても、及ぶことができない境地である。「中人」は、「善悪智愚」にそれほどの差はなく、学問に対する志の有無によって、善くも悪くもなるものを指す。そして「下愚」とは、たとえ聖人であってもどうすることもできない能力の低い水準のものを指す。さらに、志のない者への学問無用論を展開している(69)。

志なき人聖人も如何ともすることなし。信向なき人に教るは、石に物を種るが如し。生成すべき理なし。

と断じて、これらは「下にある人の教する道をいへり」としている。また同書において、学問は近代こそ盛なれ。昔はあるとも聞えず。されど国は国にて治り、家は家にてたち、世に闕たる事もなし。今時学問したりといふ人を見るに、よきは稀にて悪きは多し。武芸などはさもありなん。筆取て人並々に物書程ならばたりぬべし。なまじりに学問せんよりは、なさぬが増りぬべきか。・・・聞人にこそいふものなれ。しらぬ人に語るは詮なし。無益の事なり。

と述べている(70)。こうした考え方の前提にあるのが、徂徠の教育論であることは言を俟たない。周南はまた次のようにも述べている(71)。

徳性日々に養はれて、材気月々に長ず。又理を窮むる事は聖人の所作なり。衆人何として天地の理を窮め万物の性を尽くさんや。易の窮理は聖人大易を作り給ふ時の心遣をいふ。人々理を窮めよといへるに非ず。理を窮め性を尽くし道を履といふは、木を

作り石を作り其後屋舎を構ふるに似たり。木石は天地の生ぜし所に任せて、心を當作の所作に尽くすにしくはなし。聖人既に理を窮めて、此道を立て、天下の定規とし給ふ。聖人の定規に従ひて、心を徳行に尽くすにしくはなし。無用の理を窮めんとて、及ばぬ心力を尽くせば、是又徳性を傷ひ、材気を損して、学びに害あり。

ここでも周南は、各人の能力や分以上のものを求めてはならないとはっきり論じている。しかし、その一方で「論性」では、人の能力は学問・教育により伸びていくものであり、能力の低い者も向上することができ、小人も君子となることができると述べている(70)。

聖自聖、愚自愚、果一定而不可変。学問修為、果無益乎人乎。曰不然。今夫予章之材、可以為舟。斫焉夭於中道、槲棘之不如矣。五穀種之美者。苟為不培養、不若稊稗之熟。性豈不可培養。斫焉者比比皆是。凡物養之靡不長者。況人者万物之靈。精爽通于鬼神。学而思、思而学、進而又進。愚者可以進明。小人可以進君子。大器大成、小器小成。皆莫不成者。(聖は自ら聖、愚は自ら愚、果して一定して変ずべからざるか。学問修為し、果して人に益無きか。曰く然らずと。今夫予章の材、以て舟と為すべし。斫て中道に夭せば、槲棘に之如かず。五穀は種の美なる者。苟しくも培養せざることを為し、稊稗の熟するに若かず。性豈に培養すべからずや。斫る者比比として皆是なり。凡そ物之を養ひて長ぜざる者靡し。況や人なる者は万物の靈なり。精爽鬼神に通ず。学びて思ひ、思ひて学べば、進みて又進む。愚なる者は明に進むべし。小人は以て君子に進むべし。大器は大成し、小器は小成す。皆成らざる者莫し。)

性質は全く変化することがないのか、学問は人にとって無意味なものなのかという問題提起がなされ、それに対しては否としている。人は学んで思考することを繰り返すことで、段階的に成長へと進んでいくものであり、小人も君子に近づくことができ、大成しない者はいないとする。

これはさきの学問無用論とは全く相容れない。その理由としては著述の時期を反映していることが指摘されており、前者は徂徠の教育論を反映しており、明倫館で教授する以前か、もしくは教授することになってから早い段階で述べたものであり、後者は明倫館で教育者として学生と向き合う日々のなかで、周南の教育に対する考え方に大きな変化が訪れたことがきっかけになっているとされる(73)。

師の徂徠には全く眼中になかった庶民教育の点においても、周南は一步踏み込んでその実施を図っている。『毛利十一代史』によれば、「百姓町人たり共講釈等承り参度志有之ものどもは是又勝手次第袴着用可罷出候事」(74)として、袴の着用を義務づけることで百姓・町人にも聴講を認めている。実際に聴講者がいたという記録は残っていないが、藩校において庶民に門戸を開いたという例はこれが最初であり、ここにも師説とは異なる周南独自の教育論が反映していることを指摘できる。

周南はその人間観として、人は生まれながらに各人の役割が備わっており、世の中で役に立たない人間などいないという考え方を有している(75)。

王者を天子と申奉る。王者天道を奉じ万民を撫育し給ふ事、譬へば人の子の父の家督を継ぎ家法を守り家族を撫育し給ふ御職なればなり。凡人に四民の分あり。農工商の三民は力に食すとて、己々が家職を勤めて衣食の本をそなへ、器物を制し万物の有無を通用して、天下の養を担はし、天道に報ひ奉る。首上たる士は、假令一介士にても王者の羽翼となりて、天職を佐け奉る故に、士大夫の職をも天職といふなり。其の故は假令いかなる明主にても、一人の力にて国家を治め給ふ事ならず、いかなる賢臣にても、一二人の力にて国家の用を達する事能はず。必ず百官有司下部奴隸に至るまで、それぞれの役そなはりて国家の事全し。

どのような賢臣であっても、一人二人の力では国家が円滑に運営されることはない。しかも、「百官有司下部奴隸」に至るまでそれぞれの役割が備わっており、その力の集合によってはじめて国事は全うできるのであり、世の中に棄物などないとしている。

周南は、多種多様な学生が集う学校という教育現場での経験を重ねるなかで、天下の俊才を集めて塾教育を行っていた徂徠とは、自ずと異なる教育観を持つに至ったものと思われる。必ずしも能力が高いとは思われない学生であっても、学問への取り組み方次第で大いに伸びていくことは、教育現場ではしばしば目の当たりにすることである。そうした経験を重ねることで、人は誰でも伸びる要素を有していることを確信する。それがひいては教育することの喜びにつながっていくのである。周南は能力の有無や身分にとらわれることなく、各人に相応しい教育を行うことに専心することで、自らも教育者としての喜びを見出していったものと思われる。それは徂徠の書簡に(76)、

学校者治之本也、儒者之事也、以此觀之吾党士、獲志能行於当世者、宜莫次公若也。

縣先生其樂乎。(学校は治の本なり、儒者の事なり、以て之を觀るに吾が党士、志を獲て能く当世に行ふ者、宜しく次公に若くはなし。縣先生其れ楽しからんや)

とあることによってもうかがえる。これらは師説以外にも、教育現場での学生との関わりの中で、学ぶ者は誰でも伸びていくという教育論が自覚的に意識されるようになった結果と言えるのである。

2-6 結び

荻生徂徠は、明倫館について次のように述べている(77)。

松平民部大輔、萩ニ学校ノ様ナル事ヲ立テ、積菜ヲモナシ、扶持方等ノ料ニ五百石附置キ、毎年書籍ヲ求ル料ニ又五百石、合セテ千石程ノ事ニテ家来ニ学文ヲサスル故、今ハ彼ノ家中ニ学者多ク出来タリ。去共西国大名ノ習ヒ、公儀ヲ憚テ深ク是ヲ隱ス也。

萩藩の毛利家においては藩校教育が実を結び、多くの学者が育っていることを高く評価している。また、

学問之義、御上ニモ御崇敬被遊候故、近年世上学問ハヤリ候テ、下ニハ能キ学者モ出

来候得共、御家ノ儒者ハ弟子共迄好キ学者出来候ヲ承及不申候。御家ノ儒者ハ林家ノ流義多候処ニ、林家ノ学問、道春・春斎立置候家法破レ、三四十年以来殊之外衰微仕候。

として(78)、近年林家の学問が衰微していることとは対照的に、各藩では学問が興隆し、有能な学者も育ってきていると述べる。「下ニハ能キ学者モ出来候得共」の一節は、さきの『政談』でも取り上げている萩藩の明倫館を示唆した言である。そこに自らの高弟である周南の存在を高く評価していることは言うまでもないが、徂徠は明倫館をいわゆる人材育成のモデル校として掲げているのである。

そうした明倫館の教育理念には、周南によって徂徠の教育論が随所に継承されている。「長門国明倫館記」では、「民の父母」語を援用することで、天下を安んずる人材の育成を掲げ、また周南が学頭就任に際して公示した「学館功令」では、徂徠の教育論に裏打ちされた自主性を重んじる学問観を打ち出している。そして、各人に与えられた性質相応の個性の伸長を重んじ、世に有為な人材を目指すべきことを「達材成徳」の語として掲げ、明倫館教育の根幹に位置づけているのである。

同じ徂徠門下の服部南郭は、周南の教育者像を次のように記している(79)。

先生為人、愷悌易事。其教諭也、道而弗牽。開而弗達。循循誘掖、使其自己。以故生徒樂羣親師。遂致濟濟之盛。先生博聞之余、歷練時事。其執經陪侯講筵、或侍間燕、啓沃諷諭、陰尽匡濟之益。或与大夫有司出謀發慮、忠告裨益。臨斷大義、則據獨見之明。侃侃不可奪焉。人尽敬服。以喬所視、其數東也、同社之交固弘矣。先生温厚不以所長加人。毫無忌克。遊驩之際、胸襟恢宏、賞會言笑怡怡如也。皆無不推尚其為長者者。(先生人と為り、愷悌にして事へ易し。其の教諭するや、道びいて牽かず。開いて達せず。循循として誘掖し、其れをして己よりせしむ。故を以て生徒羣を楽しみ師に親しむ。遂に濟濟の盛を致す。先生博聞の余、時事に歷練す。其の經を執り侯の講筵に陪し、或は間燕に侍し、啓沃諷諭、陰かに匡濟の益を尽す。或は大夫有司とともに謀を出し慮を發し、忠告裨益す。大義を斷ずるに臨めば、則ち獨見の明に據る。侃侃として奪ふべからず。人尽く敬服す。喬が視る所を以てするに、其の數々東するや、同社の交固より弘し。先生温厚にして長ずる所を以て人に加へず。毫も忌克無し。遊驩の際、胸襟恢宏、賞會言笑怡怡たり。皆其の長者たるを推尚せざる者無し。)

人柄は温厚で師事しやすく、学生に学問を強要することはないが、その能力を引き出し、それによって自ら学ぶように仕向けることに長けていたとされる。徂徠門下による「同社の交」においても、その懐の深さと長者の風によって評価の高かったことが窺える。また、

先考為人温恭、孝友天性。其事良斎君及祖妣、日夜奉其嗜好、承顔怡怡。未嘗見憂戚之色。於昆弟宗族、愷樂輯穆、無少間言。遇子弟、得一善則賞揚、得一才則推奨。循循誘掖、不大声色。而時時警發。(先考人と為り温恭にして、孝友天性とす。其の良斎君及び祖妣に事ふるに、日夜其の嗜好を奉じ、承顔すること怡怡たり。未だ嘗て憂戚

の色を見ず。昆弟宗族に於けるに、愷楽輯穆し、少しの間言無し。子弟を遇するに、一善を得れば則ち賞揚し、一才を得れば則ち推奨す。循循として誘掖し、声色を大にせず。而して時時警発す。)

とあり(80)、子弟に善い行いがあれば賞揚し、すぐれた才を示せばそれを誉めて他の範として取り上げるといった様子を彷彿とさせる。また飽くことなく学生を導き、声色を大にすることもなく、一人一人を的確に啓発する教育を行った。いずれも個性の尊重、自学の重視に言及しており、これに士君子育成の重視が加わることで、教育者としての周南像が浮かび上がる。実際に、明倫館では山県周南のもとで多くの人材が育った(81)。

若山子濯、田望之、津士雅、倉彦平、滕子萼、田子恭、仲子路、曾子泉、林義卿、滝弥八、梶魯彦、秦貞父、彬彬輩出、咸潤色先生業、以学顕于世。其余士大夫、不必專学職、而傑然成才知名者、不可勝計。長門好学之俗、雖其天性、蓋先生教化之力亦居多云。(山子濯〈山根華陽〉、田望之〈小田村廊山〉、津士雅〈津田東陽〉、倉彦平〈小倉廊門〉、滕子萼〈和智東郊〉、田子恭〈田坂霸山〉、仲子路〈仲子岐陽〉、曾子泉〈増野有原〉、林義卿〈林東溟〉、滝弥八〈滝鶴台〉、梶魯彦〈山県魯彦〉、秦貞父〈秦守節〉のごとき、彬彬として輩出し、咸な先生の業を潤色し、学を以て世に顕はる。其の余の士大夫、必ずしも学職を専らにせざれども、傑然として才成り名を知らるる者、勝げて^か計^けふべからず。長門好学の俗、其の天性と雖も、蓋し先生教化の力亦居ること多しと云ふ。)

徂徠学を奉じる名高い門下生を続々と輩出し、長門の国に好学の風土を形成した功績が讃えられている。また学問の世界にとどまらず、各層における有為な人材を育成したことに言及していることも注目される。

師説である徂徠学を継承し、教育にあたっていた周南の様子については、『講学日記』前文によってその一端をうかがうことができる(82)。

余以一日之長、承乏学職。諸生新来者、問徂徠先生之学、頗能詰難。余輒挙数十言、以揚推其説。(余一日の長を以て、学職を承乏す。諸生新たに來る者、徂徠先生の学を問ひ、頗る能く詰難す。余輒ち数十言を挙げ、以て其の説を揚推す。)

新来の入学生で徂徠学について詰問してくる者に対して、周南は数十言を示して、その学説について懇切に説明するようにしていた。そうした疑問に対して真摯に対応する周南の姿に、多くの学生たちは次第に感化されていったようである。そうした様子は、さらに次のようにも記されている(83)。

承乏国校、勉強帥子弟、国中従事於学者、經学文章、一奉徂徠先生之繩墨、無復言旧学者。弟雖無自遂、樂此不知老之将至云爾。(国校を承乏し、勉強して子弟を帥ゐる。国中の学に従事する者、經学文章、一に徂徠先生の繩墨を奉じ、復た旧学を言ふ者無し。弟自ら遂ぐる事無しと雖も、此を楽しみて老いの將に至らんとするを知らざるのみ。)

周南が学頭に就任して以来、もはや明倫館では「旧学」である朱子学について言う者はなく、師説である徂徠学を教授する喜びと、老いを忘れて教育に携わることの楽しみを語るなのである。徂徠との邂逅がなければ、教育者としての山県周南の存在はなかったか、おそらく全く違うものになっていたはずである。

ただし、「其の学は一に徂徠先生の教へに遵い、経術文章を以て宗と為す」とまで評される周南ではあるが、こと教育に関して言えば、教育の範囲を限定し、教育の力にも限界を認める徂徠学を盲従するものではなく、人は学べば誰でも伸びていくものであるとする教育論も有していた。周南は学問によって人は誰でも伸びていく可能性を秘めており、能力の有無や身分に捉われることなく学ぶことで、それぞれに与えられた役割を果たすこともでき、世の中は治まっていくと考えていた。

それはひとえに、この世に生を受けたからには、誰でも生き得る価値と役割が等分に与えられており、役に立たない人間などいないとする人間観と、目の前の一人ひとりの個性と能力を伸ばし、自らの存在意義としての自己肯定感を与え、さらには世に有為な人材に育てたいと念願する教育者としての真摯な思いにもとづくものであったと思われるのである。

注

- (1) 山県周南の教育論について論じたものに、藤井明・久富木成大『山井崑崙・山県周南』（叢書日本の思想家一八、明德出版社、一九八八年）「五—3 周南の教育観」、河村一郎「山県周南一面」（『長州藩思想史覚書』、私家版、一九八六年）、同「山県周南の教育論」（『長州藩徂徠学』、私家版、一九九〇年）がある。いずれも師説の継承について若干の考察はあるが、それが明倫館教育にどのように反映しているかには言及されていない。
- (2) 「周南先生墓碑」（『周南先生文集』、山口県立山口図書館蔵）。周南の伝記については、注（1）前掲『山井崑崙・山県周南』に詳しい。
- (3) 同上。
- (4) 「徂徠学の特質」（日本の思想一二『荻生徂徠集』、筑摩書房、一九七〇年）。徂徠学については、今中寛司『徂徠学の基礎的研究』（吉川弘文館、一九六六年）、吉川幸次郎「徂徠学案」（日本思想大系三六『荻生徂徠』岩波書店、一九七三年）、田原嗣郎『徂徠学の世界』東京大学出版会、一九九一年）、岩崎允胤「荻生徂徠と古文辞学」（『大阪経済法科大学論集』第六十五号、一九九六年）、黒住真『近世日本社会と儒教』（ペリかん社、二〇〇三年）などの先行研究を参照した。
- (5) 注（4）前掲岩崎論文。
- (6) 『弁道』（注4前掲『荻生徂徠』）、一一頁。
- (7) 注（1）前掲『長州藩徂徠学』、一〇頁。
- (8) 周南における詩文の重視については、注（1）前掲『長州藩思想史覚書』にも指摘がある。『周南先生文集』には、五言古詩（十六首）、七言古詩（六首）、五言律詩（三十首）、七言律詩（五十三首）、

- 五言絶句（十三首）、七言絶句（百二十三首）の計二百五十一首が収められている。
- (9) 注(2)に同じ。「周南先生行状」(注2前掲『周南先生文集』)にも同じ内容が載る。
- また、この際の詩文唱酬については、信原修「正徳辛卯信使の来日と詩文唱酬の実態—山県周南・当壮菴一族らを中心に—」(『朝鮮学報』第百六十二輯、朝鮮学会、一九九七年)、注(1)前掲『山井崑崙・山県周南』、一二八～一四六頁。
- (10) 今中寛司『徂徠学の史的研究』(思文閣出版、一九九二年)。
- (11) 「与県次公」(『徂徠集』『詩集日本漢詩』汲古書院、一九八九年)。
- (12) 「送三浦生之京師序」巻六、「祭徂徠先生文」巻九、「学館功令」巻九、「上国相桂君」巻十(いずれも、注2前掲『周南先生文集』)などから窺える。
- (13) 注(12)前掲「送三浦生之京師序」。
- (14) 注(2)前掲『周南先生文集』。
- (15) 戦前の大著である岩橋遵成『徂徠研究』(関書院、一九三四年)を嚆矢として、注(4)前掲吉川論文、注(10)今中前掲書、注(4)岩崎前掲論文などがある。
- (16) 『弁名』(注4前掲『荻生徂徠』)、一六四頁。
- (17) 同上、一三七頁。
- (18) 注(1)前掲『山井崑崙・山県周南』、一六五頁。
- (19) 注(16)前掲『弁名』、一三六頁。
- (20) 同上、一三七頁。
- (21) 『論語』雍也篇「哀公問弟子孰為好學」の集注に「程子曰、學以至乎聖人之道也」(「論語章句集注」『四書五經』中国書店、一九八四年)、『孟子』滕文公篇上「孟子道性善」の集注に「聖人可學而至」(「孟子章句集注」前掲『四書五經』)などとあり、人は学べば聖人に至ることができるとする認識が、朱子学の教育論の最たる特徴であり、徂徠学はそれを否定するものである。
- (22) 『学則』(注4前掲『荻生徂徠』)、一九六頁。
- (23) 同上、一九六～一九七頁。
- (24) 『太平策』(注4前掲『荻生徂徠』)、四八五頁。
- (25) 注(16)前掲『弁名』、一六四頁。
- (26) 同上、一四三頁。
- (27) 『弁道』(注4前掲『荻生徂徠』)、二四頁。
- (28) 『徂徠先生答問書』(『荻生徂徠全集』第一巻、みすず書房、一九七三年)、四五六～四五七頁。
- (29) 注(24)前掲『太平策』、四六九頁。
- (30) 同上、四五五頁。
- (31) 同上、四五五～四五六頁。
- (32) 同上、四五五頁。
- (33) 注(1)に同じ。
- (34) 『毛詩正義』(『十三經注疏』、中華書局)。

- (35) 注(28)前掲『徂徠先生答問書』、四三〇頁。
- (36) 『弁道』、一七頁。
- (37) 『論語徵』辛(注28前掲『荻生徂徠全集』第四卷)、六一六頁。
- (38) 注(4)前掲『徂徠学の世界』、二一五頁。
- (39) 『論語徵』甲(注28前掲『荻生徂徠全集』第三卷)、四三五頁。
- (40) 注(4)前掲『徂徠学の世界』、二一六頁。
- (41) 注(27)前掲『弁道』、一八頁。
- (42) 同上、二三頁。
- (43) 同上、一七～一八頁。
- (44) 注(28)前掲『徂徠先生答問書』、四二六頁。
- (45) 同上、四二六頁。
- (46) 同上、四二六頁。
- (47) 同上、四二六頁。
- (48) 同上、四二九頁。
- (49) 同上、四三〇～四三一頁。
- (50) 『為学初問』(『日本倫理彙編』、育成会、一九〇一年)、一七一頁。
- (51) 同上、一七三頁。
- (52) 注(50)に同じ。
- (53) 注(2)前掲『周南先生文集』卷九。
- (54) 『孟子注疏』(注34前掲『十三經注疏』)。
- (55) 注(1)前掲『長州藩徂徠学』、四八頁。
- (56) 注(28)に同じ。
- (57) 注(16)前掲『弁名』、四八～四九頁。
- (58) 『尚書正義』(注34前掲『十三經注疏』)。
- (59) 『周礼注疏』(注34前掲『十三經注疏』)。
- (60) 注(50)前掲『為学初問』、一七一頁。
- (61) 「上国相桂君」(注2前掲『周南先生文集』卷十)。
- (62) 同上。
- (63) 同上。
- (64) 『日本教育史資料(二)』(富山房、一九〇三年)に、「卯時間板而興。盥嗽結束。外堂温読経書。辰時間板下堂。入厨会食。食畢入舎喫茶。巳時間板就業。各於其舎若講日則。聞板上堂。講畢入舎。各就其業。未時間板入厨会食。食畢入舎喫茶。除会業外。遊息従心。若欲出校弁事者。告館長廼出。館長不在則告都講。及酉時必帰。若以事留外廢夜業者。先具事由請館長。所許乃得出去。酉時間板就業。戌時間板入厨点心。畢即入舎就業。亥時間板罷業就安。若欲卒業者。聴及子時。不許達旦。」とある。

- (65) 『毛利十一代史』卷五十(名著出版、一九七二年)、二四八頁。
- (66) 注(2) 前掲『周南先生文集』卷九。
- (67) 当該問題の検討については、注(1) 前掲『山井崑崙・山県周南』、同『長州藩徂徠学』に多くを拠った。
- (68) 注(50) 前掲『為学初問』、二〇二頁。
- (69) 同上、一七〇頁。
- (70) 同上、一七二～一七三頁。
- (71) 同上、二〇一頁。
- (72) 注(2) 前掲『周南先生文集』卷九。
- (73) 注(1) 前掲『山井崑崙・山県周南』、一七〇～一七一頁。
- (74) 注(65) に同じ。
- (75) 注(50) 前掲『為学初問』、二一三頁。
- (76) 「父雲洞先生」(注11 前掲『徂徠集』)。
- (77) 『政談』卷四(注4 前掲『荻生徂徠』)、四四二頁。
- (78) 『学寮了簡書』(注28 前掲『荻生徂徠全集』第一卷)、五六五頁。
- (79) 注(2) 前掲「周南先生墓碑」。
- (80) 注(8) 前掲「周南先生行状」。
- (81) 同上。
- (82) 『講学日記』(山口県立山口図書館蔵)。
- (83) 「与富春叟」(注2 前掲『周南先生文集』卷十)。

第三章 明倫館の命名にみる徂徠学の影響

3-1 本章の目的

藩校の命名は、目指す教育理念を端的に表明するものである。そして、その多くは儒教の経典の中から、藩士子弟の学問教育の内容や方法にふさわしいものが選ばれた。享保四年（一七一九）に創設された明倫館の命名を担当したのは山県周南であり、その出典は『孟子』である（1）。

しかし、その出典箇所について先行研究では揺れが見られる。たとえば、同時代的資料である「明倫館積菜儀注序」には次のようにある（2）。

孟子曰、設為庠序学校以教之、皆所以明人倫也。人倫明於上、小民親於下。

同様に、『毛利十一代史』にも次のようにある（3）。

明倫館 滕文公篇、設為庠序学校以教之、皆所以明人倫也、人倫明於上、小民親於下
右之額字山県正助考之

その一方で、『山口県教育史（旧版）』が、

明倫の二字は孟子の滕文公篇に「設為庠序学校以教之、皆所以明人倫也。」とあるより取つたのである。

とする（4）のをはじめとして、『萩市史』でも次のように記している（5）。

「明倫館」という学館の名は、『孟子』の「設為庠序学校以教之、皆所以明人倫也」から採ったものである。

また、『近世藩校の総合的研究』においても、

名古屋・金沢・萩・田辺藩等の明倫堂・明倫館は孟子、滕文公篇「設為庠序学校以教之、皆所以明人倫也」

とあるように（6）、先行研究における「明倫」の語の出典箇所の記述には、同時代的資料に対してしばしば相違が見られるのである。

こうした出典箇所についての揺れは、命名に込められた教育理念に対する理解を不十分なものにせざるを得ない。たとえば、久富木成大氏が明倫館の命名について、原文における「明人倫」だけを取り上げて、

「人倫を明らかにする」という、孟子の説くことばこそ、学校の出発点でもあり、しかも、究極の到達点でもあるという確信が、周南にはあった。そこで迷うことなく、

この明倫の二字をとって、新しい藩校の名を、明倫館とすることにしたのである。

と述べている（7）。しかし、「人倫を明らかにする」に続く「人倫上に明らかにして、小民下に親しむ」（「人倫明於上、小民親於下」）の一節も踏まえなくては、「明倫」の二字に込められた周南による命名の本旨は理解されないはずである。当該問題に再検討を加え、出典箇所を確定することは、明倫館創設に際しての教育理念を明らかにすることとも同義で

あり、等閑視することのできないものである。

さらに、命名に関わる問題点として、荻生徂徠に師事した山県周南が藩校の創設に際して、徂徠学では批判の対象であるはずの『孟子』を出典とする命名を行ったのは何故かということがある。当該問題について若水俊氏は、「藩校の名を『孟子』に求めたのは、周南が護園学を抑えて、朱子学に譲歩妥協した結果と考えられる」として、藩校の創設を行った五代藩主毛利吉元が朱子学を重んじていたため、それに憚ったということを主な理由に挙げている(8)。しかし、山県周南が出典を『孟子』に求めたことが、そのまま朱子学に対する譲歩妥協であったとは言えず、当該問題を再検討する余地は多分にある。

本章は、明倫館の命名に際して、山県周南が師である荻生徂徠の教育論の反映も意図していたことを指摘するとともに、「明倫」の語の出典箇所についても確定することで、長州藩校明倫館の命名の本旨を明らかにしようとするものである。

3-2 荻生徂徠の孟子観

一般に、徂徠学において『孟子』は批判の対象と考えられている。ここではまず、徂徠の『孟子』に対する態度を確認しておきたい。『弁道』の冒頭には、次のようにある(9)。

道難知亦難言。為其大故也。後世儒者、各道所見。皆一端也。夫道先王之道也。思孟而後、降為儒家者流、乃始与百家争衡。可謂自小已。……後世心学、胚胎于此。

(道は知り難く亦言ひ難し。其の大なるが為の故なり。後世の儒者は、各見る所を道とす。皆一端なり。夫れ道は先王の道なり。思・孟よりして後、降りて儒家者流と為り、乃ち始めて百家と衡を争ふ。自ら小にすと謂ふべきのみ。……後世の心学は、此に胚胎す。)

ここで徂徠のいう「道」とは、堯・舜の「先王の道」を指す。それが子思・孟子からは、「先王の道」の一端を「道」と捉える「儒家者流」となってしまった。「後世の心学」とは朱子学を指すが、その源流は「思・孟」にあるとしている。また同書において、孟子批判は次のように展開される(10)。

至於孟子、則強弁以聒之、而欲以是服人。夫以言服人者、未能服人者矣。蓋教者施於信我者焉。先王之民、信先王者也。孔子門人、信孔子者也。故其教得入焉。孟子則欲使不信我之人、由我言而信我也。是戦国遊説之事、非教人之道矣。予故曰、思孟者与外人争者也。(孟子に至りては、則ち強弁して以て之を聒しくして、是を以て人を服せんと欲す。夫れ言を以て人を服せんとする者は、未だ人を服すること能はざる者なり。蓋し教へなる者は我を信ずる者に施す。先王の民は、先王を信ずる者なり。孔子の門人は、孔子を信ずる者なり。故に其の教へは入ることを得る。孟子は則ち我を信ぜざるの人をして、我が言に由りて我を信ぜしめんと欲するなり。是戦国遊説の事にして、人を教ふるの道に非ず。予故に曰く、思・孟なる者は外人と争ふ者なりと。)

孟子は、「言を以て人を服する」遊説家の類であり、先王や孔子とはおのずから異なるという。同じく『弁道』では、次のようにも述べている(11)。

先王四術、詩書礼楽、是三代所以造士也。……蓋書者、先王大訓大法、孔子所畏、聖人之言是也。古之時、舎此則無書。書唯此耳。後王君子所尊信、学者所誦読、先王安天下之道具是矣。……孟子不信書。其称述堯舜、将何所睹記。宜其昧於先王安天下之道也。(先王の四術は、詩書礼楽にして、是三代の士を造りし所以なり。……蓋し書なる者は、先王の大訓大法、孔子の畏るる所にして、聖人の言は是なり。古の時、此を舎つれば則ち書なし。書は唯だ此のみ。後王君子の尊信する所、学者の誦読する所にして、先王の天下を安んずるの道は是に具れり。……孟子は書を信ぜず。其の堯・舜を称述するは、将に何の睹記する所ぞ。宜なり其の先王の天下を安んずるの道に昧きことや。)

「孟子は書を信ぜず」とするのは、『孟子』尽心下の「尽く書を信ずるは、則ち書無きに如かず」の一節に批判の矛先を向けているのだろう。徂徠からすれば、「先王の大訓・大法にして、孔子の畏るる所、聖人の言」である「書」に、「先王の天下を安んずるの道」が具わっているのである。それを尊ぶことのない孟子は先王の道に昧く、そのため真に天下を安んずるための学問ではないとするのである。さきに示した『弁道』の「後世の心学」が「思・孟」に「胚胎」するとの一節でも明らかなように、徂徠学の批判の対象である朱子学は、孟子の系譜をひくものとの捉え方を見せている。

それに対して、徂徠は「先王の道」を伝えるのは、孔子であると考えていた(12)。

総ジテ天下国家ヲ治ムル道ハ、古ノ聖人ノ道ニシクハナシ。古ノ聖人堯・舜・禹・湯・文・武・周公ハ天下ヲ能治メ玉ヒテ、其道ヲ後世ニ遺シ玉フ。其道ニ不依シテ、是ヲ救フ道ヲシルベキ様ナシ。此道ヲ伝ヘ玉ヘルハ孔子ニシテ

と述べて、「古ノ聖人ノ道」に依らなければ、「天下国家ヲ治ムル道」を知ることはできず、それを現在まで伝えるのが孔子であるとしている。また、次のように述べる(13)。

教に古今なく。道にも古今なく候。聖人の道にて今日の国天下も治り候事に候。

聖人の教えや道には、古い、新しいといった別はない。あくまでも聖人の道は普遍であり、それを学ぶことで今日の天下国家も治まることを強調している。

ただし、徂徠は、朱子学や伊藤仁斎に対する反駁のために、『孟子』を批判の対象に仕立て上げている節がある(14)。そのため、『孟子』を全面的に否定しているということには疑問が残る。じつは徂徠は、『孟子』を批判の対象としてだけ見てはいない。そのことは、『弁道』の次の箇所から窺える(15)。

大学者、古大学有養老序齒等礼。是其義也。明德者君徳也。左伝諸書可稽焉。明者举而明之也。非磨而明之之謂也。即謂養老序齒之事也。人倫明於上、而小民親於下。故曰親民。何必改新民。新民出康誥、革命之事也。大学之教、豈以之乎。……凡此類、皆失古義之大者也。(大学なる者は、古の大学に養老・序齒等の礼有り。是其の義なり。)

明德なる者は君徳なり。左伝諸書稽ふべし。明なる者は挙げて之を明らかにするなり。磨きて之を明らかにするの謂ひに非ざるなり。即ち養老序齒の事を謂ふなり。人倫上に明らかにして、小民下に親しむ。故に親民と曰ふ。何ぞ必ずしも新民に改めん。新民は康誥に出で、革命の事なり。大学の教へは、豈に之を以てせんや。・・・凡そ此の類、皆古義を失するの大なる者なり。)

ここでは「古義を失するの大なる者」として、朱子学による訓詁の誤りを指摘している。とりわけ、「人倫上に明らかにして、小民下に親しむ」の一節について、「明」の本義を内面を磨く意味ではなく、倫理を体現して明らかにする意としていることや、本来は民がすぐれた君子を慕う意味での「親民」であるところを、朱子学では君子が民を変革しようとする「新民」に改めている誤謬を指摘するなど、古文辞を重んじる徂徠学の妥当性を顕示している。

「人倫上に明らかにして、小民下に親しむ」の一節は、さきに触れた「明倫」の語の出典箇所でもある。これが『孟子』からの引用であることを明示しないのは、それが同じ『弁道』における批判の対象だからであろう。しかし、「人が修めるべき道を、上に立つものが体現することで、人々もそれを見て感化され、世の中もうまく治まる」というこの一節は、じつは「君子」のあり方や、「君子」と「民」との関係において、徂徠の考えとも全く矛盾するものではない。むしろ、徂徠の教育思想からは評価されるべき一節であり、そうした肯定の態度があればこそその援用であったことが注目される。

さらに言えば命名した周南自身が、はっきりと孟子を肯定していることを指摘できる。周南の『為学初問』には次のようにある(16)。

荀孟の時諸侯無道至極せり。其の人皆桓文の覇業を口に藉て私をする。二帝三王に及ばねば、桓文を引て祖とせり。荀孟の深く五覇を擯斥せられしは、当時の無道を正さん為に、其の本づく所を攻む。根をたち源を塞くの術なり。孔子の旨に殊なるに非ず。

さきに触れたように『弁道』において徂徠は、孟子は「言を以て人を服する」遊説家の類であり、先王や孔子とは異なるという批判を加えている。一方、周南はそれについて「当時の無道を正さん為に、其の本づく所を攻む。根をたち源を塞くの術なり」として、孟子を肯定し、「孔子の旨」に異なるものではないと述べている。これは師説との大きな相違である。これらのことから徂徠のみならず、命名を担当した周南自身が、孟子に対する否定的な捉え方をしていなかったことを指摘できるのである。

3-3 「明倫」の語に託された教育理念

前節では、「明倫」の語の出典箇所である「人倫上に明らかにして、小民下に親しむ」の一節が、徂徠においても評価すべき内容として捉えられていたことを指摘した。それでは、この一節における「上」にあたる「君子」、「下」にあたる「小人」に対する徂徠の

考え方はどのようなものであったのか。次の文章を見ていきたい(17)。

君子者在^レ上之^レ称也。子男子美称、而尚之以君。君者治下者也。士大夫皆以治民為職。故君尚之子以称之。是以位言之者也。雖在下位、其德足為人上、亦謂之君子。是以德言之者也。古之人学而成德、則進之士以至大夫。故曰君子者成德之称。(君子なる者は上に在るの称なり。子は男子の美称にして、之に尚^レふるに君を以てす。君なる者は下を治むる者なり。士大夫は皆民を治むるを以て職と為す。故に君之に子を尚へて以て之を称す。是位を以て之を言ふ者なり。下位に在りと雖も、其の徳人の上たるに足らば、亦之を君子と謂ふ。是徳を以て之を言ふ者なり。古の人学んで徳を成せば、則ち之を士に進め以て大夫に至る。故に曰く「君子なる者は成徳の称なり」と。)

君子とは、「上に在」り、「下を治むる者」である。また、「君子なる者は成徳の称なり」の一節を用いているが、さらに、

学んで徳を成すを君子と曰ふ。民を安んじ国家に長たるの徳を成すを謂ふ。

とある(18)。徂徠は、「民を安んじ国家に長たる」君子の徳について、

君子は天職を奉ずる者なり。其の財を理め、民をして其の生に安んぜしむ。是れ先王の道の義なり。

とも述べている(19)。なお、「先王の道」については、

孔子之道、先王之道也。先王之道、安天下之道也。孔子平生、欲為東周、其教育弟子、使各成其材、將以用之也。・・・安天下以脩身為本。然必以安天下為心。是所謂仁也。

(孔子の道は、先王の道なり。先王の道は、天下を安んずるの道なり。孔子は平生、東周を為めんと欲し、其の弟子を教育し、各々をして其の材を成さしめ、將に以て之を用ひんとするなり。・・・天下を安んずるは身を脩むるを以て本と為す。然れども必ず天下を安んずることを以て心と為す。是所謂仁なり。)

とある(20)。徂徠にとって教育による「材」の育成は、専ら「天下を安んずる」ことが目的であり、そうした心がけで「身を脩むる」ことを「仁」であるとしている。

「仁」については、

就中君子之道を申候はば仁之外に又肝要なる儀無御座候。

とあり(21)、徂徠が「君子の道」を語る際、「仁」をいかに重視していたかが分かる。徂徠は「仁」を、『詩経』小雅「南山有台」を出典とする「民の父母」語を用い、「是に踰え候よき注解御座なく候」(22)と述べている。徂徠の教育論の対象は、つねに天下国家を治める君子を想定しており、「民の父母」とは、徂徠が理想とする「君子」としての仁徳を示す端的な語である(23)。

仁者謂長人、安民之徳也。(仁なる者は人に長となり、民を安んずるの徳を謂ふなり。)

とあり(24)、さらに、

聖人之道、要歸安民。故君子苟不依於仁、何以能和順聖人之道、以養成其徳乎。・・・且君之使斯民学以成其徳、將何用之。亦欲各因其材以官之、以供諸安民之職已。(聖人

の道は、要は民を安んずるに帰す。故に君子苟も仁に依らずんば、何を以て能く聖人の道に和順して、以て其の徳を養成せんや。・・・且つ君の斯の民をして学んで以て其の徳を成さしむるは、將に何くに之を用ひんとするか。亦各其の材に因りて以て之を官にし、以て之を民を安んずるの職に供せんと欲するのみ。）

と述べている(25)。つまり、徂徠は「民を安んずる」人材として、仁徳を備えた「民の父母」たる「君子」の育成を掲げるのである。さらに、

人君タル人ハ、タトヒ道理ニハハヅレ、人ニ笑ハルベキコトナリトモ、民ヲ安ンズベキコトナラバ、イカヤウノコトニテモ行ハント思フホドニ、心ノハマルヲ眞実ノ民ノ父母トハ云ナリ。

として、民に対する献身的な態度を求めている(26)。

その一方で、徂徠からすれば「民」とは、あくまでも「君子」によって安んぜられる対象である。徂徠は「君子」と「民」との端的な相違を、学ぶ存在かどうかであると見ている(27)。

学んで而して士と成る。学ばざれば則ち民たり。

また、「君子」に対置される「民」について、次のように述べている(28)。

小人亦民之称也。民之所務在營生。故其所志在成一己、而無安民之心。是謂之小人。其所志小故也。雖在上位、其操心如此、亦謂之小人。(小人も亦民の称なり。民の務むる所は生を営むに在り。故に其の志す所は一己を成すに在りて、民を安んずるの心無し。是を之小人と謂ふ。其の志す所小なるが故なり。上位に在りと雖も、其の心を操ること此の如くんば、亦之を小人と謂ふ。)

徂徠にとって「小人」と「民」とは同義である。「民を安んずるの心」がなければ、それもまた「小人」である。

ここで萩藩校の創設目的を、周南の「長門国明倫館記」に求めてみる(29)。

謹按庠序之設、將使斯民納乎軌焉者也。(謹んで按ずるに庠序の設は、將に斯の民をして軌に納れしめんとする者なり。)

「將に斯の民をして軌に納れしめんとす」とは、さきに示した徂徠『弁名』の「且つ君の斯の民をして学んで以て其の徳を成さしむるは、將に何くに之れを用ひんとするか。亦た各其の材に因りて以て之れを官にし、以て之れを民を安んずるの職に供せんと欲するのみ」を踏まえていると思われる。つまり、これも「民を安んずる」君子の育成を掲げるものである。

また同じく「長門国明倫館記」には、「君子」と「民」との対置についても徂徠の影響が認められる。

君子若欲綢繆国家、宜莫若学。愷弟君子民父母。伝曰、学殖也。不学将落。教之不落。其為父母也大矣。(君子若し国家を綢繆せんと欲せば、宜しく学ぶに若くは莫かるべし。愷弟の君子は民の父母なり。伝に曰く、「学は殖なり。学ばずんば將に落ちんとす」と。

之を教へて落さず。其の父母たるや大なり。)

これは、徂徠の次の記述を踏まえていよう(30)。

民の学ばざるは其の常なり。故に君子は其の学ばざるを以てして之れを捨てず。

さらに、周南の「明倫館積業儀注序」にも、

学記曰、君子如欲化民成俗、其必由学乎。玉不琢不成器。人不学不知道。是故古之王者、建国君民教学為先。故治平之要、莫学如焉。(学記に曰く、君子如し民を化し俗を成さんと欲せば、其れ必ず学に由らんか。玉琢かざれば器を成さず。人学ばざれば、道を知らず。是の故に古の王者、国を建て民に君たるに教学を先と為す。故に治平の要、学に如くは莫し。)

とあり(31)、「君子」による「民」の教化は「必ず学に由」り、「治平の要」も「学に如くは莫し」としている。

徂徠学における学問の捉え方について、田原嗣郎氏は次のように述べている(32)。

徂徠学の基本的な立場からすれば、先王=聖人の道は後世の人間にとってすべての行為の前提となる。その行為の基礎となるのが、学問である。学問は聖人の道に自覚的・主体的に接して、それを自らの身につける行為だからである。聖人の道は天下・民を安んずるための道であるから、その行為もまた究極的には安民・安天下を目的としている。

そうした学問の具体的内容として、「先王の四術」なる「詩書礼楽」があり、「君子」はそれを学ぶことで民を安んじ、国家の長としてふさわしい徳を成すのである。徂徠は『弁道』の中で、

脩徳有術。立其大者、而小者自至焉。此孔門所以用力於仁也。(徳を脩むるに術あり。

其の大なる者を立つれば、小なる者自ら至る。此孔門の力を仁に用いし所以なり。)

と述べている(33)。

この「大なる者を立つれば、小なる者自ら至る」という徂徠の考え方は、『徂徠先生答問書』にも同様に見られる(34)。

人の上に立候人は。身の行儀悪敷候へば。下たる人侮り候而信服不申候事。人情の常にて御座候故。下たる人に信服さすべき為に身を修候事にて。兎角は天下国家を治め候道と申候が聖人の道の主意にて御座候。

これらは『孟子』の「人倫上に明らかにして、小民下に親しむ」とも相通ずるものである。すなわち、この一節において「上」を「君子」、「小民」を「小人」「民」に置き換えれば、人が修め守るべき道(「人倫」)を、君子(「上」)が明らかにすれば、小人・民(「小民」)はおのずから教化され、世の中も治まると読み替えられる。したがって、「明倫」の語の出典であるさきの『孟子』の一節は、徂徠の考えとも矛盾なく合致しており、徂徠が高く評価した一節としても首肯できるのである。

3-4 朱子学と徂徠学の接点

明倫館は、享保四年（一七一九）に五代藩主毛利吉元（一六七七～一七三一）により創設された。吉元は林大学頭信篤（一六四四～一七三二）に朱子学を学び、聖廟に安置する孔子と四賢の木主の尊号も信篤の揮毫になる。また、初代学頭を務めた小倉尚斎（一六七七～一七三七）も、京都で伊藤坦庵（一六二三～一七〇八）に師事し、のち江戸に赴いて信篤の門に入るなど、明倫館はその創設に際して朱子学を標榜する藩校であるとされてきた。その後、第九代学頭に就任した山県太華（一七八一～一八六六）によって、同校の学統学派は周南以来の徂徠学から、再び創設当初の朱子学へと転換された。太華は、嘉永二年（一八四九）の明倫館移転拡充の由を記した「重建明倫館記」の中で、「明倫」の語について次のように述べている（35）。

而明倫之名、不易其旧者何也。蓋先公建学、文武造士、其要以明人倫為重也。且文武之学、不本諸倫理、則文流於浮華、武陷於暴厲、不足以造士矣。故凡入学者、先以此為基本、而講究文芸、精鍊武事。資之以師友、勉之以歲月。以成其德達其材。……而其要歸於明人倫、則其名館之義、不亦至重乎。是其守旧而確乎不可易者也。（而して明倫の名、其の旧を易へざるは何ぞや。蓋し先公学を建て、文武の士を造るに、其の要は人倫を明らかにするを以て重しと為すなり。且つ文武の学は、諸を倫理に本づかざれば、則ち文は浮華に流れ、武は暴厲に陥り、士を造るに足らず。故に凡そ学に入る者は、先ず此を以て基本と為し、而して文芸を講究し、武事を精鍊す。之を資くるに師友を以てし、之を勉むるに歲月を以てす。以て其の徳を成し其の材を達す。……而して其の要は人倫を明らかにすることに帰すれば、則ち其の館に名づくるの義、至って重からざるや。是其の旧を守りて確乎として易ふべからざる者なり。）

ここで、「明倫」の語を変えないのは何故かと俎上に載せているのは、学統学派が変わる際に藩校名を変えることが多いことに鑑みてのことである。朱子学的な観点からすれば、「明倫」は何ら問題のない語のはずである。それにも関わらず、藩校教育の要訣は人倫を明らかにすることであると強調しているところを見ると、太華は周南による「明倫」の命名に徂徠学の考えが反映されていることを認識していたために、「人倫上に明らかにして、小民下に親しむ」の一節にあえて触れなかったものと思われる。天保弘化年間の村田清風の建白書には、次のようにある（36）。

泰桓院殿様御師範御因に付、御頼にて、被書調、明倫館学頭聖堂会頭相勤候小倉尚斎へ被仰付、尚、御側儒佐々木源六、山県少介へ被仰付、釈菜式目、養老之礼、其外学館諸式相調、文道此時相開け、人倫上に明にして、小民下に親むの講釈、聴衆堂上に充、堂下に百姓、町人満ちけると、于今申伝、文道繁榮、……

明倫館創設の際に、「人倫上に明らかにして、小民下に親しむ」についての講釈が行われ、百姓、町人までもが聴衆として集ったとある。ここからもやはり周南による明倫館創

設における命名が、「人倫を明らかにする」ことにとどまらず、それに続く君臣関係による治世を踏まえた「人倫上に明らかにして、小民下に親しむ」の内容に重きが置かれていたことが分かる。周南は目指すべき藩校の教育理念を、師である徂徠も重んじる「明倫」の語に求めたのである。それは、孟子を「孔子の旨に殊なるにあらず」(37)と考える周南にとってはごく自然な帰結だったはずである。

周南が撰んだ「明倫」の語は、藩主毛利吉元をはじめとする朱子学を重んじていた人々にとっては何の異論も与えるものではなかった。ただし、それは徂徠の教育論にとっても評価されるべき内容を踏まえており、朱子学と徂徠学の接点として機能する語でもあった。そのため、若水氏のように「藩校の名を『孟子』に求めたのは、周南が護園学を抑えて、朱子学に譲歩妥協した結果と考えられる」(38)とするのとは異なり、むしろ周南は自らが置かれた立場で、徂徠学の教育論の反映を模索した結果として「明倫」の語に逢着し、それを藩校教育の理念をあらわす命名として実践したと言えるのである。

3-5 結び

長州藩校明倫館において、先行研究でしばしば揺れがみられる「明倫」の出典は、『孟子』滕文公篇の次の箇所である。

設為庠序学校以教之、皆所以明人倫也。人倫明於上、小民親於下。(庠序学校を設けし以て之を教ふるは、皆人倫を明らかにする所以なり。人倫上に明らかにして、小民下に親しむ。)

「明倫」の語を冠する藩校は数多いが、長州藩においては朱子学を重んじる藩主のもとで、徂徠学を重んじる周南が命名を担当するという独自の事情が存在した。創設時、朱子学を標榜する藩校であったにも関わらず、徂徠の弟子という立場からも命名に携わる周南にとって、「明倫」の語はその実質的な意味内容の点において、朱子学と徂徠学の接点となり得る稀有な語であったものと思われる。

徂徠の教育論の根幹は、民を安んずるために、学んで徳を成す君子の育成にある。徂徠の教育論で重視されているその点をとくに反映しているのが、「人倫上に明らかにして、小民下に親しむ」の一節である。これを踏まえた命名が行われることによって、長州藩校明倫館は、単に人としての道を明らかにするために学ぶのではなく、上に立つ者が倫理を体現するほどの自覚を持って学び、庶民の手本となっていこうとする人材の育成を理想として掲げたと言える。そして周南は徂徠学に即して、それこそが天下を安んずるための先王の道につながる方途と考えていたはずである。他藩で「明倫」と命名された藩校との相違は、まさにここにあるものと思われる。

冒頭で問題提起した先行研究における「明倫」の出典箇所の揺れについては、結局こうした命名の意図を有する長州藩校明倫館までも、ただ同名であるということによって思想

的、人的背景を視野に入れることなく、他藩の「明倫」を冠する藩校と同様に捉えてきたために生じた齟齬であったと言えよう。

注

- (1) 藩校の名称はその多くが、儒教の經典の中から選定されている。なかでも、「明倫」の語を冠する藩校は最も多かった。校名の一致について笠井助治氏は、「おおむね、儒教の經典の中から、藩士子弟の学問教育の内容や方法にふさわしい美名を選んだため、期せずして比較的同名のものが多く見られる」(『近世藩校の総合的研究』吉川弘文館、一九六〇年、二七頁)と述べる。いま「明倫」の語を冠する藩校を、前掲書「近世藩校一覧表」により、創設順に列挙すれば以下のようなものである。尾張藩「明倫堂」(設立年不詳、藩祖義直の代)、播磨・安志藩「明倫堂」(享保三)、長門・萩藩「明倫館」(享保四)、伊予・大洲藩「明倫堂」(延享四)、伊予・宇和島藩「明倫館」(寛延元)、日向・高鍋藩「明倫堂」(安永七)、羽前・新莊藩「明倫堂」(天明年間)、丹後・田辺藩「明倫館」(天明年間)、伊勢・亀山藩「明倫館」(寛政二)、加賀・金沢藩「明倫堂」(寛政四)、讃岐・丸亀藩「明倫館」(寛政年間)、信濃・小諸藩「明倫堂」(享和二)、信濃・上田藩「明倫堂」(文化八)、越前・大野藩「明倫館」(天保一五)。
- (2) 注(1)前掲『周南先生文集』巻五。
- (3) 『毛利十一代史』巻四十九(名著出版、一九七三年)。
- (4) 第一書房復刻版(一九八二年、初出は山口県教育会、一九二五年)。
- (5) 萩市史編集委員会(一九八三年)、四二二頁。
- (6) 注(1)前掲『近世藩校の総合的研究』、三一頁。
- (7) 藤井明・久富木成大『山井崑崙・山県周南』(明德出版社、一九八八年)、一五三頁。
- (8) 『徂徠とその門人の研究』(三一書房、一九九三年)、第四章第三節「明倫館の設立と周南」。また、藩主吉元が明倫館創設の際、林大学頭信篤に教示を求めた理由については、河村一郎『長州藩徂徠学』(私家版、一九九〇年)に、「吉元としては藩校の設置上、それを権威づけ且つ積奠等の便宜を得る為にも林家との緊密な繋がりがほしかったのであろう」(七頁)とある。また、小川国治・小川亜弥子『山口県の教育史』(思文閣出版、二〇〇〇年)に、「幕府と林家の権威に頼ったことも想定できるが、幕藩体制支持のイデオロギー的役割を持つ林家の朱子学が好都合であったからである」(七二頁)との指摘がある。
- (9) 『弁道』(日本思想大系三六『荻生徂徠』岩波書店、一九七三年)、一〇頁。
- (10) 同上、二五～二六頁。
- (11) 同上、三〇～三一頁。
- (12) 『政談』(注9前掲『荻生徂徠』)、三〇四頁。
- (13) 『徂徠先生答問書』(『荻生徂徠全集』第一巻、みすず書房、一九七三年)、四七二頁。
- (14) 注(8)前掲『長州藩徂徠学』。また、徂徠の孟子批判については、吉川幸次郎「徂徠学案」(注9前掲『荻生徂徠』)、岩崎允胤「荻生徂徠と古文辞学」(『大阪経済法科大学論集』第六十五号、一九

- 九六年)「V 朱子学と仁斎学の批判」に、当該内容の要点が述べられる。
- (15) 注(9) 前掲『弁道』、三五頁。
 - (16) 『為学初問』(『日本倫理彙編』育成会、一九〇一年)、二〇七頁。
 - (17) 『弁名』(注9 前掲『荻生徂徠』、一八一頁)。
 - (18) 『論語徴』甲(注13 前掲『荻生徂徠全集』第三卷)、三八三頁。
 - (19) 『論語徴』乙(同上)、五一六頁
 - (20) 注(9) 前掲『弁道』、一二頁。
 - (21) 注(13) 前掲『徂徠先生答問書』、四二六頁。
 - (22) 同上、四二六頁。
 - (23) 本論文第二章2-4-1「士君子育成の重視—『民の父母』語を中心に—」参照。
 - (24) 注(17) 前掲『弁名』、五三頁。
 - (25) 同上、五四頁。
 - (26) 『太平策』(注9 前掲『荻生徂徠』)、四六七頁。
 - (27) 『論語徴』丁(注13 前掲『荻生徂徠全集』第三卷)、六六〇頁。
 - (28) 注(17) 前掲『弁名』、一八二頁。
 - (29) 注(1) 前掲『周南先生文集』卷七。
 - (30) 『論語徴』辛(注12 前掲『荻生徂徠全集』第四卷)、六一八頁。
 - (31) 注(2) に同じ。
 - (32) 『徂徠学の世界』(東京大学出版会・一九九一年)、一三一頁。
 - (33) 注(9) 前掲『弁道』、二三頁。
 - (34) 注(13) 前掲『徂徠先生答問書』、四三〇~四三一頁。
 - (35) 『萩の維新関係碑文拓本集』(萩市郷土博物館編、一九九八年) 所収のものに拠った。
 - (36) 旧版『山口県教育史(上)』(第一書房復刻版、一九八二年、初出は一九二五年)、三四頁。
 - (37) 注(16) に同じ。
 - (38) 注(8) 前掲『徂徠とその門人の研究』、一七〇頁。

第四章 明倫館の集書にみる徂徠学の影響

4-1 本章の目的

従来、蔵書のありようから明倫館の教育を考察した研究は、管見の及ぶ限り見当たらない。しかし、蔵書の傾向を具体的に検討することは、明倫館で行われていた教育の特徴的な傾向を把握することに繋がるはずである。そこで本章では、創設期から移転拡充が行われる重建明倫館以前に収蔵された国書に焦点をあてて、その間における明倫館教育の特徴について明らかにしていきたい。なお、対象を国書に限ったのは、明倫館において中国の古典籍としての漢籍の収集については万遍なく行われており(1)、そこから特徴的な傾向に言及するのは困難であると判断したためである。

4-2 明倫館創設と山県周南による集書

享保四年(一七一九)に創設された明倫館が所蔵していた書籍について、その蔵書目録は五種が存在する。それらを成立順に並べれば次のようである。

- ①『明倫館御書目録』文政八年(一八二五)頃
- ②『明倫館書庫目録』天保十一年(一八四〇)頃
- ③『長門国萩明倫館書庫目録』嘉永三年(一八五〇)頃
- ④『明倫館御蔵書目録根帳写』嘉永五年(一八五二)以後
- ⑤『明倫館御書物目録』安政七年(一八六〇)以前

なお、明倫館旧蔵書については、とくに国書の収蔵状況を一瞥できるものとして、『明倫館国書分類目録』(2)がある。同目録は、明倫館が所蔵していた国書(散逸書を含む)について、書名、巻数、撰者、出版事項が記されている。さらに「初載目録」の欄が設けられており、さきの①～⑤の目録のいずれに初載されているかが分かる。これにより、明倫館旧蔵国書の全容が把握できるとともに、増加していく書籍の収蔵過程が追跡できる。

明倫館創設期から書籍の収集を主導したのは山県周南であった。従来、周南が藩から資銀十貫目を支給され、江戸で書籍の購入に当たったことや、当職の浦元敏が銀二十貫目を書籍費として提供していることなどが指摘されている(3)。また、「周南先生墓碑」(4)には次のようにある。

歴仕泰桓公觀光公、間年西東、蓋多歳矣。寵待益隆。先是先侯命創建頼宮、使国人子弟遊処、設師導、廩諸生、积菜养老之礼以時。大聚羣書、且六芸武技、諸当教習者、悉備其中。事皆稽古據式、雜以今制、乃既巍然中国而成。名曰明倫館。

(泰桓公〈毛利吉元〉觀光公〈毛利宗広〉)に歴仕し、間年西東すること蓋し多歳なり。寵待益々隆んなり。是より先、先侯命じて頼宮を創建し、国人の子弟をして遊処せし

め、師導を設け、諸生を廩し、積菜養老の礼、時を以てす。大いに羣書を聚め、且つ六芸武技、諸々の当に教習すべき者、悉く其の中に備はる。事皆古を稽へ、式に據り、雑はるに今の制を以てし、乃ち既に中国に巍然として成る。名づくるに明倫館と曰ふ。)さらに「周南先生行状」(5)にも、

四年遂命儒臣佐源六及先考、審議学宮制。乃據延喜式、考中華歷朝制、参以東都学式、新初領宮、興積菜養老之礼。及学成、命曰明倫館。集師儒、廩諸生、大聚典籍。(四年遂に儒臣佐源六(佐佐木源六)及び先考(山県周南)に命じて、学宮の制を審議せしむ。乃ち延喜式に據り、中華歷朝の制を考へ、参ずるに東都の学式を以てし、新たに領宮を初め、積菜養老の礼を興す。学成るに及んで、命じて明倫館と曰ふ。師儒を集め、諸生を廩し、大いに典籍を聚む。)

と見える。これらの記述からは、周南が明倫館開校にあたって実務を担当するとともに、その一環として「大いに羣書(典籍)を聚む」ことに尽力したことが窺える。また、徂徠は、明倫館における年間の運営費について次のように記している(6)。

松平民部大輔、萩ニ学校ノ様ナル事ヲ立テ、積菜ヲモナシ、扶持方等ノ料ニ五百石附置キ、毎年書籍ヲ求ル料ニ又五百石、合セテ千石程ノ事ニテ家来ニ学文ヲサスル故、今ハ彼ノ家中ニ学者多ク出来タリ。

つまり、年間の運営費と書籍費とは同額であり、あわせて約千石が計上されていた。『政談』におけるこの記述は、それだけ蔵書の収集に力を注いでいたことを示す傍証となるであろう。その際、収集する書籍の選別に、周南の教育思想が反映されたことは推察するに難くない。そのため、周南による書籍の収集傾向は、同時に創設期からの明倫館教育の特徴を映し出しているものと考えられる。以下、旧蔵国書からその特徴的な収集傾向について考察していく。

4-3 国書の収集傾向

4-3-1 随叢・漢文・詩文の領域に関する集書の特徴

創設期から重建以前の明倫館における国書の収集傾向を把握するため、その間の時間的な隔たりがほぼ重なる『明倫館御書目録』所載の国書を対象として、A「随叢」、B「漢文」、C「詩文」、D「音楽」、E「歴史」の領域にわたって、煩を厭わずそれらの書籍を列挙する。そして、そこから窺える明倫館教育の特徴について検討していきたい。

その際、朱子学や徂徠学といった学派の観点から(7)、次のように著者及び書籍名を掲げることとする。

●朱子学

- ◎荻生徂徠
- 徂徠門下及び影響関係
- ◇反朱子学

A、随叢

〈雑筆〉

『本朝俗談正誤』

- 安積覚編『舜水朱子談綺』〔三卷〕
- 藤井臧『閑齋筆記』〔三卷〕
- 室直清『駿台雑話』〔五卷〕(寛延三)
- ◎荻生徂徠『護園随筆』〔五卷〕(正徳四)『談余』『南留別志』〔五卷〕『可成談』
- 太宰春台『紫芝園漫筆』〔八卷〕
- 菅茶山『筆のすさみ』〔四卷〕
- 服部元喬『大東世語』〔五卷〕

B、漢文

- 山崎闇齋『經名考』『關異』『刑經』
- ◇熊沢蕃山『集義和書』〔一六卷〕『集義外書』〔一六卷〕
- 大高坂芝山『適從録』〔二卷〕(元禄一〇)
- 真野時繩『本朝学源浪華鈔』
- 浅見綱齋『氏族弁証』
- ◇伊藤仁齋『童子問』〔三卷〕(宝永四)
- ◇伊藤東涯『天命或問』『古今学変』〔三卷〕(享保三頃)『復性弁』『經学文衡』〔三卷〕(享保一九)『积親考』
- ◎荻生徂徠『弁道』五組『弁道集詰』『弁名』〔二卷・五組〕(享保二)『弁名集詰』『学則』二組(享保一二)『学則集詰』『徂徠先生答問書』〔三卷〕(享保一〇)
- 専庵信敬『徂徠学則弁』(宝暦二)
- 三浦衛興『徂徠先生学則解』二組(延享元)
- 服部南郭『南郭先生燈下書』(享保一九)
- 太宰春台『聖学問答』〔二卷〕(享保二一)『親族正名』(享保一〇)『斥非』二組『六經略説』(延享二)『弁道書』(享保二〇)
- 本多忠統『猗蘭子』〔三卷〕
- ◇原田直『經説拾遺』〔二卷〕(延享五)
- 冢田大峰『聖道弁物』〔二卷〕(寛政八)『聖道合語』〔二卷〕(天明八)『聖道得門』(寛政四)

陰山元質『田録図経』〔三卷〕(元禄一三)

窪井惟忠『古訓集要』〔三卷〕

C、詩文

〈詩文評・作詩作文〉

◎荻生徂徠『古文矩』(明和元)『文変』『訳文笙蹄』〔初編六卷〕『訳文笙蹄後編』

◎荻生徂徠編『四家雋』〔六卷・四組〕(宝暦一一)

○太宰春台『文論』(寛延元)『詩論』(寛延元)

○山県周南『作文初問』(宝暦五)

○藤元鳳『芸苑録』〔二卷〕(明和八)

◇伊藤東涯『用字格』〔三卷〕(元禄一六)『助字考』〔二卷〕(元禄六)

○林義端『文林良材』

『清百家絶句集』

『尺牘活套』

●藤原惺窩『文章達徳録』〔六卷〕(慶長四)

〈総集〉

『本朝詩英』

藤原明衡『本朝文粹』〔八卷〕

○林義端『扶桑名賢文集』〔五卷〕

●新井白石『停雲集』〔二卷〕(享保三)

○宇佐美恵『護園録稿』〔二卷〕(享保一二)

○福田元秀編『護園名公四叙』(享保一二)

○山県魯彦『瀨城新著』(寛延二)

西島蘭溪『題画詩類絶句抄』〔二卷〕

『和韓唱酬集』(天和三)

『兩東唱和』〔二卷〕(正徳元)

○『雞林唱和集』(正徳二)

○『桑韓唱和損篋集』〔一〇卷〕(享保四年)

○『桑韓唱酬集』(享保四)

○『兩関唱和集』(享保五)

『和漢筆談薰風編』(寛文元)

○『長門戊辰問槎』(寛延元)

『和韓唱和録』(延享四)

〈別集〉

- 菅原道真『菅家文章』
- 藤原惺窩『惺窩文集』〔一二卷〕（慶安四）
 - 林信勝『羅山文集』〔七五卷〕（寛文二）
 - 林恕『鷲峯文集』〔一二〇卷〕（元禄二）『本朝稽古篇』
 - ◇伊藤仁斎『古学先生集』〔六卷〕（享保二）
 - ◇伊藤東涯『紹述先生文集』〔三〇卷〕（宝曆八——一一）
 - 貝原益軒『自娛集』〔七卷〕
 - 安藤東野『東野遺稿』〔三卷〕（寛延二）
 - 新井白石『白石集』（正徳五）
 - ◎荻生徂徠『徂徠集』〔三〇卷〕
 - 『徂徠集集註』
 - 平野金華『金華集』（享保一六）
 - 室鳩巢『鳩巢集』（宝曆一一——一三）『補遺鳩巢集』
 - 田中逸『樵漁余適』〔一五卷〕（寛保元）
 - 太宰春台『春台文集』（宝曆二）
 - 梁田邦美『蛻巖集』〔八卷〕（寛保元）
 - 祇園瑜『南海一夜百首』（宝曆一一）
 - 山県周南『周南文集』〔一〇卷〕（宝曆一〇）
 - 滝鶴台『鶴台集』〔一〇卷〕（安永七）
 - 片山鳳翽『鳳翽集』〔一二卷〕（文化八）
 - 本多忠統『猗蘭台集』（享保一七）
 - 服部南郭『南郭集』〔一〇卷〕（享保一二—宝曆八）
 - 秋山玉山『玉山集』〔六卷〕（宝曆四）
 - 山根南溟『南溟集』〔三卷〕（寛政九）
 - 和智東郊『東郊集』〔五卷〕
 - 服部元雄『踏海集』〔八卷〕（明和六）
 - 山根華陽『華陽集』〔一〇卷〕（明和七）『濟州集』〔二卷〕
 - 田坂灞山『灞山集』〔六卷〕（明和二）
 - 山田時文『北海集』〔六卷〕（文化五）
 - 佐々木俊信『龍原集』〔五卷〕（文化元）
 - 細井平洲『嚶鳴館遺稿』〔一〇卷〕（文化四）『嚶鳴館集』〔六卷〕（宝曆一三）
 - 伊藤坦庵『坦庵集』〔一三卷〕
 - 田中良暢『蘭陵集』（寛保二）
 - 积空海『性靈集』

釈周興『半陶稿』

○大潮元皓『魯寮文集』〔二卷〕(延享二)

『明月篇』

内藤昌盈『官暇漫吟』〔二卷〕

『御書目録』の編纂は、明倫館創設から約百年間の隔たりがあるため、この点も勘案して上記の旧蔵国書について分析する必要がある。そこで、創設された享保四年(一七一九)以降、『御書目録』が編纂された文政八年(一八二五)にかけて、約百年間の明倫館について学頭とその在職期間を示すと次のようである。

初代 小倉尚斎(一七一九～一七三七) 朱子学

二代 山県周南(一七三七～一七四八) 徂徠学

三代 津田東陽(一七四八～一七五四) 徂徠学

四代 山根華陽(一七五九～一七六二) 徂徠学

五代 小倉鹿門(一七六二～一七七五) 徂徠学

六代 繁沢豊城(一七七五～一八〇六) 徂徠学

※山根南溟(一七七五～一七九一)の間は、繁沢豊城と兼任

七代 小田村藍田(一八〇六～一八一二) 徂徠学

八代 中村華嶽(一八一二～一八三五) 徂徠学

朱子学を標榜して開校した明倫館は、初代学頭の小倉尚斎こそ朱子学派であったが、二代学頭の周南以降は、その弟子たちに一貫して徂徠学が重んじられていたことが分かる。この傾向は九代学頭の山県太華が、明倫館教学を再び朱子学に転換するまで続く。それを踏まえた上で、創設期から収集された国書について、大局的に学派別の割合を見ると次のようである。

Aの「随叢」(雑筆)では徂徠の著作が三六パーセント、徂徠門下の著作を含めると五四パーセントとなる。またBの「漢文」領域においても、徂徠三四パーセント、徂徠学関係をあわせると五七パーセント、さらにそれらを含む反朱子学という枠で考えると、じつに八〇パーセントを占めている。同じくCの「詩文」領域について見ても、〈詩文評・作詩作文〉において、徂徠のものだけで四四パーセント、徂徠学関係をあわせて七二パーセントとなる。〈別集〉では、徂徠学関係で五〇パーセントを占め、朱子学派のものは、わずか九パーセントにとどまっている。

また、享保年間(一七一六～一七三六)以降、徂徠学に対する批判の書も多くあらわれるようになるが、明倫館においてそれらの書物はほとんど収集されることはなかった。主な書を列挙すると次のようである(8)。

谷口大雅『徂徠学則問答』
 高瀬学山『非聖学問答』
 上月専庵『徂徠学則弁』
 石川麟洲『弁道解蔽』
 松宮観山『学論』『学論二篇』『学脈弁解』
 井上金峨『読学則』『弁徴録』
 森大年『非弁道』『非弁名』
 深谷公幹『駁斥非』
 蟹養斎『非徂徠学』『弁復古』
 服部蘇門『然犀録』
 高志泉溟『時学鍼炳』
 唐崎広陵『弁道断論』『物学弁証』
 五井蘭洲『非物篇』『質疑篇』
 中井竹山『非徴』『閑距余筆』『建学私議』
 片山兼山『斥非弁名』『斥非弁道』『斥非学則』『弁護園学』『論語徴廢疾』『論語徴膏肓』
 『大学解廢疾』『中庸解廢疾』『山子垂統』
 細井平洲『道説』
 尾藤二洲『正学指掌』『素餐録』
 藪孤山『崇孟』
 古屋昔陽『古今学変考』
 平 瑜『非物子』
 亀井昭陽『読弁道』
 大田錦城『悟窓漫筆』
 石川香山『読書正誤』
 大橋訥庵『正学后言』『正学侮禦』

このうち明倫館蔵書に見られるのは、上月専庵の『徂徠学則弁』のみである。このように反徂徠学とも言うべき書物については、ほとんど収集の対象から外されていることが分かる。

4-3-2 徂徠学の詩文観の反映

ここでは、「詩文」の領域において、徂徠関係の蔵書が多く集められていることに鑑み、徂徠と周南の詩文観について見ていきたい(9)。徂徠は詩文について、たとえば次のように述べている(10)。

詩ナドハ無益ノ筋ノ様ニ理学者ノ申ニ依テ、白人ハ実ト思フベケレドモ、文字ヲ取廻

ハサネバ詩ハ作ラレヌ物也。文字ヲ取廻セバ、自ラ経書モ歴史モ見ル事故ニ、日本古、
四道ノ儒者ヲ立ルニモ、詩文章ノ学問ヲ経学ヨリハ上ニ置タル事也。

「理学者」とは朱子学派を指すが、彼らが「詩」を「無益」と捉えていることに対して、
徂徠は反駁する。徂徠にとって、詩とは単なる感情の発露ではなく、詩作により「文字」
を「取廻」すことで、それが経書や歴史にも通じる階梯であることを述べるのである。そ
れは文字の中にこそ、学問があるという信念でもあったように思われる。さらに、詩文無
益論に対しては次のように述べる(11)。

詩文章之学は無益なる儀の様には被思召候由。宋儒の詞章記誦などと申候を御聞入候事
年久敷候故。左様思召候にて可有御座候。まづ五経之内に詩経と申物御座候。是はた
だ吾邦の和歌などの様な物にて。別に心身を治め候道理を説たる物にて。又国天
下を治候道を説たる物にては無御座候。古の人のうきにつけうれしきにつけうめき出
したる言の葉に候を。其中にて人情によく叶ひ言葉もよく。又其時その国の風俗をし
らるべきを。聖人の集め置き人に教へ給ふにて候。是を学び候とて道理の便には成不
申候へ共。言葉を巧にして人情をよくのべ候故。其力にて自然と心こなれ。道理もね
れ。また道理の上ばかりにては見えがたき世の風儀国の風儀も心に移り。わが心をの
づからに人情に行わたり。高き位より賤き人の事をもしり。男が女の心ゆきをもしり。
又かしこきが愚なる人の心あはひをもしらるる益御座候。又詞の巧なる物なるゆへ。
其事をいふとなしに自然と其心を人に会得さする益ありて。人を教へ論し諷諫するに
益多く候。殊に理窟より外に君子の風儀風俗といふ物のある事は是よりならでは会得
なりがたく候。後世之詩文章は皆是を祖述いたし。殊に時代近候故会得成安き筋多候
故。右之心持にて学候へば其益多御座候。殊更吾邦にて学問をいたし候は。聖人と申
候も唐人経書と申候も唐人言葉にて候故。文字をよく会得不仕候ては聖人之道は難得
候。文字を会得仕候事は。古之人の書を作り候ときの心持に成不申候得ば濟不申儀故。
詩文章を作り不申候得ば会得難成事多御座候。経書計学候人は中々文字のこなれ無御
座候故。道理あらくこはくるしく御座候事にて候。依是日本之学者には詩文章殊に肝
要なる事にて御座候。

五経のうちの『詩経』を取り上げ、それを我が国の和歌のようなものであるとし、朱子
学派が言うような「道理」や国天下を治める道を説いた物ではないとする。徂徠はむしろ
巧みな言葉で「人情」をよく述べているとして、『詩経』においても経学を主とする朱子学
派とは明らかに異なる見解を披瀝している。さらに、「君子の風儀風俗」を知るという点に
おいて『詩経』に勝るものはないとし、後世の詩文章の範であるとする。そして、それを
学ぶにあたっては、「唐人言葉」(中国語)を会得し、古人の気持ちにならなければ、「聖人
之道」も得難いとするところに古文辞学を提唱する徂徠の考え方があらわれている。「聖人
之道」の会得には、経学だけでは不十分で、人情も養わなければならない。徂徠は『詩経』
こそ、その最良の教材であると述べている。そして徂徠は、天下国家を治める聖人の道は

すでに文字として書き残されているとする(12)。

凡ソ聖人ノ道ハ、文字ニ書キノセタリ。文字ハ異国ノ詞ニテ、聖人ハ又上代ノ人也。シカモ其智広大ナルコトハ、天地ノ窮リナキガ如ク、凡人ノ及ブベキニ非ズ。カカルユヘニ、学問ノ道ハ俗語詩文章ヨリ学ビ入リテ、異国ノ人ノ詞ヲ知り、歴史ヲ学ビテ、代々ノ制度風俗ノ違ヲ知り、上代ノ書ヲ学ビテ、古今ノ詞ニ違アルコトヲ知り、六経ニ心ヲ潜メテ、聖人ノ教ニ熟スレバ、其詞其ワザニ習染ム間ニ、イツトナク吾心アワヒモ移リ行キ、智慧ノハタラキモヲノヅカラニ聖人ノ道ニ違ハズナリテ、其後、今ノ世ノアリサマヲミレバ、天下国家ヲ治ムル道モ、掌ヲ指スガ如クニナルコトナリ。

学問としては詩文章を入口とし、語学と歴史を学び、制度の違いを知り、六経に精通することで、知らず知らずのうちに聖人の道を会得することになるという。つまり、徂徠は文字の中にこそ学問があり、聖人の道もこれを学ぶことで会得されるとするのである。

こうした徂徠の考え方をうけ、周南は詩文無益論に対して次のように述べている(13)。

理学好む人、武学好む人、詩文の学は無益なりとて誹る人あり。僻陋の見なり。古より猛将勇士歌を読み詩を作り、文雅の名伝はる人こそ多けれ。風雅の心なき人は、鄙野無骨にて、武徳も全からず。助けにこそ成るべけれ、何の害かあらん。又理学好む人の詩文誹るは、学問固陋にて、大道の旨に達せぬ故なり。「詩を学ばずして以て言ふことなし」と孔子曰し。古の詩と今の詩と、体こそかはれ、詩の徳は殊なる事なし。文雅の心なき人は、固陋偏僻にて、君子の域に入り難し。先づ詩を学び、それより文章を学び、文辞の道に通ずれば、六経古書もすめて、聖賢の道にも是より入ることなり。詩文何の害かあらん。専ら務むべき事なり。

これは一見して、徂徠の考えを祖述した内容であることが分かる。孔子の言を援用しながら、詩文の益について述べるとともに、「聖賢の道」の入口として詩文を学ぶ必要を説き、「専ら務むべき事」として積極的に携わることを提唱している。そして、

徂徠先生尸祝王李。王李以階古文、古文以階六経、六経以階経国、是已。豈有它哉。
(徂徠先生王李を尸祝す。王李は以て古文の階、古文は以て六経の階、六経は以て経国の階、是のみ。豈に它有らんや。)

と述べるように(14)、古文辞は六経の階梯であり、さらにそれが経国につながるものと認識している。それは古文辞を修めなければ、六経の理解に支障をきたし、本義を明らかにすることはできないとの主張からである。その意味において周南もまた、詩文と経学は決して別々のものではなく兼修されるべきものとしている。さらに、周南の詩文論には次のようにある(15)。

楽者歌、悲者哭。世豈可無文詞乎。凡人才子、寄思風雲、寓興山水、喜則南風之薰在茲。愠則柏舟之漣不排。(楽しむ者は歌ひ、悲しむ者は哭く。世豈に文詞無かるべけんや。凡人才子、思ひを風雲に寄せ、興を山水に寓し、喜べば則ち南風の薰茲に在り。愠れば則ち柏舟の漣排せず。)

ここでは詩文の意義を、人間の感情とともにある不可欠なものとして認識している。こうした周南の詩文に対する考え方は、師説をほぼ継承したものである。

また、詩文の領域における蔵書として注目されるのが、総集に分類される朝鮮通信使との詩文の応酬を収めた一連の唱和集である。とくに、正徳元年（一七一） 六代将軍徳川家宣の襲職を賀するために派遣された、第八次朝鮮通信使の来訪に際して、赤間関でこれを迎えた山県周南は、見事な詩文唱酬によって李東郭ら使節一行をはじめ、対馬藩の雨森芳洲から激賞されている（16）。周南は徂徠学の一翼を担う俊秀であって、この詩文唱酬は江戸にいた師の徂徠にとっても、その学問の水準の高さが世に認められる契機となった出来事であった。『雞林唱和集』には、その際に唱酬された詩文が収められている（17）。

さらに、享保四年（一七一九）七代将軍吉宗の襲職による第九次朝鮮通信使の来訪に際しても、萩藩からは周南の弟子達が出迎えている。このことは、とくに徂徠学の詩文における水準の高さが藩内でも認められていたことの傍証となろう。その際の作品が収められた『桑韓唱和損篋集』（享保四）、『桑韓唱酬集』（同上）、『両関唱和集』（享保中）もまた、徂徠学の影響下にある作品集であると考えてよいだろう。

4-3-3 徂徠学の音楽観の反映

〈管楽〉

『笙譜』『筳譜』『笛譜』『鳳笙譜』『蘆声譜』『鳳笙鞞鼓譜』『龍笛譜』

〈絃楽〉

『琵琶譜』『箏譜』『和琴譜』『頌琴譜』

〈打楽〉

『三鼓譜』『太鼓鉦鼓譜』

『御書目録』以降、こうした譜の蔵書は全く増えていないところを見ると、これらはみな明倫館創設期に周南によって収集されたと考えられる。その理由の一つには、徂徠の礼楽重視が挙げられる。

鼓舞天下、養其徳以長之、莫善於楽。故礼楽之教、如天地之生成焉。君子以成其徳、小人以成其俗、天下由是平治。（天下を鼓舞し、其の徳を養ひて以て之を長ずるは、楽より善きは莫し。故に礼楽の教へは、天地の生成のごとし。君子は以て其の徳を成し、小人は以て其の俗を成し、天下是に由りて平治す。）

とあり（18）、徂徠は「天下を鼓舞」し、「徳を養ひて以て之を長ずる」には、「楽」に及ぶものはないとしている。そして、君子が「徳」を成し、小人が「俗」を成すことで、天下は治まるとしているが、そのための重要な手段が「楽」なのである。

周南自身もそうした徂徠の影響を多分に受けており、何よりも徂徠から直接笙・箏を学

んでいる。そして、周南は次のように音楽の意義を述べている(19)。

理屈世界の見識にては、音楽は無用の長物とこそ思ふべけれ。争でか世を治め民を安んずるの具なることを知らん。人喜ばば歌ふ。歌へば手を拍てはやし、草木糸竹の音を以て人声を助け音曲をかざる。自然の人情なり。譬へば禽鳥の春陽に感じて囀るがごとし。故に音曲は天地の和気なり。

「理屈世界の見識」とは朱子学のことを指し、「音楽」を「無用の長物」と見ることに異を唱えている。人間にとって自然な感情の発露である音楽こそは、世を治め民を安んずるための具であるとしている。続けて次のように言う(20)。

凡そ歌舞は人の喜心の外に発するなり。是則ち天地の和気にして生育の徳なり。聖人の仁徳なり。故に楽記に「大人礼楽を挙げれば、則ち天地將に昭らかに為さんとす。天地訢合す。陰陽相得て、嫗覆育万物を煦め、然る後に草木茂り、区々として萌え達す」といへり。先王愷悌の徳、父母の心を以て万民を撫育し給ふは、春夏生育長養の徳なり。

「歌舞」とは、「天地の和気」であり、「生育の徳」であるとして、「聖人の仁徳」とまで断じている。さらに、

古は君子故無く、琴瑟身を離さずといへり。凡そ音曲は鬱滞を導引し、邪穢を蕩滌し、気血を和順し、徳を養ふべき物なり。

とも見え(21)、やはり音楽の効用を述べている。徂徠学において音楽は、「聖人の道」が具体化された「礼楽刑政」の一つとして重視される。こうした徂徠学における音楽の重視はまた、周南を媒介して六代藩主毛利宗広にも感化を及ぼしていた。すでに五代藩主の吉元は、明倫館において積菜を挙行するにあたり音楽を奏させていた。しかし、その後次第に習得しようとする者が減り、楽器もただ館中の備品となっていた。吉元に次いで襲封した宗広は、奏楽が廃絶すれば先侯の旨意にそむくだけでなく、風俗の退廃をも憂慮したようである。そうした宗広の音楽重視は、次のように記されている(22)。

侯好古楽。乃命先考、使学館諸生肄楽、春秋積菜合楽、公宮間燕亦張軒県。侯自鼓箏吹笙。於是糸竹之声、洋洋盈耳焉。(侯〈毛利宗広〉古楽を好む。乃ち先考〈山県周南〉に命じ、学館の諸生をして楽を肄はしめ、春秋の積菜楽を合し、公宮の間燕も亦軒県を張らしむ。侯自ら箏を鼓し笙を吹く。是に於て糸竹の声、洋洋として耳に盈つ。)

藩主が明倫館の諸生に対して、楽器の習得を命じたことが記されており、藩主自らが楽器を奏するほどであった。当時の明倫館の様子については、

育英之效、日月益進。講誦習礼、弦歌之音不断(育英の效、日月益々進む。講誦習礼、弦歌の音断えず。)

と記されており(23)、さらに、

宗広公音楽ノ事別テ御心ヲ被用、学館ニテ取建被仰付、器用ノ人柄京都被差登稽古被仰付、尚侯ニモ御取惱被遊ケル故、音楽繁昌シテ追々京都へモ被差登執行シケル故、

明倫館其外ニモ音楽繁昌シケルト也。

とあるなど(24)、藩主の肝煎りで楽器習得のために家臣を京都に派遣するほど、音楽が盛んだった様子が窺える。当時の朱子学派からすれば「無用の長物」とされる音楽に対して、藩主自らがこれほどまでに力を注いでいるのである。そうした背景には、明倫館創設当初からの藩主による音楽への理解と、周南を媒介する礼楽を重んじる徂徠学の受容などが相俟った結果とすることができる。

4-3-4 徂徠学の歴史観の反映

〈総説〉

林恕『王代一覧』〔七卷〕

鵜飼信之『編年小史』〔七卷〕

『本朝往古沿革図説』

〈通史〉

林恕等『本朝通鑑』〔四〇巻前編三巻続編二三〇巻〕

林恕撰『国史実録』〔七八巻〕

徳川光圀『大日本史』〔二四三巻〕

長井定宗『本朝通紀』〔前編二五巻後編三〇巻〕

〈時代史〉

『古事記』〔三巻〕

本居宣長『古事記伝』〔四四巻〕

『日本書紀』〔三〇巻〕

『釈日本紀』〔二八巻〕

谷川士清『日本書紀通證』〔三五巻〕

山本広足『神代巻講述鈔』〔五巻〕

管野真道等『続日本紀』〔四〇巻〕

藤原冬嗣『日本後紀』〔二〇巻〕

鴨祐之『日本逸史』〔四〇巻〕

藤原良房等『続日本後紀』〔二〇巻〕

藤原基経等『文徳実録』〔一〇巻〕

菅原道真『類聚国史』〔二〇〇巻〕

『東鑑』〔五二巻〕

〈雑史〉

『扶桑見聞私記』〔七六巻〕

『前々太平記』〔二一卷〕

『前太平記』〔四〇卷〕
『後太平記』〔四二卷〕
『朝鮮征伐記』〔九卷〕
『列祖成績』〔一五卷〕
『玉露叢』
『智囊』
『陰徳太平記』〔八一卷〕
『西国太平記』〔一〇卷〕
『吉田物語』

〈史論〉

北畠親房『神皇正統記』〔六卷〕
新井君美『古史通』〔四卷〕

〈伝記〉

『日本人物志』〔七卷〕
藤井臧『国朝諫諍録』〔二卷〕
巨勢正純等『本朝儒宗伝』〔三卷〕
林靖『本朝遯史』〔二卷〕
黒澤弘忠編『本朝列女伝』〔一二卷〕
藤井臧『本朝孝子伝』〔三卷〕
『仮名本朝孝子伝』〔三卷〕

〈系譜〉

萬多親王等『新撰姓氏録』〔三卷〕
洞院公定『諸家大系図繪』
速水房常『知譜拙記』

〈史料〉

大館常興・大和宗恕『大和家蔵書』
丸山可澄『花押藪』〔七卷〕
瑞溪周鳳『善隣国宝記』〔三卷〕
松下見林『異称日本伝』〔三卷〕

明倫館はその創設期から、歴史の領域に関する集書にも力を入れている。ここにもやはり、師である徂徠の影響をみることができる。徂徠は、歴史を学ぶことで六経も明らかになると述べている(25)。

今を知らんと欲する者は必ず古に通じ、古に通ぜんと欲する者は必ず史なり。史は必ず志にして、しかるのち六経ますます明らかなり。六経明らかにして、聖人の道に古

今なし。それ然るのち天下は得て治むべし。故に君子は必ず世を論ず。またただ物なり。

しかし、徂徠学の場合は、天下を治めるための聖人の道として、それが具体化された六経をより理解するために、歴史を学ぶことが必要だったというほうが、むしろ的を射ているであろう。また、次のようにも述べる(26)。

人オヲ生ズルハ、学問ニ越ルコトナシ。学問ハ文字ヲ知ルヲ入路トシ、歴史ヲ学ブヲ作用トスベシ。・・・士君子ノ輩ハ、文字ヲ知ルヲ要トス。近年理学(朱子学)ハヤリテ、アシキコトヲ云チラシ、其習ハシ儒者ノ常語トナリテ、文字ヲ知ラズトモ、道理ヲ知レバヨキト云ハ、大ナル僻事ナリ。文字ヲ知ラネバ、道理モ暗キモノナリ。小者・中間ノイロハヲ知タルト知ラザルトハ、モノノ心得各別ナルモノナリ。是ニテ推知ルベキコトナリ。マシテ心法修行ナド云ヘルヤウナル、坊主ラシキコトハ、大形ハ、ハヤラヌガヨキコトナリ。只歴代ノ事跡ヲシレバ、治国ノ道モ、軍旅ノ事モ、平生ノ行、忠臣義士ノ迹モ、皆其内ニアリ。

徂徠の態度は「文字ヲ知ルヲ要トス」として、端的にあらわれている。文字を正確に解釈できなければ、道理にも暗くなると述べている。そして、学問はまず文字を知り、次いで歴史を学ぶべきであるとする。ここでもやはり、国を治める上で必要な歴代の事跡は、文字の中にこそあるという徂徠の考えがあらわれている。徂徠にとっては、詩文を通して文字に習熟することが、経書や歴史にも通じる階梯であるということはすでに触れた。その上で歴史について、「学問は歴史に極まり候事に候」と端的に断じている(27)。

学問は歴史に極まり候事に候。古今和漢へ通じ不申候へば。此国今世の風俗之内より目を見出し居候事にて。誠に井の内の蛙に候。

徂徠の言う歴史とは、「和漢」に等しく重きが置かれるものだったと思われる。その具体的内容については、むしろ周南の歴史観に強くあらわれている(28)。

堯舜禹礼楽を造り、人倫を明らかにし、治国の法を定め給ひしより、万世の規矩となりぬ。世に随ひて小変はあれども、堯舜の手形を易ること能はず。是至極の道なるゆへなり。本朝には天智天武の帝淡海公父子当時の賢臣達、令を造り式を作り格式を作り、唐の礼義を移して、吾国の人倫の法を定め、治国のその道を建て給ふ。今に至りて其規範に循ふ。大経大法はいふにや及ぶべき。宮室衣冠日用の諸物風俗言語に至るまで、悉く中華の式なり。漢土と吾国と異なりといへるは、小異を見て大同を知らざるなり。国史を読みて来由を究め、異国の史とつき合せて見ば、其実を知るべし。本朝中華朝鮮等は一気の国なる故、堯舜の規矩に随へば能く治まり、其道に違へば必ず乱る。古今一徹なり。然るに昔は学問なしといへるは、室町の末戦国の余習を見ていへるなり。

そもそも、堯・舜・禹が礼楽を造り、人倫を明らかにし、治国の法を定め、「万世の規矩」とした。我が国においても、そうした「唐の礼義」を移入することで人倫の法を定め、

治国の規範としてきた。しかも、「諸物」「風俗」「言語」に至るまで、そのほとんどが「中華の式」である。周南は「本朝」「中華」「朝鮮」は「一氣の国」とし、「堯舜の規矩」にしたがうことで、天下もよく治まると述べている。それぞれの国が、「一氣の国」とあるという繋がりを重んじることで、聖人の造った礼楽を現在までも規範の拠り所と考えているのは、明らかに徂徠学の影響である。こうした歴史認識が、徂徠学の主張を支える理論の根拠でもあった。そのため、「国史を読みて来由を究め、異国の史とつき合せて見ば、其実を知るべし」という周南の言葉は、さきの『徂徠先生答問書』における「古今和漢へ通じ不申候へば。此国今世の風俗之内より目を見出し居候事にて。誠に井の内の蛙に候」と呼応するものであると言えよう。

実際に、周南は徂徠の影響を多分に受け、歴史に対する造詣も深かった。

其学一遵徂徠先生教、以経術文章為宗。文則秦漢、詩則唐明為帰。而博綜強記、無所不窺。最精国史。治乱興衰之跡、至皇朝文物典故、諸家譜第閥閥、明如指掌。嘗奉命、与永田政純共選公室譜牒、諸臣家譜。(其の学は一に徂徠先生の教へに遵ひ、経術文章を以て宗と為す。文は則ち秦漢、詩は則ち唐明を帰と為す。而して博綜強記、窺はざる所無し。最も国史に精し。治乱興衰の跡より、皇朝の文物典故、諸家の譜第閥閥に至るまで、明らかなること掌を指すがごとし。嘗て命を奉じ、永田政純と共に公室の譜牒、諸臣の家譜を選す。)

として(29)、「治乱興衰の跡」から「皇朝の文物典故」、さらに「諸家の譜第閥閥」に至るまで「最も国史に精し」という評価を受けている。さらに藩の修史事業にも関わり、永田政純を中心とした『菽藩閥閥録』の編述や『江氏家譜』を監修している(30)。

歴史の領域における蔵書の多さもまた、徂徠学の影響と周南自身の歴史への造詣の深さが、大きく与っていたことを指摘できるのである。

4-4 結び

本章における旧蔵国書の検討からは、大きく次の三点を指摘できる。まず、荻生徂徠及び徂徠門下の著作の多さから、その創設当初から明倫館教育に徂徠学の色濃い反映が見られることである。そして、享保年間以降、徂徠学批判の書は多数存在するにも関わらず、それらが明倫館の蔵書の中にはほとんど見られないことから、そこに意図的な収集姿勢があったことは明らかである。

第二に、徂徠学への傾倒と相俟って、反朱子学を標榜する著作の多さである。たとえば荻生徂徠が、「人材は則ち熊沢、学問は則ち仁斎、余子は碌々として未だ数ふるに足らざるなり」(31)と述べる、陽明学の熊沢蕃山、古学の伊藤仁斎などの著作がそれである。とりわけ仁斎の著作は、その子東涯のものとおわせて多く収められている。これには、周南による仁斎への敬慕の念も理由として挙げられる(32)。

そして第三に、明倫館創設期からの実質的な徂徠学を受容である。従来、明倫館は周南の第二代学頭就任によって、朱子学から徂徠学へ転換したとされてきた(33)。しかし実際には、初代学頭小倉尚斎の下でも、周南の主導により徂徠学関係の書籍が着々と収集されていたのである。蔵書傾向として指摘できる、詩文、音楽、歴史の重視などは、すでに論じてきたように徂徠学の影響を多分に受けたものである。明倫館を創設した五代藩主毛利吉元と小倉尚斎は、いずれも林大学頭信篤に学んで朱子学を重んじていたとされる。

しかし、藩主の吉元にしても、先行研究では徂徠学の周南と学問上の対立があったとされながら(34)、実際には早くから周南を侍講として重用し、明倫館創設の際には多くの重要な役割を担わせている。また、享保四年(一七一九)二月の明倫館落成式において、吉元は自ら聖廟を拝し、今後大いに人材を涵養しようとする旨を告げているが、この際の告文もまた、周南の草したものである(35)。さらに、朱子学派が無用の長物とする傾向にある音楽を重んじるなど、藩主である吉元自身が徂徠学への理解を有していなければ、周南によって明倫館に徂徠学を受容されたことについて説明することはできない。

小倉尚斎も文学に造詣が深く、江戸での朝鮮通信使との唱和により、李東郭から高い評価を得た上に、六代将軍家宣も召抱えようとしたほどの人物であった(36)。さらに後述するように、実際には周南と深い親交があり、荻生徂徠やその門下からも高い評価を得ているなど(37)、その実態は従来言われてきたような学統学派の枠にとどまるものではなかった。

こうした状況も勘案すれば、創設期の明倫館が朱子学を標榜しながらも、実際には徂徠学が浸透していたことを思わせる。朱子学を重んじた理由としては、幕府と林家の権威に頼ったということや、幕藩体制を維持する上で好都合であったことなどが指摘されている(38)。一方で徂徠学は、古文辞を重んじる点で朱子学以上の学問的水準の高さを示すとともに、文学をはじめとして音楽を人心の涵養に不可欠のものと捉えるなど、朱子学にはない特徴的な主張に魅力があり、藩内でも実質的な学問は徂徠学が主であったことが推察される。そのため、朱子学から徂徠学への転換もまた、百八十度の大転換だったのではなく、明倫館ではその創設当初から学統学派については、表面的な朱子学に対して、徂徠学の大きな流れがあったものと考えられる。

さて、蔵書の利用方法については、徂徠による次の言説が示唆的である(39)。

総ジテ御蔵ノ御書物ハ、儒者共ニ望次第ニ御借可有事也。書籍ハ外ノ物ト替リ、兼テ見置カズシテハ、急ニ用ニ立ヌ物也。御庫ニ聚メ置レテモ、見ル人無レバ、反古ヲ詰置タルモ同前也。虫ニ食セテ捨ンハ惜キ事甚シ。外ノ物ハ、武具ニテモ、皆取出シテ用レバ、早速ニ用立トモ、書物ハ夫トハ違フ事也。

蔵書については、望む者があれば好きなように貸し出すべきだとする徂徠の考えは、周南を媒介して明倫館教育にも影響を与えている。それは、享保五年(一七二〇)十月に、当役山内広通と当職益田就高の名で出された「条々」(40)に窺える。ここに、書籍の管

理について次のようにある。

書籍請之儀は、本締役之可為沙汰候。然共書籍差引之儀は、学頭之可為了簡候間、諸生中より取揃之役兩人被申付、何分学頭之差図を請、書籍不逮紛失混雜様可有沙汰候。且又諸生之外たりとも、書籍借用之願於有之は、度々学頭承届、学館当用に無之書物之分は月切にして可貸渡候。大部之書十卷充可貸渡候。尤借用之面々、物切不及遲滞致返弁候様、帳面印形を以可致沙汰之旨、可被申付候。且又毎年蟲干入念被申付其節は学頭本締役立合、部数冊数共改可被申付事。

学頭と本締役の管理の下で書籍の貸し出しを許可するが、諸生以外への書籍の貸し出しも認めるなど、明倫館での書籍の扱いに徂徠の影響が見られることは明らかである。

明倫館の創設当初、儒者として諸生に講説を行っていた周南が、どのように書籍、とりわけ国書を用いていたかは明らかではない。ただ、周南が徂徠学を重んじていたことから、漢籍をテキストとして用い、その理解の助けに副読本として国書を用いたことなどが推察される。また、初学の段階を過ぎ、一定の水準にまで達した学生に対しては、朱子学のテキストを批判的に読むために、徂徠や徂徠学関係の国書を用いて教えたということも当然あったものと思われる。

「周南先生行状」によれば(41)、周南が萩藩にもたらしたものは、藩内の子弟に対する多大なる教化と、文学の土壌であるとしている。

六芸及鈴韜劍槍諸科、各立其師、使国中子弟日日遊処焉。春秋積業、侯自臨行養老乞言之礼。於是風化大行。文学之隆、媲美兩都。蓋先考之力居多云。(六芸及び鈴韜劍槍諸科、各々其の師を立て、国中の子弟をして日日遊処せしむ。春秋積業、侯自ら臨みて養老乞言之礼を行ふ。是に於て風化大いに行はる。文学の隆んなること、兩都を媲美す。蓋し先考の力居ること多しと云ふ。)

周南による明倫館創設当初からの国書の収集には、徂徠学の教育論が反映している。それは同時に、徂徠学を重んじる教学の基礎を形成するための尽力であったとも言えるのである。

注

- (1) 『明倫館漢籍・準漢籍分類目録 附明倫館御蔵書目録根帳寫』(山口大学人文学部・一九八八年)。
- (2) 山口大学人文学部(一九九二年)。
- (3) 河村一郎『長州藩徂徠学』(私家版・一九九〇年)、九〇頁。
- (4) 『周南先生文集』(山口県立山口図書館蔵)。
- (5) 同上。
- (6) 『政談』(日本思想大系三六『荻生徂徠』、岩波書店、一九七三年)、四四二頁。
- (7) 分類に際しては、笠井助治『近世藩校における学統・学派の研究』(吉川弘文館、一九六九年)に拠った。その上で、陽明学派、古学派などはその学問の性格上、「反朱子学」に分類した。また、折

衷学派で明らかに徂徠の影響が認められるものは、「徂徠門下および影響関係」として分類した。ただし、たとえば折衷学派の細井平洲は、徂徠に影響を受けながら、一方で徂徠学を批判する書もある。その場合は、著書の内容によって分類した。

- (8) 小島康敬『徂徠学と反徂徠学』（ペリかん社、一九八七年）、一三五～一三七頁。
- (9) 専著に、松下忠『江戸時代の詩風詩論一明・清の詩論とその摂取一』（明治書院、一九六九年）の労作がある。
- (10) 注（6）前掲『政談』、四四二頁。
- (11) 『徂徠先生答問書』（『荻生徂徠全集』第一巻、みすず書房、一九七三年）、四六〇～四六一頁。
- (12) 『太平策』（注6前掲『荻生徂徠』）、四四九頁。
- (13) 『為学初問』（『日本倫理彙編』育成会、一九〇一年）、二一七頁。
- (14) 「汪氏文選序」（注4前掲『周南先生文集』巻六）
- (15) 「送筑州拙菴上人序」（注4前掲『周南先生文集』巻六）
- (16) 「周南先生墓碑」および「周南先生行状」（いずれも、注4前掲『周南先生文集』）に記述がある。
- (17) 信原修「正徳辛卯信使の来日と詩文唱酬の実態—山県周南・当拙菴一族らを中心に—」（『朝鮮学報』第百六十二輯、朝鮮学会、一九九七年）。
- (18) 『弁道』（注6前掲『荻生徂徠』）、三二頁。
- (19) 注（13）前掲『為学初問』、一九四頁。
- (20) 同上、一九五頁。
- (21) 同上、一九六頁。
- (22) 注（16）前掲「周南先生行状」。
- (23) 注（16）前掲「周南先生墓碑」。
- (24) 『遺徳談林』下（『毛利十一代史』巻六十九、名著出版、一九七二年）、七六九頁。
- (25) 『学則』（注6前掲『荻生徂徠』）、一九三頁。
- (26) 『太平策』（注6前掲『荻生徂徠』）、四八五頁。
- (27) 注（11）前掲『徂徠先生答問書』、四三三頁。
- (28) 注（13）前掲『為学初問』、一七四頁。
- (29) 注（22）に同じ。
- (30) 同様の記述は、注（16）前掲「周南先生墓碑」にも次のようにある。「先生兼精国史譜学。吾邦典故、諸家閥閥、皆能明弁。嘗奉侯命、選公室譜牒諸臣系譜。」（先生兼て国史譜学に精し。吾邦の典故、諸家の閥閥、皆能く明弁す。嘗て侯命を奉じ、公室の譜牒諸臣の系譜を選す。）
- (31) 「与藪震庵書」（『徂徠集』「詩集日本漢詩」、汲古書院）、二四二頁。
- (32) 注（3）前掲『長州藩徂徠学』「二—1 周南の位置」および「二—2 周南の人間観」に、伊藤仁斎の影響について述べられている。
- (33) 『山口県教育史』（山口県教育会、一九八六年）に、山県周南が第二代学頭に就任したことを機に「以後明倫館での学派は周南の古文辞学が主流」（一五九頁）になったとある。

- (34) 若水俊『徂徠とその門人の研究』(三一書房、一九九三年)、一六六～一六八頁。
- (35) 「明倫館落成祭先聖告文」(注4前掲『周南先生文集』巻九)。
- (36) 「長肅小倉先生墓碣」(『華陽先生文集』巻八、山口県立山口図書館蔵)。
- (37) 本論文第五章「学統学派をこえた小倉尚斎との親交」参照。
- (38) 小川国治・小川亜弥子『山口県の教育史』(思文閣出版、二〇〇〇年)、七二頁。
- (39) 注(6)前掲『政談』、四三八頁。
- (40) 「明倫館御書付類控」(山口県文書館蔵)。
- (41) 注(4)前掲『周南先生文集』。

第五章 学統学派をこえた小倉尚斎との親交

5-1 本章の目的

これまで指摘してきたように、明倫館にはその創設当初から山県周南を媒介して徂徠学の影響が認められる。本章では、朱子学を標榜していた明倫館が、そうした徂徠学の受容を可能とした理由の一端として、明倫館初代学頭の小倉尚斎（一六七七～一七三七）と、彼の没後第二代学頭に就任した山県周南（一六八七～一七五二）との関係について取り上げる。

従来、両者の交遊の跡とその意義が論じられることはなかった（1）。それは先行研究において、小倉尚斎は朱子学、山県周南は徂徠学という捉え方が前提とされてきたために、あたかもその人間関係までもが平行線をたどり交わらないものであったかのように考えられてきたからである（2）。

しかし、周南の詩文や近年調査が始まった小倉家文書によると、決して学統学派に捉われることなく、二人は互いに親交を深めていたことが分かる。それは明倫館内部の学統学派の問題を考える上でも重要な意味を持つものである。そこで本章では、周南の詩文を中心として、両者を取り巻く交遊の様子について明らかにしていきたい。

5-2 文学者小倉尚斎

小倉尚斎の人物像は、山根華陽による「長肅小倉先生墓碣」（3）に詳しい。その記述によれば、尚斎は京都で伊藤坦庵に師事し、その後江戸へ出て林大学頭信篤の門に入り助講を務めている。正徳元年（一七一―）朝鮮通信使に詩文を贈って応接した際、学士李東郭によりその才が賞賛され名声が高まった。六代将軍徳川家宣（一七〇九～一七一二在職）も尚斎の詩文を賞讃し、彼を召抱えようとしたが、病気を理由に辞退している。享保四年（一七一九）に萩に明倫館が創設されてからは、初代学頭として十九年間、郷土の子弟の教育に尽力した。

その記述中において尚斎は、李東郭による文才の賞讃といったことが特筆されながらも、従来書では明倫館との関わりのなかで、朱子学を重んじた明倫館初代学頭という取り上げ方に終始している観が強いことは否めない。

ところが、小倉遜斎（一八〇五～一八七八）編「小倉家歴代文集目録」によれば、尚斎の著作として、『長肅先生詩鈔』・『長肅先生文鈔』以外にも、「長肅先生御歌」として、和歌七首、連歌発句九句、詩文一編が掲げられており、尚斎は漢詩漢文だけでなく、和歌や連歌にも通じていたことがうかがえる（4）。この理由のひとつには、小倉家が清和天皇を祖とする近江源氏の流れを汲み、とりわけ八代実澄は、和歌を飛鳥井雅親（一四一六～一

四九〇) に学び、連歌師宗祇(一四二一～一五〇二)とも親交があったことと関わっていると思われる。ここで興味深いのは、尚齋が漢詩はもちろんのこと、実際には和歌も連歌も嗜む文人としての一面を有していたことである。

そうした文人としての評価の高さは、じつは「長肅小倉先生墓碣」にも、

其文学乃天性也。少長呻嗶老而不衰。宜乎儒宗藩廷、而有功斯文也。(其の文学は乃ち天性なり。少しく長じて呻嗶して老いて衰へず。宜なるかなや藩廷に儒宗として、斯文に功有るなり。)

とあり、確かに「斯文に功有り」とする人物評としてあらわれている。尚齋を明倫館初代学頭を務めた朱子学の儒者という一面的な見方で捉えてしまうと、その人物像を見誤ってしまう恐れがあると同時に、山県周南との関わりについても、一見接点を探しにくい。しかし、学統学派の対立という先入観を捨て、文人としての交遊に焦点を当てたとき、両者の親交が並々ならぬものであったことが浮かび上がってくるのである。

5-3 山県周南の詩文にみる親交

ここでは周南の詩文から、尚齋との親交を示す作品について時代順にみていきたい。いずれも作品は『周南先生文集』を底本として巻次を示し(5)、原文および書き下し・大意・解題の順とする。

まず、萩の尚齋宅における詩会の席上で賦された作品を取り上げる。

集倉実操宅分得故字(卷一)

(倉実操宅に集ひ故の字を分得す)

七月流火燦	七月 流火燦たり
灑氣降昏暮	灑 <small>こう</small> 氣 昏暮に降る
披襟倚玉壺	襟を披きて玉壺に倚り
風露繞琪樹	風露 琪樹 <small>きじゆ</small> を繞る
玄論珠璣凝	玄論 珠璣 <small>しゆき</small> 凝り
徽音鸞鳳聚	徽音 鸞鳳 <small>あつま</small> 聚る
泠泠陟丹丘	泠泠として丹丘 <small>のぼ</small> を陟り
飄飄躡玄圃	飄飄として玄圃を躡 <small>ふ</small> む
既欲濯塵纓	既に塵 <small>じん</small> 纓を濯がんと欲し
屢起斟清醕	屢 <small>しばしば</small> 起ちて清醕を斟む
肺腸何有韜	肺腸何ぞ韜 <small>たづ</small> むこと有らん
風流信可慕	風流信に慕ふべし

与君紉芷蘭 君と芷蘭を紉しらんひむす
千秋永不故 千秋永く故ならざらんことを

七月の星は西方に流れてきらめき、秋の澄んだ気は黄昏時に地上に降りてくる。襟を開いて玉壺にもたれ、風露は美しい木をめぐる。この邸宅では、世俗を離れた深遠な話題が様々に行われ、その評判に君子が集まって来る。胸中は清清しく、仙界の丹丘にのぼるのにも似ている。また、飄然として仙界の玄圃に足を踏み入れるのにも似ている。そして世俗で汚れた衣服を濯ごうと、しばしば立ち上がっては清酒を酌む。そうしていると、心に何を包み隠すことがあるだろうか。あなたとの風流の交わりを慕い、君子の交わりを結んで末永くありたいものだ。

この五言詩からは、萩で尚斎の邸宅に集い行われていた詩会の雰囲気、どのようなものであったかを彷彿とさせる。詩中に見える「玄論」とは、老荘の学を指し、転じて世俗を離れた談義、「丹丘」と「玄圃」もまた仙界を指した語である。また「塵纓」とは、俗世の官職を指す。そのため、「塵纓を濯がんと欲す」という表現からは、彼らの詩会が社会や政治を論ずるものではなく、世俗を離れた純粋な詩作の楽しみを求める性格のものであったことがうかがえる。さらに「芷蘭」は、誰に知られずとも芳香を放ってやまない草のことであり、君子のあり方をたとえている。周南は、尚斎に対してそうした君子の交わりを請うている。ここからは、萩の地で学統学派の枠をこえて、尚斎と周南を中心とする詩会なり詩文グループが形成されていたことをうかがわせる。

次に、五代藩主毛利吉元に従い、江戸へ向かう尚斎を見送る詩を取り上げる。

送倉実操〈実操有脚疾一割注〉〈卷三〉

(倉実操を送る〈実操脚疾有り〉)

楚客自誇天下宝	楚客自ら誇る 天下の宝
陵陽書社即今開	陵陽の書社 即今開く
連城価入諸侯定	連城の価は諸侯に入りて定まり
貫斗光経列宿来	貫斗の光は列宿を経て来る
碣石黄金遊士意	碣石の黄金 遊士の意
兔園華簡大夫才	兔園の華簡 大夫の才
河梁新調多悲思	河梁の新調 悲思多く
不忍送君登鶴台	君を送るに忍びず鶴台に登る

あなたの才能は、江戸でますます認められ高く評価されることは疑いない。かつて燕の昭王が碣石館を建て、黄金を置いて賢者を招いたとされる故事があるが、あなたを待つ

はそのような歓待であるだろう。また梁園に遊んだ文人たちのように、素晴らしい文才を発揮されることだろう。この橋の上であなたを見送る歌は、悲しい思いであふれている。私は居ても立ってもいられず、鶴台に登ってあなたを見送ることだ。

藩主に従い江戸へ行く尚齋との離別を悲しむ七言律詩。「楚客」とは、宝玉を手に入れて楚王に献じながらも、偽物とされて脚を切断された「和氏の璧」の故事(6)を踏まえている。「連城の価」は、それが十五の城市と交換されるほどの至宝でありながら、諸侯に知られることではじめてその価値が認識されたことをいい、その故事になぞらえて、江戸で多くの人物と交われば、尚齋の才能も否応なく世間に認められるであろうというのである。「貫斗の光」は、牽牛星と北斗星を貫く強い光のことで、転じて江戸の才子のなかでも輝きを放つであろう尚齋の才能をいう。「河梁」の語は、前漢の李陵が親友の蘇武に与えた「携手上河梁、遊子暮何之」(7)の一節を踏まえている。

その親交を李陵と蘇武の故事になぞらえるあたりからも、二人の親交の深さがうかがえる。また詩中の「陵陽の書社」の語は、尚齋らが開いていた読書会との解釈もあるが(8)、これはむしろ尚齋と周南を中心とする詩会の集まりであろうと思われる。それは、前掲および後掲の一連の詩の内容からも察せられるところである。

さて、尚齋が江戸へ赴いた後も、二人の親交はさらなる深まりを見せている。周南による尚齋への思慕の念には並々ならぬものがある。次の詩は江戸の尚齋より、萩の地にある周南へ書簡と詩が贈られたことに酬いる七言律詩である。

羽林中郎将小倉滕公千里辱書兼賜盛什見徴拙業賦二律酬盛意〈卷三〉

(羽林中郎将小倉滕公、千里書を辱くし兼ねて盛什を賜ひ、

拙業を徴められ、二律を賦して盛意に酬いんとす)

漢室宮墻北極辺	漢室の ^{きゆうしやう} 宮墻 北極の辺
未央宏麗紫霄連	未央の宏麗 ^{ししやう} 紫霄に連ぬ
瑠孤星動中郎将	^{とうこ} 瑠孤の星動く 中郎将
玉几雲從聖主年	^{ぎよつぎ} 玉几の雲從ふ 聖主の年
瑞鳳凌虚難可接	瑞鳳虚を凌ぎて 接すべきこと難く
明珠暗転相憐	明珠暗に投ぜしめ 転じて相憐れむべし
淮南叢桂近蕭索	^{わいなん} 淮南の叢桂 近ごろ蕭索たり
誰道小山能著篇	誰か道はん 小山能く篇を著すと

藩主に従い、華やかな江戸へ赴いたあなたは、もはや私たちには接することも難しい。しかし、それにも関わらず、あなたはそのすぐれた詩才を、私たちが居る辺境の萩の地に投じてくださった。これにはかえって申し訳なくさえ思う。あなたが江戸へ赴いてからと

いうもの、この頃では私たちの詩会の集まりは、すっかり寂しいものになってしまった。

「羽林中郎将」は、江戸で小倉尚斎に授けられた近衛中将の唐名である。江戸の華やかさを「漢室の宮墻」、「未央の宏麗」といった漢代の宮室にたとえ、そこで活躍する尚斎のすぐれた詩文が、思いがけず萩の地に贈られてきたことに対する感激を歌う。「淮南の叢桂」とは、淮南王劉安の詩文グループ(9)を萩での詩作の集まりになぞらえながら、それが振るわないのは、『楚辞』の「招隠士」を作ったとされる「小山」(10)のごとき詩作に長けた尚斎が、もはやこの地にいないからだというのである。続けて次のようにある。

閭巷歌謡久不揚	閭巷の歌謡久しく揚らず
雲霄遺響尚洋洋	雲霄の遺響尚洋洋たり
虎賁風采高諸衛	虎賁の風采諸衛に高く
環列星文耀建章	環列の星文建章を耀かす
月満関山天共白	月満ちて関山天共に白く
秋来湖海夜偏長	秋来りて湖海夜偏へに長し
巴人自愛巴人調	巴人自ら愛す巴人の調
何意陳觀遍遠方	何ぞ意はん 陳觀遠方に遍らんとは

あなたが萩の地を離れてからというもの、こちらの詩壇は低迷している。一方で、あなたの詩の格調高い響きはまだ洋々としている。その詩才の評判は江戸でも高く、並び居る人物の中でもひとときわ輝きを放つ。私が秋の風情を歌っても、どうも田舎っぽい調べになってしまう。それにも関わらずこのような形で、自分の詩が江戸にまで届くなどとは思ってもみなかったことだ。

「閭巷の歌謡」は現在の萩での詩文、「雲霄の遺響」は尚斎の残したすぐれた詩文を指し、対句により両者を対照的なものとして述べている。「虎賁」とは近衛兵のことで、ここでは羽林中郎将である尚斎を指す。彼がその人物も文才も江戸の諸氏にまさり、数ある星(星文)や建物(建章)のなかでもひとときわ輝いていると述べる。また「巴人」は田舎者というほどの意味であるが、周南は尚斎から贈られた詩に応酬するという形で、自らの詩が華やかで詩文の水準が高い江戸へ送ることに戸惑いを感じるとしている。二首全体として、尚斎の詩才に対する敬仰の念と、自分たちのもとを遠く離れてしまった寂寥を歌う。次の詩も江戸から寄せられた尚斎の詩文に対して、周南が奉和した五言律詩である。

奉和羽林小倉滕公〈卷二〉

(羽林小倉滕公に奉和す)

中郎方貴倨	中郎方 ^{まさ} に貴倨するも
愛士却風流	士を愛して風流を却 ^{かへ} す
梁苑春雲麗	梁苑 春雲麗しく
淮南秋樹幽	淮南 秋樹 ^{かす} 幽かなり
人將蹤跡遠	人は將に蹤跡遠からんとし
情頼和歌周	情は和歌に頼りて ^{あまね} 周し
安得冲天翮	安 ^{いづく} んぞ天に ^{のぼ} る ^{はね} 翮を得て
登君五鳳樓	君の五鳳樓に登らん

江戸でのあなたの存在は、ますます評判が高い。それにも関わらず郷土の子弟を想い、私たちに詩文を寄せてくださった。江戸の文壇は華やかだろうが、翻ってこの萩の地は寂しいものだ。あなたの存在そのものは遠く離れているが、その心は寄せてくださった詩文によってこの地でつながっている。私も天にのぼる羽を得て、あなたの文才の高みに近付きたいものだ。

「梁園」は、漢代に梁の孝王がつくった兔園をいい、ここでは江戸を指している。また「淮南」は、さきに触れた淮南王劉安を中心とする詩文グループである。しばしば周南は、自分たちの詩文の集まりをこれにたとえた。ここでは両地における文壇の対照的な様子を述べることで、尚齋の存在の大きさを示している。「五鳳樓」の語もまた、梁の太祖が洛陽に建てた樓の名であると同時に、江戸にいる尚齋の文才の高さを踏まえ、何とかその高みに近付きたいと述べて結ばれている。

次もやはり江戸の尚齋から贈られた詩に対して、同じ韻を用いて作詩した七言律詩である。

次韻実操東都見寄三首〈卷三〉

(実操の東都より寄せらるるに次韻す三首)

夙聞清望冠江左	夙に聞く 清望江左に冠するを
更有何人第一流	更に何人か有らん第一流
飛蓋追隨西苑夜	飛蓋 ^{ひがい} して追隨す 西苑の夜
銜杯睥睨北冥秋	銜杯して睥睨 ^{へいげい} す 北冥の秋
彩雲翻座禰衡賦	彩雲座に翻る 禰衡 ^{でいかう} の賦
明月滿天王粲樓	明月天に満つ 王粲 ^{わうさん} の樓
還憶壺園高会夕	還って憶ふ 壺園高会の夕
風揺瑤草似仙遊	風は瑤草を揺らし仙遊に似たり

昔者倉生諸友数遊兒玉氏壺天園一周南自注

(昔者倉生諸友とともに数児玉氏の壺天園に遊ぶ)

あなたの清廉な人柄は、江戸でも周知のことだ。あなた以上の人物など、どこにいることだろう。江戸の人々は、そうしたあなたの声望を追い求めてやまないだろうと、私はこの萩の地で杯を口にしながら、遠く離れた江戸の秋を思いやっている。美しい彩りの雲が翻り、明月が天を照らすように、かの禰衡や王粲とも比すべきあなたの才能は、その場に居る人々を魅了してやまないことだろう。私も江戸の壺天園での盛大な酒宴を思い出すと、仙界に遊ぶのにも似た心持ちがしてくるようだ。

詩末の自注にあるように、「壺園」は江戸の児玉氏なる人物の邸宅内における庭園と思われ、「壺天園」のことである。周南自身もかつて江戸にあるとき、尚斎をはじめとする「諸友」と遊んだ場所であったことがうかがえる。詩中の「江左」は、晋代きっての名門である謝氏一族を指す語で、ここでは尚斎のこと。「禰衡」は、酒宴の席で献上された鸚鵡を賦すことを人々に求められ、即座に「鸚鵡賦」(11)を作った後漢の詩人、また「王粲」も同じく後漢の詩人で、楼閣に登って「登楼賦」(12)を作った。いずれも詩文の範として古来重んじられてきた『文選』に収められる作品を引き合いに出し、尚斎の詩才に比すという賞讃ぶりである。続く二首とあわせて、やはり全体として尚斎の詩才に対する賞讃と、遠く離れた寂寥を歌う。

河梁握手悲歌起	河梁手を握りて悲歌起こり
猶自瀟瀟萩水流	猶自ずから瀟瀟たり 萩水の流
玉樹風寒仙吏夢	玉樹 風寒し 仙吏の夢
金莖気爽漢宮秋	金莖 気爽やかに 漢宮の秋
孤雲一片雁横海	孤雲一片 雁海に横たわり
明月千門人倚楼	明月千門 人楼に倚る
莫問故山叢桂色	問ふこと莫かれ 故山叢桂の色
争如才子占豪遊	争 <small>いか</small> でか才子の豪遊を占むるに如かん

あなたと橋の上で手を握って別れてからというもの、胸には悲しい歌がこみ上げてくる。それでもこの萩の川の流れは、変わらず清らかなままである。玉樹ならぬすぐれた才能も、ここでは冷たく風に吹かれ、叶わぬ夢だけがある。一方で、金莖の花は、香気も爽やかに江戸の秋を彩ることだろう。さらに、ここではひとひらの雲と雁が海に横たわるだけだが、江戸では千の明月とも言うべき才子諸君が輝きを放ち、人々も集まってくることだろう。いまこの萩の地の文壇のことは聞いてくださるな。才子がひしめく江戸の様子には、到底及ぶべくもないことだ。

「河梁」は、李陵と蘇武の故事を踏まえた語であることはさきに触れた。「玉樹」も「金

茎」もすぐれた才能をたとえる語であるが、「玉樹風寒し仙吏の夢／金茎気爽やかに漢宮の秋」として、対句により萩と江戸にあることとの相違を対照的に述べている。これに続く、「孤雲一片雁海に横たわり／明月千門人楼に倚る」の表現もまた同様である。

清樽既屈鸛鶴裘	清樽既に屈す 鸛鶴の ^{かはころも} 裘
酔態自誇山簡流	酔態 自ら誇る山簡の流
座映長岨青嶂色	座は映ず 長岨青嶂の色
歌成梁甫白雲秋	歌は成る 梁甫白雲の秋
瓊枝夕折江辺樹	瓊枝 夕に折る 江辺の樹
羽客朝逢海上楼	羽客 朝に逢ふ 海上の楼
還在人間不可厭	還って人間に在りて厭ふべからず
煙霞何必掛冠遊	煙霞何ぞ必ずしも冠を掛けて遊ばん

酒は鸛鶴の裘ですでに飲み干してしまった。私はその酔態を、山間のせせらぎで振る舞っている。私の視界には、萩の東に連なる青い嶺の色が映り、秋の気配が漂うなか歌は出来上がった。夕刻には川辺の樹木の美しい枝を折り、朝には海上の楼で仙人に逢って楽しむ。それでもこの身は世俗にあって厭うこともできない。山水の景色を目の前にしながら、どうして世俗を忘れることができないのだろうか。

普段と同じように山水の景色に遊び、詩作に興じながらも、江戸に離れた尚斎のことを思うと、素直に世俗を忘れることもできないと述べて結ばれている。

倉都講有懷壺天園作以書需諸友之和〈卷三〉

(倉都講壺天園を懷ふの作有り、書を以て諸友の和を需む)

深園葱鬱大江隈	深園葱鬱たり 大江の隈
雲氣時從海上来	雲氣時に海上より来る
松塢雲寒玄鶴下	松塢雲寒く 玄鶴下り
桂巖昼静白花開	桂巖昼静かに 白花開く
秋虹亘谷天圀窄	秋虹谷を亘り 天圀 ^{さま} 窄く
西瀨満楼星象回	西瀨楼に満ち 星象回る
遊子中原留未至	遊子中原に留まりて未だ至らず
僊壺寄興轉遲徊	僊壺興を寄せ 轉 ^{うた} た遅徊す

隅田川のほとりの庭園には、樹木が鬱蒼と茂っている。そこでは雲気は海上から来る。松の堤には寒さのために黒い鶴が舞い下り、桂の巖には昼の静けさのなか白い花が開く。

秋の虹が谷にかかって空を狭め、秋の気配は楼に満ちて星座はめぐる。あなたは江戸に留まったまま帰らない。かつての壺天園での酒宴に思いを馳せて、私はあなたの帰りを待ちこがれていることだ。

江戸の壺天園の風情を「松塢雲寒く玄鶴下り／桂巖昼静かに白花開く」、また「秋虹谷を亘り天圀窄く／西瀨楼に満ち星象回る」といった対句を効果的に用いながら歌い、最後はやはり江戸に留まっている尚齋への思いで結ばれている。題言にある「諸友の和を徴む」の「諸友」の語からは、萩における詩文グループの存在を思わせる。そうであればこの詩は周南だけの思いというよりも、故郷にある「諸友」に共通する思いを周南が代弁し吐露した作品であるとも言えよう。

5-4 学統学派をこえて

これまで見てきた詩文から、尚齋と周南の親交がことのほか深かったことは明らかである。萩の地で交遊を結んで以来、遠く江戸へ離れてからも同志としての詩文のやりとりが行われていたことは、とくに注目される。じつは尚齋は、周南以外にも、安藤東野、荻生徂徠といった反朱子学をもって任じていた人々からも交遊を求められ、またその学才と人物を称揚されている。当時、学統学派をこえた交遊については、全国的に見てもほとんど行われていなかったとされる(13)。そのことからすれば、こうした親交は当時としては珍しいものであったと言える。

安藤東野(一六八三～一七一九)は、徂徠門下における山県周南の盟友である。『東野遺稿』(三卷)があり、詩文の才に富んでいた。彼の徂徠と周南との関わりについては、服部南郭「周南先生墓碑」(14)に次のようにある。

年十九東遊、師事物夫子。夫子以修古為本。經義文章、皆由是出。時方始唱、和者蓋寡。独有滕東壁從焉。先生至則大說其学、与東壁相視切劘。夫子亦自称得其人。爾後、物家之学日興、從者益盛。遂至海内靡然嚮風。吾党至今以二子羽翼、伝為稱首。(年十九にして東遊し、物夫子(荻生徂徠)に師事す。夫子修古を以て本と為す。經義文章、皆是より出づ。時に方に始めて唱へ、和する者蓋し寡し。独り滕東壁(安藤東野)有りて焉に従ふ。先生至れば則ち大いに其の学を説き、東壁と相視て切劘す。夫子も亦た自ら其の人を得たりと稱す。爾後、物家の学(徂徠学)日に興り、從者益々盛んなり。遂に海内靡然として風に嚮ふに至る。吾党今に至りて二子(周南・東野)の羽翼を以て、伝へて稱首と為す。)

周南は十九歳で徂徠に入門しているが、当時ようやく古文辞学を提唱し始めた徂徠の学説にしたがう者はほとんどいなかった。そのなかでいち早く東野は師説にしたがい、さらに周南とともにその学説を進めることに尽力したのである。徂徠学の隆盛は、ひとえに二人の尽力があつてこそであるとの高い評価をうけている。

こうした経緯もあり、周南との交わりはとくに親密なものであった。その東野は三十歳のとき、小倉尚斎宛に詩文の交わりを得たいとする書簡を送っている(15)。

僕生三十年于此。所結蓋亦不寡矣。迺其双眸為常青。不在此而在彼焉。何其奇耶。(中略)唯其未縁執謁、以及乎此。慊慊何已。頃聞弊邑之人鈴文山、与足下交驩。僕於文山、猶次公於足下。会遇蓋更奇矣。文山紹介於我、使我得締交足下。而三其両。則其奇亦益甚。故言此以庶幾其交。(僕生れて此に三十年。結ぶ所蓋し亦た寡からず。迺ち其の双眸常青を為す。此に在らずして彼に在り。何ぞ其れ奇なるや。・・・唯其の未だ謁を執るに縁らず。以て此に及ぶ。慊慊として何ぞ已まん。頃聞^{このごろ}く弊邑の人鈴文山、足下と交驩すと。僕の文山に於けるや、猶次公の足下に於けるがごとし。会遇すること蓋し更に奇なり。文山我に紹介し、我をして交わりを足下に締めることを得さしむ。而して其の両を三にす。則ち其の奇も亦益々甚し。故に此を言ひて以て其の交わりを庶幾はん。)

東野の筆墨の交わりは決して狭いものではなかったが、尚斎とはなかなか縁がなかったようである。しかし、東野と親しい同郷の文山が、尚斎と交遊を持つに至ったことから、ついに自分にも尚斎との親交を願いいれる契機が訪れたという内容である。

これは書簡中の東野の年齢からして、尚斎が正徳元年(一七一―)に来日した朝鮮通信使との詩文の応酬で学士李東郭に称賛され、都下でますます名声が広がった時期と重なっている。なお、文中において「僕の文山に於けるや、猶次公(周南)の足下(尚斎)に於けるがごとし」の一節からは、改めて周南と尚斎との深い親交が読み取れる。

さらに、周南と東野の師である荻生徂徠も、小倉尚斎宛に書簡(「答和君実」)を送っている(16)。

次公此来、語足下不已。及見其詩、乃知次公不私其党也。足下蓋海内才哉。少頃出足下書見授。棒読之後、益信之矣。(次公此に來り、足下を語りて已まず。其の詩を見るに及んで、乃ち次公の其の党を私せざるを知る。足下は蓋し海内の才かな。少頃足下の書を出だして授けらる。棒読の後、益々之を信ずるなり。)

周南より示されて尚斎の詩を見るに及んで、その詩才を「海内の才」と称賛している。当時、徂徠学派の文人の交遊では、明の七子に倣って「吾党」(=吾が党)の語が盛んに用いられ、仲間内の意識は相当高いものがあつた。ここで「其の党を私せざる」というのは、周南が一般に言われるような学統学派に拘泥することなく、尚斎と親交を深めていることを意味している。周南の尚斎宛書簡には、次のようにある(17)。

分袂之後数月、足下無一字。僕亦不奉一言。大丈夫固不頼竿牘而相親。足下送僕序曰、不願揮淚乎臨岐之際。是先得吾心也。唯吾知足下、唯足下知吾。足下諸作、徂徠先生大賞歎、謂海内後進俊才。・・・服子遷、太宰之純、平玄中等、交口称譽。(分袂の後数月、足下一字無し。僕も亦一言を奉ぜず。大丈夫固より竿牘を頼みて相親しまず。足下僕を送る序に曰く、「臨岐の際に涙を揮ふことを願はず」と。是より先吾心を得る。

唯吾足下を知り、唯足下吾を知る。足下の諸作、徂徠先生大いに賞歎して、海内後進の俊才と謂ふ。……服子遷、太宰の純、平玄中等、口を交へて称誉す。）

周南は尚齋との信頼関係を改めて確認したうえで、徂徠が尚齋について「海内後進の俊才」と大いに賞歎し、徂徠門下の俊秀である服部南郭、太宰春台、平野金華らもまた、その才を認めていたことがうかがえる。しかも、それが単なる社交の上での世辞ではないとして、

足下自計、其為有百丈之觀者耶。徂徠先生為斯文主盟、二三子之徒自守甚高。不敢容易借人一言。其所稱者、必有所試。（足下自ら計るに、其れ百丈の觀有る者と為らんや。徂徠先生斯文の主盟を為し、二三子の徒自守すること甚だ高し。敢て容易に人に一言を借らず。其の稱する所の者は、必ず試むる所有り。）

と述べている（18）。朱子学派であった小倉尚齋を取り巻く交遊関係が、周南にとどまらず反朱子学を掲げていた師の荻生徂徠をはじめ、徂徠学派の人々からも高く評価されていたことは興味深い事実である。

5-5 結び

本章での考察からは、以下のことを指摘できる。小倉尚齋は朱子学を重んじた明倫館初代学頭といった従来書に見られる人物像以外にも、文学者としての顔を持っていた。そして、萩の地においては山県周南とともに、学統学派や社会的、政治的な関わりとは無縁の詩会をともに運営していたものと思われる。また、尚齋が江戸へ出て以降、萩の詩壇は振るわないと周南が幾度となく詩中で尚齋に述べていることからして、萩での詩会において尚齋はリーダー格であり、あるいは周南以上に大きな存在感を示していたことが推察される。そのため、尚齋が江戸へ離れてしまったことによる周南の嘆きはことのほか深く、そのことが詩中にも強くあらわれている。

一方、尚齋は江戸でもその学才を示し高い評価を得ていた。そしてその評価は学統学派の枠をこえ、荻生徂徠をはじめとして、安藤東野、服部南郭、太宰春台、平野金華といった名立たる徂徠門下の人々にまで広がりを見せている。このことは、尚齋の文才と人望の高さをうかがわせるのに充分である。

こうした事実は、視座を明倫館における尚齋と周南の関わりに転じた際にも、欠くことのできない重要な視点であると思われる。享保四年（一七一九）に明倫館が創設されると、尚齋は萩に戻って初代学頭に就任した。その一方で、五代藩主毛利吉元に命をうけ、藩校のあり方を検討し、積奠の方法と学則を定め、命名まで行った明倫館創設の実質的な立役者である周南は（19）、一儒者として教育にあたるのである。このことについては、山根華陽の「明倫館祭酒周南縣先生六十寿序」が、次のように説明している（20）。

祭酒謙讓、進故祭酒倉实操為祭酒、自為侍読如故。（祭酒〈周南〉謙讓して、故の祭酒

倉実操〈尚齋〉を進めて祭酒と為し、自ら侍読たること故のごとし。)

このくだけりから周南の謙虚な人柄をいうこともできそうだが、「謙讓」の語について字面通りに、周南が尚齋に祭酒の座を「謙遜して讓った」と解釈するのはいささか早計であろう(21)。むしろ周南は、十歳年上の尚齋の学才と人物に心服しており、敬仰していたことのあらわれであると理解するのが妥当であろう。こうした二人の親交は、学統学派の枠に捉われてきた観のある従来の明倫館研究に対しても、新たな視点を提供するものであると思われる(22)。

注

- (1) 小倉尚齋宛の山県周南詩の注釈として、『謏園録稿』(新日本古典文学大系六四、岩波書店、一九九七年)に三篇(「送倉実操」、「次韻実操東都見寄」三首のうち一首のみ、「倉都講有懷壺天園作以書需諸友之和」)が取り上げられている。
- (2) 『明倫館の教育』(萩市立明倫小学校、一九五〇年)、『近世藩校に於ける学統学派の研究(下)』(笠井助治、吉川弘文館、一九七〇年)、『萩市史』(萩市史編集委員会、一九八三年)、『山口県教育史』(山口県教育会、一九八六年)、『山口県の教育史』(小川国治・小川亜弥子、思文閣出版、二〇〇〇年)など。いずれも明倫館の初代学頭を朱子学の小倉尚齋が務め、彼の没後徂徠学の山県周南が二代学頭に就任したという旨の記述にとどまり、二人の交遊については触れられていない。
- (3) 『華陽先生文集』巻八(山口県立山口図書館蔵)。
- (4) 平成十六年から尾崎千佳、木越俊介両氏により小倉家文書(山口市後河原)の調査が行われている。同文書については尾崎氏から御教示をいただいた。
- (5) 『周南先生文集』(山口県立山口図書館蔵)。
- (6) 『韓非子』第十三篇(『韓非子新校注』上海古籍出版社、二〇〇〇年)。また尚齋の脚疾については、「長肅小倉先生墓碣」(注3前掲『華陽先生文集』)に、「先生生二載、患麻疹、遺毒発腫、遂為跛蹇」(先生生れて二載にして、麻疹を患ひ、遺毒腫を發し、遂に跛蹇と為る)とみえる。
- (7) 「与蘇武三首」。梁代の昭明太子撰『文選』巻二十九(『文選』上海古籍出版社、一九八六年)。
- (8) 注(1)前掲『謏園録稿』。
- (9) 『漢書』巻四十四(『二十四史』中華書局)に列伝が載る。淮南王劉安は書や鼓瑟を好み、賓客数千人を自らのもとに招いたとされる。
- (10) 「招隱士」は、注(7)前掲『文選』巻三十三。その序に「招隱士者、淮南小山之所作也」とある。
- (11) 注(7)前掲『文選』巻十三。
- (12) 注(7)前掲『文選』巻十一。
- (13) 日野龍夫(『徂徠学派』、筑摩書房、一九七五)は、正徳年間(一七一―一七一六)前後の学統に関わらない交遊として、伊藤仁斎と宇都宮遯庵、鳥山芝軒と伏見仏国寺の高泉和尚など、若干の例を挙げながらも、「学統を超えてまで盛んに詩文を唱酬するほどには、交遊の虚構性を享受する風は

熟していなかった」(六九～七〇頁)と指摘している。

(14) 注(5) 前掲『周南先生文集』。

(15) 『東野遺稿』(『詩集日本漢詩』第一四卷、汲古書院、影印本)。

(16) 『徂徠集』(『詩集日本漢詩』第五卷、汲古書院、影印本)。

(17) 「与和君実」(注5 前掲『周南先生文集』卷十)。

(18) 同上。

(19) 「長門国明倫館記」(注5 前掲『周南先生文集』)に、「孝孺承乏儒曹、与佐佐木雅真議之政府。規度学宮、注記祭儀、申詳功令。宮成、都名曰明倫館、取諸孟子之言。」(孝孺は儒曹を承乏し、佐佐木雅真と与に之を政府に議す。学宮を規度し、祭儀を注記し、功令を申詳す。宮成り、都名して明倫館と曰ひ、諸を孟子の言に取る)とある。同記については、本論文第六章「『長門国明倫館記』訳注および解題」参照。

(20) 注(3) 前掲『華陽先生文集』卷六。

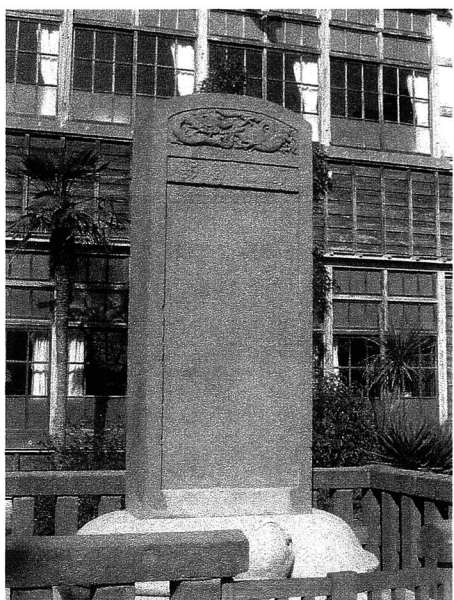
(21) 若水俊『徂徠とその門人の研究』(三一書房、一九九三年)に、「朱子学の尚斎をいわば傀儡的に初代祭酒に就任させた」(一七三頁)とあるが、尚斎に対する周南の尊敬の念を踏まえれば、この指摘はあたらなと言えよう。

(22) 明倫館では朱子学を重んじる学頭小倉尚斎のもとで、徂徠学を重んじる山県周南が蔵書の収集を主導した。その結果として徂徠学および反朱子学についての国書が充実するに至った。学統学派をこえた蔵書の収集は、二人の深い親交と相互理解があればこそ可能であったと考えられる。また朱子学の影響も、当時の明倫館にあってそれほど強くなかったことが推察される。本論文第四章「明倫館の集書にみる徂徠学の影響」参照。

第六章 「長門国明倫館記」 訳注および解題

6-1 本章の目的

「長門国明倫館記」は、元文六年（一七四一）に六代藩主毛利宗広が、先侯である毛利吉元による藩校創設の功績を後世に伝えるべく、山県周南に撰文を命じたものである。周南はすでに第二代学頭に就任しており、明倫館において徂徠学を体現する中心的人物であった。周南は、享保四年（一七一九）の創設当初から明倫館の命名をはじめ、積奠や学則の制定、蔵書の収集など、明倫館教学の実質的な立役者として尽力してきた。そうした周南が藩主の命により撰文を担ったことは、明倫館教学における徂徠学受容の一つの到達点であったとも言える。それは、古文辞を重んじる徂徠学の学問水準の高さを後世に示すとともに、藩内教学における徂徠学の浸透と定着を意味することとも同義であったはずだからである。



明倫館碑(萩市立明倫小学校内)

そうした重要な意義を持つ同記であるが、従来、『明倫館の教育』（萩市立明倫小学校編、一九五〇年）において書き下し文が掲げられるにとどまり、現在まで訳注については行われていない。そこで本章では、とりわけ語釈において可能な限り出典を掲げることに努めながら、同記の訳注を試みる。それにより周南が徂徠学の体現者として古文辞に精通していたことに加え、当時の藩内において自他ともに認める漢文の書き手として目されていたであろうことを具体的に明らかにすることを意図したからである。本章は、そうした問題意識も含めた明倫館教育の基礎的研究の一環として、従来行われてこなかった同記の訳注を提示するとともに

に、解題としてその撰文の意義について考察を行おうとするものである。

6-2 「長門国明倫館記」 訳注

〈凡例〉

- 一、「長門国明倫館記」は、『周南先生文集』（山口県立山口図書館蔵）を底本とした。
なお、同記の内容を考慮し、便宜上、前半部（一）と後半部（二）に分けた。
- 二、原文及び書き下し文は旧漢字・旧かなづかいとした。
- 三、出典の解釈については、適宜、先行の諸研究を参照した。

(一)

今侯立、繼修先侯之政、戒有司錄庶績、申令學宮、謹教化。其在國也、仲春親至學宮、祭先聖、行養老之事。遵奉先侯之道焉、而有光矣。今年二月上丁、臨學行事。乃命學職曰。昔者先侯有若令德。貽厥孫謀、其寵大矣。今而不記、後世子孫何觀焉。其序次創建嘉績、以樹學中。臣孝孺謹奉命、作文。其記曰、維享保三年戊戌、泰桓侯立十一年。上奉公朝之休命、下率先侯之舊章、恭儉躬帥、修政慎令、旰而食矣。於是申命曰、嗚呼、爾國子弟、懋哉勿怠。神祖創業、文武造士、載在令甲。我藩國敢弗承守。且昔我先侯與汝先祖經營是邦、貽茲多福。仰思勤勞、不遑寧居。爾國子弟、進德修業、答揚先德。否而尸居世祿、安逸惟恒、淫侈放肆、是汝辱而先祖、而余亦無告于先侯之靈。禮樂射御、敬業時敏、先侯之訓也。懋哉勿怠。成德達材、以篤爾祜。國政就宗廣政廣包廣保廣通、宣揚令德、將順懿美、率宗族巨室、耆老子弟、以奉命也。是年秋、遂命有司、興學宮。孝孺承乏儒曹、與佐佐木雅眞、議之政府。規度學宮、注記祭儀、申詳功令。宮成、都名曰明倫館、取諸孟子之言。北爲先聖廟、講堂居中。左爲經籍之庫、右爲厨、厨之西爲齋舍、廩生員。內門外、環以列樹講武。東爲劍、西爲鎗。射圃在其西。旁圃爲講武經、習曲禮、教天文數學之樹。射圃南、童生學書之舍。大門外、壯士習騎之埒。凡子弟當業而肄者莫不備設。

(書き下し文)

今侯立ちて先侯の政を繼修し、有司を戒め庶績を録し、學宮に申令して教化を謹む。其の國に在るや、仲春親ら學宮に至り先聖を祭り、養老の事を行ふ。先侯の道を遵奉して光有り。今年二月の上丁、學に臨み事を行ふ。乃ち學職に命じて曰く、「昔、先侯若くのごとき令徳有り。厥の孫謀を貽すは、其の寵大なり。今にして記さざれば後世の子孫何をか觀ん。其れ創建の嘉績を序次し、以て學中に樹てよ」と。臣孝孺謹んで命を奉じて文を作る。其の記に曰く、維れ享保三年戊戌、泰桓侯立ちて十一年。上は公朝の休命を奉じ、下は先侯の舊章に率ひ、恭儉にして躬ら帥み、政を修め令を慎み、旰れて食ふ。是に於て命を申ねて曰く、「嗚呼、爾國の子弟、懋めよや、怠ること勿れ。神祖創業するに、文武の士を造るは、載せて令甲に在り。我が藩國敢て承守せざらんや。且つ昔、我が先侯は汝の先祖とともに、是の邦を經營し、茲の多福を貽す。仰ぎて勤勞を思ふに、寧居に遑あらず。爾國の子弟、徳を進め業を修め、先徳に答揚せよ。否らずして世祿に尸居し、安逸惟れ恒とし、淫侈放肆せば、是れ汝而の先祖を辱しめ、而して余も亦先侯の靈に告ぐる事無し。禮樂射御、業を敬ひ時に敏むるは、先侯の訓へなり。懋めよや怠ること勿れ。徳を成し材を達し、以て爾の祜ひを篤くせよ」と。國政の就宗・廣政・廣包・廣保・廣通は、令徳を宣揚し、懿美を將順し、宗族・巨室・耆老・子弟を率ゐ、以て命を奉ずるなり。是の年の秋、遂に有司に命じて學宮を興さしむ。孝孺は儒曹を承乏し、佐佐木雅眞と与に之を政府に議す。學宮を規度し、祭儀を注記し、功令を申詳す。宮成り、都名して明倫館と曰ひ、諸を孟子の言に取る。北を先聖廟と爲し、講堂を中に居く。左を經籍の庫と爲し、右を厨

と爲す。厨の西を齋舎と爲し、生員を廩す。内門の外は環らずに列樹を以てし武を講ず。東を劍と爲し、西を鎗と爲す。射圃は其の西に在り。旁の圃は武經を講じ、曲禮を習ひ、天文數學を教ふるの樹と爲す。射圃の南は童生書を學ぶの舎なり。大門の外は壯士騎を習ふの埒なり。凡そ子弟、當に業として肄ふべき者備設せざるは莫し。

(語釈)

○今侯 六代萩藩主毛利宗広(一七一七～一七五一)。教学の振興や財政整理に力を注いだ。
○継修 受け継ぐ。○先侯 五代萩藩主毛利吉元(一六七七～一七三一)。享保四年(一七一九)に明倫館を創設した。○有司 官吏。○庶績 もろもろの功績。「庶績を帝室に讃す。」(潘岳・西征賦)○申令 重ねて命ずる。○学宮 学校。「之に学宮を立つれば、以て万民協するに足る。」(春秋公羊伝・隱公五年・注)○仲春 陰曆二月。○先聖 古の聖人。ここでは孔子を指す。○養老之事 養老の礼。耆徳篤行の人を招いて酒食を饗し、敬い礼する儀式。後述の「養老之道」も参照。○遵奉 したがいまもる。「遺詔を遵奉す。」(史記・秦始皇紀)○有光 誉れがある。「朝に臨み、光有り。」(漢書・叙伝)○上丁 陰曆二月の最初の上丁(かみのひのと)の日に、孔子を祀る積奠が行われた。○令徳 美德。「顯顯たる令徳、民に宜しく人に宜し。」(詩經・大雅・仮楽)○貽厥孫謀 子孫のためになることを残す。「厥の孫謀を貽し、以て翼子を燕しましむ。」(詩經・大雅・文王有声)○嘉績 業績。「嘉績先王に多く、予は小子にして、垂拱し成さんと仰ぐ。」(書經・畢命)○序次 次第を正しく述べる。「序は次なり。績は功なり。」(春秋公羊伝・僖公四年・注)○孝孺 山県周南(一六八七～一七五二)。明倫館創設の実務を担当するとともに、多くの子弟の教化にあたり、第二代学頭を務めた。○泰桓侯 前出毛利吉元。○休命 天子の大命。「以て悪を遠め、善を揚ぐは天の休命に順ふ。」(易經・大有)○旧章 先君が定めたきまり。「旧章は、先王の成法なり。」(書經・蔡仲之命・蔡伝)○共儉 つつしむ。「共儉莊敬は、礼教なり。」(礼記・經解)○躬帥 みずからひきいる。「躬は、身親ら之を行ふを謂ふ。」(漢書・公孫弘伝・顔師古注)○盱食 食を忘れて政務に励む。「日盱れて天子食を忘る。」(漢書・張湯伝)○神祖創業 徳川家康(一五四二～一六一六)が江戸幕府を開いたことをいう。○文武造士 文武に通じた士を育成する。○令甲 政令。「天子の言に曰く、令は、令甲・令乙、是なり。」(新書・等齋)○承守 受け継ぎ守る。○經營 治めいとなむ。「一国を經營す。」(列子・湯問)○多福 多くの幸い。「予小子永く多福を膺す。」(書經・畢命)○勤勞 つとめ骨折る。「昔公王家に勤勞す。」(書經・金縢)○不遑 暇がない。「寧処するに遑あらず。」(詩經・召南・殷其雷序)○寧居 心を安んじて居る。○進徳修業 徳を成し、学業を修める。「君子は徳を進め、業を修む。」(易經・乾卦)○答揚 答えて奮起する。「文武の光訓に答揚せよ。」(書經・顧命)○世祿 代々の扶持。○尸居 何もせずに居ること。「諫垣尸居にして職業を廢し、朝事汲汲として精神勞す。」(歐陽脩・韓子華を送る詩)○

安逸 身体を勞せず遊び居ること。「佚、樂なり。読は逸に同じ。」(漢書・司馬相如伝・顔師古注) ○淫侈 奢侈に流れる。「大いに淫侈せず。」(漢書・叙伝) ○放肆 放縱。「律は累なり。人心を累するに、放肆を得ざらしむ。」(釈名・釈典芸) ○射御 六芸の中の二種である弓馬をいう。「射御違はず。」(書経・秦誓) ○敬業 学問を敬う。「三年業を敬ひ、羣を樂しむを視る。」(礼記・学記) ○敏 つとめる。「敏、猶ほ勉むるのごとし。」(中庸・鄭注) ○成徳達材 徳を成し、個性を伸長しながら人格を陶冶する。「徳を成す者有り、財を達する者有り。」(孟子・尽心上) ○就宗 宍戸就宗〈就延とも〉(一六四四～一七二二)。加判役・家老を務め、明倫館創設に尽力した。三丘宍戸。○広政 毛利広政(一六八四～一七三〇)。江戸加判役・当職などを務め、明倫館創設をはじめ文教面で藩政に尽力した。右田毛利。○広包 毛利広包(一六八八～一七三七)。吉敷毛利。○広保 桂広保(一六八八～一七六九)。当職・当役などを務め、藩主三代に歴仕し、とりわけ文武の振興に尽力した。著書に『蒙求拾遺』がある。○広通 山内広通(一六八八～一七四七)。吉元・宗広のもとで国老を務め、財政整理をはじめとする藩政改革に尽力した。○宣揚 広く世に知らせる。○将順懿美 美德をうけたがう。「其の美を将順し、其の悪を匡救す。故に上下能く相親しむなり。」(孝経・事君章) ○宗族 一族。「宗族兄弟に親しむ。」(周礼・春官・大宗伯) ○巨室 父祖の代から仕える家柄。「巨室の慕ふ所は、一国之を慕ふ。」(孟子・離婁上) ○耆老 老年で徳の高い人。「魯の哀公、孔丘に謀して曰く、天、耆老を遺さず、予が位を相くる莫し。」(礼記・檀弓上) ○子弟 若者。「凡そ国の貴遊子弟学ぶ。」(周礼・地官・師氏) ○承乏 才能の乏しさをもって。謙遜の辞。「官を攝るに承乏す。」(春秋左氏伝・成公二年) ○佐佐木雅真 明倫館創設に際して、経学をもって藩の儒者となった。○規度 定める。○祭儀 積奠の方法。「長州藩明倫館の積奠」(須藤敏夫『近世日本積奠の研究』、思文閣出版、二〇〇一年)に詳しい。○申詳 明らかにする。○功令 学事に関する規定。「太史公曰く、余功令を讀し、学官を厲するの路を広むるに至る。」(史記・儒林伝序) ○都名 雅名。「師古曰く、都は美なり。」(漢書・司馬相如伝・注)、「索隱に曰く、都は雅なり。」(史記・司馬相如伝・注) ○取諸孟子之言 「明倫」の語は、「庠序学校を設為し、以て之を教ふ。(中略)学は則ち三代之を共にす。皆人倫を明らかにする所以なり。人倫上に明らかにして、小民下に親しむ。」(孟子・滕文公上)を出典とすることをいう。山県周南の撰。本論文第三章「明倫館の命名にみる徂徠学の影響」参照。○先聖廟 先聖(孔子)と四賢(顔子・曾子・子思・孟子)の木主を祭り、「大成殿」と称した。○厨 調理場。○齋舎 寮舎。○生員 学生。○廩 あつめる。○樹 講武所。広義で学ぶ室。「樹は、講武の坐屋なり。」(漢書・五行志上) ○武経 宋の元豊年間(一〇七七～一〇八五)に、七書(『六韜』『孫子』『呉子』『司馬法』『三略』『尉繚子』『李衛公問對』)を兵学の典拠として選定した。

〈通釈〉

今侯（宗広）が襲封して、先侯（吉元）のまつりごとを引き継がれるに、官吏を戒め、諸々の事績を記し、さらに学館への度重なる御達しを示されて、教化に努められている。萩における在国中は、仲春に自ら学館に赴き、先聖を祭り、養老の事を行われるなど、先侯の御意志にしたがい、まことに誉れあるご様子である。

今年二月の上丁の日に、学館において釈奠が行われた際、今侯より、「昔、先侯より次のような御達しがあった。事績を伝え残すことは、子孫にとってその恩恵大なるものがある。今、残しておかなければ、後世の子孫は学館の由来を知ることが出来ない。学館創設の業績を記し、学内に立てよ」と命じられた。そこで私が、謹んでその命を拝して記すのである。

享保三年の当時、泰桓侯（吉元）が藩主となられて十一年の歳月が経っていた。その間、上は朝廷の命を拝し、下は先侯の定められた道にしたがい、自らをつつしみ、政務に励まれた。そして、泰桓侯は重ねて次のように命じられた。

「我が藩の若者たちよ、つとめて怠ることなきように。徳川家康公が幕府を開かれてより、文武の士の育成を掲げられた。我が藩においても、そうした人材育成に力を入れないでよいはずがない。昔、我が先侯は、汝らの先祖とともに、この国を治め、こうして現在までも多幸を残してくれている。我々は厚き君恩に感謝するとともに、各自の分を立派に果たす使命があり、安穩としている暇などない。我が藩の若者たちよ、徳を養い、学業を修め、先人の徳に答えて奮起せよ。もし、代々の扶持に甘え、身体を勞せず、奢侈放恣にふければ、汝らの先祖を辱めるだけでなく、私もまた先侯の靈に合わせる顔がない。礼楽、弓馬、学問を敬い、つねに研鑽することこそ、先侯の教えである。つとめて怠ることなきように。徳を成し、材を達し、汝らの持てる力を存分に發揮せよ」。

国政に関わる宍戸就宗・毛利広政・毛利広包・桂広保・山内広通は、そうした先侯の御志を広く世に知らしめ、その素晴らしさにしたがって、一族・譜代の家臣・耆徳篤行の人物・子弟たちを率いて、君命をうけたまわる。この年の秋、官吏に命じて、学館の創設を準備させた。私は儒者として、佐々木雅真とともに藩政府に奏議した。そして、学館のあり方を計画し、釈奠について書き記し、学則を定め、明倫館と名付けた。この命名は、『孟子』を出典とするのである。

学内の北を先聖の廟とし、講堂は学館の中心に置く。その左を書庫とし、右を調理場とする。そして、その西を寮舎として学生を養う。内門の外側に講武場を並べ、東を剣術場、西を槍術場とする。射術場はその西に位置する。その傍の敷地は、武経を講じ、曲礼を習得し、天文数学を教える室とする。射術場の南は、子供が書を学ぶ室である。大門の外は、壮士が騎馬を習う敷地である。およそ学生たちの学ぶ場として、この上ない環境が整っている。

(二)

内衛帥二員、統領學事。越明年己亥正月告成。於是二月上丁、始祭先聖四配於學。賓耆老、觀養老之道、著爲常典、世世無替。謹按、庠序之設、將使斯民納乎軌焉者也。是以自古以來、有士者、未之或違。光耀史策、稱頌盛德、而世不絕筆也。大東學政、載在延喜式。自皇都以及列州、莫不有學焉。春秋祀典、取法李唐。內外異制、尊卑有等、而其於教化之法、欽崇之意、未始不同矣。中葉以來、國史失官、降及戰國、喪亂相尋、制度陵缺。先王之大經大法、殆于熄矣。當是時也、干戈爲政、庠黷無聞。神祖武成。帥諸侯而紀政。乃徵林羅山氏、咨詢時務。於是儒教蔚興、海內嚮風。爰逮憲廟、興學宮、飭祀典。語見林學士記。宗藩三國、賀會備土、文獻迭顯、隆比齊魯。其他列侯小國、相繼而起、往往有河間文翁之稱。延天以來、於斯爲美。猗歟盛矣哉。我國自洞春公霸西土也、聘高倉管子講學、三原黃門、師足利白鷗洲、豐浦參議、學別府周徹。自此後嗣侯、無不有師儒也。先臣之敦詩書者有徒矣。上之教也。且昔先世、世司皇朝文命、以牖斯民也、功烈藏在天府。宜永世蕃昌、保譽命以禋祀于大國也。詩云、迨天之未陰雨、徹彼桑土、綢繆牖戶。君子若欲綢繆國家、宜莫若學。豈弟君子民父母。傳曰、學殖也。不學將落。教之不落。其爲父母也大矣。畏天之威、于時保之、由此以事厥祖、由是以述其職、恭敬之至也。所謂、君子有穀詒孫子、于胥樂兮者、先君之謂也。靡有不孝、自求伊祜者、今侯之謂也。謹記盛事、且錄贊事有司姓名、以垂後昆云。

元文六年辛酉春

館祭酒山縣孝孺少助謹撰

(書き下し文)

内衛帥二員、學事を統領す。越して明年己亥正月成るを告ぐ。是に於て二月の上丁、始めて先聖四配を學に祭り、耆老を賓して養老の道を觀じ、著して常典と爲し、世世替ること無からしむ。謹んで按ずるに、庠序の設は、將に斯の民をして軌に納れしめんとする者なり。是を以て古より以來、有士の者、未だ之れ違ふこと或らず。史策を光耀し、盛徳を稱頌し、而して世々筆を絶たざるなり。大東の學政は、載せて延喜式に在り。皇都より以て列州に及ぶまで、學有らざること莫し。春秋の祀典は、法を李唐に取り、内外制を異にし、尊卑に等有れども、其の教化の法、欽崇の意に於ては、未だ始めより同じからずんばあらず。中葉以來、國史は官を失ひ、降りて戰國に及び、喪亂相尋ぎ、制度は陵缺し、先王の大經大法殆ど熄めり。是の時に當り、干戈もて政を爲し、庠黷聞こゆること無し。神祖武成り、諸侯を帥めて政を紀す。乃ち林羅山氏を徵し、時務を咨詢せしむ。是に於て儒教蔚興し、海内風に嚮ふ。爰に憲廟に逮び學宮を興し、祀典を飭ふ。語は林學士の記に見ゆ。宗藩三國、賀會備土の文獻に迭ひに顯れ、隆んなること齊魯に比す。其の他列侯小國、

相繼いで起し、往往にして河間文翁の稱有り。延天以來、斯に於て美と爲す。ああ、盛んなるかな。我が國は洞春公の西土に霸たりしや、高倉管子を聘し學を講ぜしめてより、三原の黃門は足利白鷗洲を師とし、豐浦の參議は別府周徹に學ぶ。此れより後の嗣侯、師儒有らざるは無きなり。先臣の詩書に敦き者徒有るなり。上の教へなり。且つ昔先世、世々皇朝の文命を司り、以て斯の民を牖くや、功烈藏して天府に在り。宜なり、永世蕃昌し、譽命を保ち、以て大國に禋祀せらるるや。詩に云ふ、「天の未だ陰雨せざるに迨んで、彼の桑土を徹り、牖戸を綢繆す」と。君子若し國家を綢繆せんと欲せば、宜しく學ぶに若くは莫かるべし。豈弟の君子は民の父母なり。傳に曰く、「學は殖なり。學ばずんば將に落ちんとす」と。之を教へて落さず。其の父母たるや大なり。天の威を畏れ、予時に之を保ち、此に由りて以て厥の祖に事へ、是に由りて以て其の職を述ぶるは、恭敬の至りなり。所謂、「君子穀かれ、孫子に諭せ。予に誓いに樂しまん」といふは、先君の謂なり。「孝ならざる有る靡く、自ら伊の祐ひを求めん」とは、今侯の謂なり。謹んで盛事を記し、且つ贊事の有司の姓名を録し、以て後昆に垂れんと云ふ。

元文六年辛酉春

館祭酒山縣孝孺少助謹んで撰す

(語釈)

○内衛帥二員 同記の割注に、「主事坂時存・八谷通重、学事を専当す。」と見える。○祭先聖四配於学 聖廟である大成殿に、先聖と四賢の木主を祭ったことをいう。木主の尊号は、林大学頭信篤の揮毫になる。同記の割注に、「明の制の木主を用ゐ、整宇林祭酒字を填し、祭礼は延喜式の諸国の積奠式を用ゐる。参ずるに東都の今の制を以てし、国主自ら祝文を献じ、中老一人初献を代囁す。学頭巫献し、儒曹の長者一人終献す。」と見える。○養老之道 同記の割注に、「祭礼畢りて、盛礼を設け、士の老五人、庶人の老四人を学に饗し、饗畢りて帛を賜ふ。献官接伴す。国主親しく自ら存問す。」と見える。○常典 常例。○世世 代々。「世世萬子孫變ずることなかれ。」(礼記・檀弓下) ○無替 廢すことがない。「王は乃ち徳を昭かにし、之を異姓の邦に致すに、厥の服替るること無し。」(書経・放勳) ○庠序之設 学館の創設。「庠序学校を設為し以て之を教ふ。」(孟子・滕文公上) ○斯民納乎軌 人としての道を歩ませる。「且つ君の斯の民をして、学んで以て其の徳を成さしむる。」

(荻生徂徠・弁名)を踏まえていると思われる。○有土 国君。「上下を達するに、有土を敬するかな。」(書経・皋陶謨) ○大東 日本。○延喜式 康保四年(九六七)に施行された、朝廷の年中儀式や制度などを記した細則。○春秋祀典 春と秋に行う積奠。○取法李唐 唐王朝の制度に倣う。李唐とは、皇帝が李姓であることからいう。『延喜式』に載る積奠の方法が、玄宗皇帝治世の『開元礼』に倣ったものであることをいう。○異制 制度を

異にする。「古今制を異にす。」(漢書・魏相伝) ○等 等級。○欽崇 「天道を欽崇し、永く天命を保つ。」(書経・仲虺之誥) ○中葉以来、国史失官 奈良・平安時代に編修された六国史(『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『文徳実録』『三代実録』)以降、官撰国史がない状態をいう。○陵缺 退廃。「叔末澆訛し、王道陵缺す。」(後漢書・黨錮伝) ○先王之経大法 先王が定めた大いなる道。○干戈 武器。転じて、武力。○庠黌 学校。○林羅山 一五八三～一六五七。藤原惺窩(一五六一～一六一九)に朱子学を学び、家康以後四代の侍講を務める。林家の私塾として忍岡聖堂を建立した。○蔚興 さかんになる。○嚮風 その風に倣う。「天下の士、斐然として風に嚮ふ。」(賈誼・過秦論下) ○憲廟 五代将軍、徳川綱吉(一六四六～一七〇九)。元禄四年、林家の私塾である忍岡聖堂を湯島に移し、新たに聖堂を建立した。○宗藩三国 徳川御三家。水戸(彰考館・元禄一年)・尾張(明倫堂・藩祖義直の治世)・紀伊(学習館、正徳三年)。○賀会備土 肥前(多久聖廟・宝永五年)・会津(日新館・寛永年間)・備前(花鳥教場・寛永一八年、及び閑谷学校・寛文九年)・土佐(会所講・享保一七年、のちの教授館)。「賀」は、加賀(明倫堂・寛政四年)とも考えられるが、同記の撰文とは年代が合致しない。○齊魯 孔孟の生誕地。転じて、文教の盛んなこと。○河間文翁 漢代の献王と文翁。献王は、「献王の得る所の書はみな古文先秦の旧書」とある好学の人物で、『漢書』(卷五十三)に見える。文翁は、武帝の治世、国中に学校をおこし、教化に大いに尽力した。『漢書』(卷八十九)に見える。○延天 醍醐天皇の治世(九一〇～九二三)。「延喜の治」とも称され、善政の範とされた。○洞春公 毛利元就(一四九七～一五七一)。○高倉菅子 同記の割注に、「高倉兵庫頭を京師に聘し、館を授け学を講ぜしむ。」と見える。○三原黄門 小早川隆景(一五三三～一五九七)。○足利白鷗洲 足利学校の儒者。○豊浦参議 長府藩初代藩主毛利秀元(一五七九～一六五〇)。○別府周徹 同記の割注に、「藤惺窩の門人、嘗て周礼儀礼を校刊す。」と見える。○文命 文教。「文命四海に敷き、^{つつし}祗んで帝に承る。」(書経・大禹謨)。「世々皇朝の文命を司る」とは、毛利家の祖が、清和天皇の侍読を務めた文章博士の大江音人(八一～八七七)までさかのぼることを踏まえている。○功烈 大きな功績。「其の功烈を銘ず。」(春秋左氏伝・襄公十九年) ○天府 天のくら。転じて、限りないこと。「天府と曰ふは、天府、天の府蔵なり。」(荀子・大略・注) ○永世 永遠。「其れ爾の休は、終に永世に辞有り。」(書経・君陳) ○蕃昌 栄える。「其の祚胤繁昌すること久長なるを云ふ。」(史記・三皇紀) ○誉命 誉れある使命。○禋祀 潔斎して享する。「其の九族に親しむに、以て其の禋祀を致す。」(春秋左氏伝・桓公六年) ○詩 詩経。○迨天之未陰雨、徹彼桑土、綢繆牖戸 小鳥は雨の降らないうちから、桑の根の皮によって巣を繕い固める。「天の未だ陰雨せざるにおよんで、彼の桑土を徹り、牖戸を綢繆す。」(詩経・豳風・鴟鴞) ○豈弟君子民父母 すぐれた君子は、人々を教えみちびく父母である。「愷弟の君子は、民の父母なり。」(詩経・大雅・洞酌) ○傳 春秋左氏伝。○学殖 草木を植え育てるように、人格を形成

する糧が学問である。「夫れ学は殖なり。殖せずんば將に落ちんとす。」(春秋左氏伝・昭公十八年)。さらにその注に、「殖は生長なり。言ふに、学の徳を進むるは、農の苗を殖すがごとく、日に新たに日に益なり。」とある。○畏天之威、于時保之 「天の威を畏れ、于時に之を保つ」(詩経・周頌・我将) ○述職 職事を朝廷に報告する。転じて、職を全うする。

「小は述職有り、大は巡功有り。」(春秋左氏伝・昭公五年) ○君子有穀、詒孫子、于胥樂兮 「君子」は、祖靈。「有穀」は、「穀かれ」と訓読し、幸いがあるように。「君子穀かれ、孫子に詒せ。于に胥いに樂しまん」(詩経・魯頌・有駟) ○靡有不孝、自求伊祐 「孝」は、祖靈の祭祀。「伊」は、「この～」と訓読する。「孝ならざる有る靡く、自ら伊の祐ひを求めん」(詩経・魯頌・泮水) ○後昆 後世。

〈通釈〉

内衛帥二人が学事をつかさどり、翌年の正月に学館が完成した。二月の上丁の日に、積奠を執り行った。耆徳篤行の人物を主賓として迎え、養老の道を示し、後世までの常例とした。謹んで鑑みるに、学館の創設は、民に人としての道を歩ませるためのものである。古より国君も未だ例外なく、歴史書において学校創設の事績を尊重し、その盛徳を称揚し、いつの世でも筆が絶たれることはない。我が国の学制は古くは延喜式にあり、学問の風土は都より全国各地に及んでいた。積奠の方法は、唐王朝の制度に倣った。国内外でその制度は異なり、それぞれの等級において尊卑もあるが、人々を教化する方法、先聖を尊ぶ意においては少しも変わるものではない。

中世以降、国史は官を失い、時代が下って戦国の世に至ると、争乱が相次ぎ、社会の制度は退廃し、尊ぶべき先王の道は姿を消してしまった。その後、武力による政治が行われるようになり、学館の存在を聞くこともなくなった。

しかし、家康公が諸大名を統率し、政治を正された。そして林羅山氏を重用し、政務を諮られるようになった。ここにおいて儒教が盛んとなり、国内にその教化が行き渡った。綱吉公は、幕府の学館を興し、積奠を厳肅に執り行った。その際の語は、林氏の記に見える。徳川御三家、肥前・会津・備前・土佐の地にも学館がそれぞれ創設され、学問の盛んな様子は、かの齊魯に肩を並べるほどである。その他の藩国においても学館が相次いで創設され、その好学の様子は漢代の献王と文翁の事績を思わせる。延喜以来、その隆盛ぶりはこの上ない。

我が藩においても、元就公が西国に覇を唱えて以来、高倉菅子殿を招聘して儒学を講じさせ、隆景公は足利白鷗洲殿に師事し、秀元公は別府周徹殿に学ばれた。これよりのち、国君には必ず師儒があり、代々詩書を尊重してきたことは、上の教えそのものである。そして、朝廷の文教という大任を担い、民をみちびいてきた功績は計り知れず限りない。長きにわたり、誉れある使命を全うし、この藩国を持してきた。

『詩経』に、「小鳥はまだ雨の降らないうちから、桑の根の皮によって巢を繕い固める」

とある。同様に、国家を盤石に保つためには、日頃からの学問こそ肝要である。すぐれた君子は、人々を教えみちびく父母同然である。『春秋左氏伝』には、「草木を植え育てるように、人格を形成する糧が学問である。学ばない者は、枯れゆく草木同様に零落していく」とある。それに気付かせ、多くの人々を感化する君子は偉大である。

天の威光をかしこみ、その教えと藩国を守り、先祖に仕え、職事を全うすることは、この上ない行いである。「先祖に幸ありて、子孫はその恩恵をいただき、ともに楽しまん」とは、先侯の御志である。また「輝かしい先祖の祭祀を怠ることなく、自らこの幸いを求めん」とするは、今侯の御志である。ここに謹んで学館創設の由来を記し、かつ賛同する関係者の名を記し、後世の人々に示さんとするのである。

6-3 解題—撰文の意義について—

従来、「長門国明倫館記」については、次の両氏がその内容について述べている。

石川謙氏は、『館』のできてきた由来と『館』設立の精神を語ったものであり、『民の父母』たるものの任として、また列祖好学の風をつぐものとして、この学館を建てた、という趣意を力説」しているとする(1)。また、久富木成大氏は、「萩の明倫館が、どのようにして、いかなる人々の尽力によって出来たのかということと、その背後にあって、決定的な影響力をもたらした、先代と今の藩侯との人徳の力というようなものが、本記にはよくえがき尽されている。そして、その時までの日本の学校の歴史のなかで、明倫館の占める位置というものが、この文章によって、わかるようになっているのである」としている(2)。

確かにこれらの指摘どおり、「長門国明倫館記」は、館創設の由来とその精神を語るとともに、藩校教育にかける先侯と今侯の並々ならぬ思いを記し、有為な人材の育成に邁進せんとする明倫館が目指すべき方向性を示している。一方で、藩内での学統学派の問題を視野に入れるとき、同記が持つ別の意義も指摘し得るのである。

元文二年(一七三七)、明倫館初代学頭の小倉尚斎が没すると、山県周南が第二代学頭に就任した。そこで周南は、「学館功令」を定めて翌年二月一日に公示し、明倫館諸生に対して学事の規定と、学ぼうえでの心構えを新たに示した。その冒頭は次のようである(3)。

学校之設、達材成徳、上焉以供国家之用、下焉以使有所矜式也。(学校の設は、材を達し徳を成し、上は以て国家の用に供し、下は以て矜式する所有らしむるなり。)

「達材成徳」を掲げ、藩に有為な人材を育成するとして、藩校創設の意義と教育理念を説いている。さらに続けて、師である萩生徂徠の学問について話が及ぶ。

昔者我徂徠先生、年方四十、始修古文辞、蓋十年作弁道。先生之於文也、可見焉耳。(昔者我が徂徠先生、年方に四十にして、始めて古文辞を修め、蓋し十年弁道を作る。先生の文に於いてをや、見るべきのみ。)

ここで注目されるのは、明倫館教育の学事規定の前文とも言えるなかに、師である徂徠の学問について堂々と述べていることである。これを根拠として先行研究では一様に、朱子学を重んじていた小倉尚斎の没後、周南が二代学頭に就任するにおよんで、明倫館は徂徠学に転換したとされてきた(4)。しかし、もしそれが事実とすればいわば大転換であり、学頭職が変わると同時に朱子学から徂徠学への転換が成り、相対立する学統学派に円滑に切り替わったなどということは実際には考えにくい。

これは明倫館内部での学統学派が、実質的にはすでに徂徠学であったことを示唆している。これまで各章で指摘してきたように(5)、明倫館における学統学派は、創設期から周南を媒介して徂徠学が受容され、その影響のもとで着実に徂徠学が根を張りつつあったと考えなければ説明できるものではない。

一方で、「長門国明倫館記」においては、我が国の学校の歴史の流れの中で、学統学派といった相違をこえて、林羅山を嚆矢とする儒学の勃興を高く評価している。時の藩主毛利吉元が人材育成に志を得て、当初は朱子学を標榜して創設された明倫館の経緯を鑑みたと、あえて学統学派に関する内容を文面ににじませることは、藩主への配慮からも決して相応しくないことを、周南は誰よりも承知していたものと思われる。

このように表立って学統学派についての記述はないものの、たとえば「民の父母」たる君子の育成を教育理念として掲げようとするところに、徂徠学の影響が認められる(6)。それはまた、文辞の面においても言える。周南の詩文観である「経術文章を以て宗と為し、文は則ち秦漢、詩は則ち唐明を帰と為す」(7)とは、もとより師である徂徠の詩文観を継承したものである。徂徠の詩文観は、次の文章によくあらわれている(8)。

四書五経の新注大全等。宋儒の語録類。詩文にては東坡・山谷・三体詩・瀛奎律髓之類。歴史にては通鑑綱目の書法發明等。皆損友と可被思召候。経学は古注。歴史は左伝・国語・史記・前漢書。文章は楚辞・文選・韓・柳迄は不苦候。惣而漢以前の書籍は。老・荘・列之類も益人之知見候。是も林希逸解は悪敷候。詩は唐詩選・唐詩品彙。是等を益友と可被思召候。明朝の李空同・何大復・李于鱗・王元美詩文宜敷候得共。是は遠境書籍有之間敷存候。先有増右之通と可被思召候。

「長門国明倫館記」における語の典故の多くは、師である徂徠の詩文観の範囲を出るものではなく、ほぼそれを継承したものと言うことができる。そして、その堂々たる古文辞自体が徂徠学を体現していたと言えるのである。また、撰文の当時、すでに徂徠学は江戸でも広く浸透し(9)、藩内においても周南は六代藩主である毛利宗広から全幅の信頼を得ていた(10)。そうした外的な諸条件に加え、何よりも周南自身が著した「学館功令」に象徴されるように、学頭職にある自らの存在がすでに明倫館における徂徠学の浸透と定着を揺るぎないものにしていたのである。

山県周南が「長門国明倫館記」の撰文という形で体現した学問水準の高さは、当時の藩内の人々をして古文辞を重んじる徂徠学の妥当性を、強く認識せしめたはずである。明倫

館ではその盛衰はありながらも、第九代学頭の山県太華が公式に朱子学に転換するまで、約百二十年間の長きにわたり、徂徠学が教学の主流であった。そのことを思うとき、「長門国明倫館記」は、徂徠に師事することで周南が直接学び得た古文辞学の成果を余すところなく示した撰文として、藩内教学における徂徠学の精神的支柱とも言うべき役割を担っていったものと考えられる。

注

- (1) 『日本学校史の研究』(小学館、一九六〇年)、五二四頁。
- (2) 藤井明・久富木成大『山井崑崙・山県周南』(明德出版社、一九八八年)、一六二頁。
- (3) 『周南先生文集』巻九(山口県立山口図書館蔵)。
- (4) 『山口県教育史』(山口県教育会、一九八六年)、一五九頁。学統学派の転換に関しては、本論文序章参照。
- (5) 本論文第二章「荻生徂徠の教育論と明倫館への影響」、同第三章「明倫館の命名にみる徂徠学の影響」、同第四章「明倫館の集書にみる徂徠学の影響」。
- (6) 本論文第二章2-4-1「士君子育成の重視—『民の父母』語を中心に—」参照。
- (7) 「周南先生行状」(注3前掲『周南先生文集』)。
- (8) 『徂徠先生答問書』(『荻生徂徠全集』第一巻、みすず書房、一九七三年)、四六八頁。
- (9) 辻達也「政談」解題(日本思想大系三六『荻生徂徠』、岩波書店、一九七三年)、今中寛司『徂徠学の史的研究』(思文閣出版、一九九二年)。
- (10) 注(7)前掲「周南先生行状」に、「及観光侯立、又命侍講読。侯好学尊賢、有光于先侯。親敬先考倍於往日。侯東則従、居則毎在左右。顧問應對、眷遇益渥。」(観光侯立つに及んで、又命ぜられ講読に侍す。侯は学を好み賢を尊び、先侯に光有り。先考を親敬すること往日に倍す。侯東すれば則ち従ひ、居れば則ち毎に左右に在り。顧問應對し、眷遇益々渥し。)とある。

終章 結語

長州藩は、幕末維新期に数多くの有為な人材を輩出した。その原動力は、松下村塾を主宰した吉田松陰であり、防長教育の伝統もここにはじまるという語られ方をすることが多い。ただし、松陰もまた、当時防長の地に濃厚に存していた教育風土と、藩学振興の中で育まれた一人であったことを思うとき、藩内教学の中心となった明倫館創設の実質的な立役者であり、その基礎づくりに尽力した山県周南の存在なくしてそれを語ることはできない。

しかし、序章で述べたように、明倫館における山県周南の教育理論とその実践について論じた個別研究は少なく、その研究も十分に進んでいるとは言い難い。本論文では、そうした現状に鑑み、周南がその創設期から明倫館の様々な面で、師説である徂徠学による教育理論の実践を着実にを行い、教学面における徂徠学の浸透と定着に多大な尽力があったことを明らかにするとともに、未だ定論を見ない学統学派の問題についても言及することを目的とした。各章における考察については、以下のようである。

第一章では、長州の藩学の歴史的経緯を概観するとともに、その全体像の中で山県周南の存在が、長州藩の学問・教育風土を拓いた淵源として位置づけられることを論じた。

第二章では、荻生徂徠への師事が山県周南に多大な影響を与え、さらに師説による士君子育成の重視、個性の尊重、自学独習の重視といった教育論が、山県周南を媒介して明倫館教育の随所に受容されていることを論じた。その一方で、山県周南は教育論に関していえば、教育の範囲を士君子層に限定し、教育の力にも限界を認めていた師説を盲従するものではなく、人は学ばば誰でも伸びていくとする教育論も有しており、ここに彼の教育者としての真摯さがみてとれる。

第三章では、山県周南による『孟子』を出典とした明倫館の命名事情について再検討した。先行研究では、明倫館の命名に『孟子』を批判の対象としていた徂徠学の影響は認められず、藩主をはじめとする朱子学を重んじる人々への譲歩妥協であったとされてきた。しかし、荻生徂徠が『孟子』を批判の対象とだけ捉えておらず、とりわけ「明倫」の語に対しては高く評価していたことや、命名を担当した山県周南自身が孟子を否定するものではなかったことを指摘し、山県周南が徂徠学の教育論の反映を意図した命名を行っていることを論じた。徂徠の教育論で重視されるのは、民を安んずるために学んで徳を成す君子の育成である。その点をとくに反映しているのが、「人倫上に明らかにして、小民下に親しむ」の一節を踏まえた命名であった。長州藩校明倫館は単に人としての道を明らかにするために学ぶのではなく、上に立つ者が倫理を体現するほどの自覚を持って学び、庶民の手本となっていこうとする人材の育成を理想として掲げた。周南はそうした徂徠学の教育論に即した命名を行ったのである。

第四章では、明倫館創設期からの集書においても、徂徠学の影響が認められることを論

じた。『明倫館国書分類目録』に拠り、旧蔵国書の傾向を検討すると、徂徠学と反朱子学関係の書籍の多さが顕著である。また、詩文・音楽・歴史の領域が重視されるなど、山県周南による集書には徂徠学の教育論の反映が認められる。これにより、蔵書の面でも周南が徂徠学を重んじる教学面での基礎づくりに尽力していたことが分かる。

第五章では、明倫館がその創設期から山県周南を媒介して徂徠学の影響が認められるが、朱子学を標榜していた明倫館にあって、そうした徂徠学を受容を可能としたのは何故か、その理由の一端を明らかにするために、小倉尚斎との親交について論じた。従来、尚斎は明倫館との関わりにおいて、朱子学を重んじた初代学頭という捉えられ方に終始しておりその学統学派の相違を前提として、徂徠学を重んじた周南との接点や交遊の跡が論じられることはなかった。しかし、具体的な詩文のやりとりを取り上げ、実際には二人の間に深い親交が認められることを指摘し、周南が徂徠学の教育論を明倫館教育に反映することが可能であったのも、尚斎との信頼関係と相互理解があったためであることを論じた。

第六章では、明倫館創設の由来を記した「長門国明倫館記」の訳注を試みた。とりわけ、語釈において出典を掲げること努めることで、山県周南が古文辞に精通し、当時の藩内において自他共に認める漢文の書き手であったことを、具体的に明らかにすることを意図した。また解題として、古文辞を重んじる徂徠学の学問水準の高さを示す撰文として、その後の藩内教学における徂徠学の精神的支柱とも言うべき役割を担っていた同記の意義を論じた。

各章における考察を通して、明倫館にはその創設期から山県周南の尽力によって徂徠学の影響がみられることを明らかにした。さらに、従来、定論をみななかった明倫館における学統学派の問題についても、朱子学から徂徠学へ移行したとされてきた学統学派の転換が、小倉尚斎から山県周南への学頭の交代を契機とするものではなかったことを指摘できる。山根華陽による「長門癸甲問槎序」には、

此邦昌明敦龐之化、有若物夫子勃興、唱復古之業。五六十年來、多士炳蔚、文者修秦漢已上、詩亦不下開天、吾藩之設校也、先得其教者也。(此の邦昌明敦龐の化、物夫子のごとき勃興すること有りて、復古の業を唱ふ。五六十年來、多士炳蔚として、文は秦漢已上を修め、詩も亦開天に下らず、吾藩の校を設くるや、先ず其の教を得る者なり。)

とあり、創設当初からすでに明倫館の学風は徂徠学であったとされているように、朱子学を標榜しながらも、実際には徂徠学が浸透していたのである。藩主吉元が朱子学を重んじたのは、幕府と林家の權威を頼ったこと、また幕藩体制を維持する上で好都合であったことが理由として挙げられ、それは表向きの受容にとどまるものであった。

その一方で徂徠学は、古文辞を重んじる点で朱子学に勝る学問水準の高さを示すとともに、文学や音楽を人心の涵養に不可欠なものと捉えるなど、朱子学にはない特徴的な主張に魅力があった。すでに指摘したように、藩主吉元は音楽を重んじる一面を有していたし

初代学頭小倉尚斎は詩文にすぐれ、周南とも深い親交があった。それは先行研究において朱子学派であると一面的に捉えられてきた、藩主吉元や初代学頭小倉尚斎らも巻き込んで徂徠学が藩内の学問的雰囲気醸成に影響を与えていたことを意味するものである。そのため、明倫館ではその創設当初から学統学派については、藩主吉元が幕府や林家との結びつきから朱子学を重んじていたとしても、その受容は表向きなものにとどまり、実質的な教学には山県周南の尽力によって徂徠学が受容され、着実に浸透していったのである。

明倫館は山県周南を媒介して徂徠学の教育論による教学を展開することで、多くの子弟を教導し、藩国に有為な人材育成を行った。源泉がなければ流れもない。長州藩が明倫館の創設期に山県周南という人物を得たことは、防長の地に本格的な学問と教育の風土が拓かれる上で、かけがえのない源泉を得たとも言えるのである。

参考文献一覧

- 『周南先生文集』（山口県立山口図書館蔵）
『華陽先生文集』（同上）
『講学日記』（同上）
『為学初問』（『日本倫理彙編』育成会、一九〇一年）
『毛利十一代史』（名著出版、一九七二年）
『明倫館御書付類控』（山口県文書館蔵）
『当家制法条々』（同上）
『荻生徂徠』（日本思想大系三六、岩波書店、一九七三年）
『荻生徂徠全集』（みすず書房、一九七三年）
『荻生徂徠集』（筑摩書房、一九七〇年）
『徂徠集』（『詩集日本漢詩』第五卷、汲古書院、一九八六年、影印本）
『東野遺稿』（『詩集日本漢詩』第一四卷、汲古書院、一九八九年、影印本）
『諷園録稿』（新日本古典文学大系六四、岩波書店、一九九七年）
『十三經注疏』（中華書局、一九八〇年）
『四書五經』（中国書店、一九八四年）
『韓非子新校注』（上海古籍出版社、二〇〇〇年）
『漢書』（『二十四史』、中華書局）
『文選』（上海古籍出版社、一九八六年）
今中寛司『徂徠学の基礎的研究』（吉川弘文館、一九六六年）
今中寛司『徂徠学の史的研究』（思文閣出版、一九九二年）
岩崎遵成『徂徠研究』（関書院、一九三四年）
小島康敬『徂徠学と反徂徠学』（ぺりかん社、一九八七年）
田原嗣郎『徂徠学の世界』（東京大学出版会、一九九一年）
日野龍夫『徂徠学派』（筑摩書房、一九七五年）
黒住真『近世日本社会と儒教』（ぺりかん社、二〇〇三年）
岩崎允胤「荻生徂徠と古文辞学」（『大阪経済法科大学論集』第六十五号、一九九六年）
若水俊『徂徠とその門人の研究』（三一書房、一九九三年）
原念斎『先哲叢談』（平凡社東洋文庫、一九九四年）
藤井明・久富木成大『山井崑崙・山県周南』（叢書日本の思想家一八、明德出版社、一九八八年）
河村一郎『長州藩思想史覚書』（私家版、一九八六年）
河村一郎『長州藩徂徠学』（私家版、一九九〇年）
河村一郎『山県太華・吉田松陰考』（私家版、二〇〇四年）
河村一郎『防長藩政期への視座』（私家版、一九九八年）

- 河村一郎「近世防長儒学史関係年表」(私家版、一九九六年)
- 信原修「正徳辛卯信使の来日と詩文唱酬の実態—山県周南・当壮庵一族らを中心に—」(『朝鮮学報』第百六十二輯、朝鮮学会、一九九七年)
- 松下忠『江戸時代の詩風詩論—明・清の詩論とその摂取—』(明治書院、一九六九年)
- 『山口県教育史(旧版)』(山口県教育会、一九二五年、のち第一書房復刻版、一九八二年)
- 『明倫館の教育』(萩市立明倫小学校、一九五〇年)
- 石川謙『日本学校史の研究』(小学館、一九六〇年)
- 笠井助治『近世藩校の総合的研究』(吉川弘文館、一九六〇年)
- 笠井助治『近世藩校に於ける出版書の研究』(吉川弘文館、一九六二年)
- 笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究(下)』(吉川弘文館、一九八二年)
- 奈良本辰也編『日本の藩校』(淡交社、一九七〇年)
- 城戸久・高橋宏之『藩校遺構—江戸時代の学校建築と教育—』(相模書房、一九七五年)
- 『萩市史』(萩市史編集委員会、一九八三年)
- 『山口市史』(山口市史編集委員会、一九八二年)
- 『山口県教育史』(山口県教育会、一九八六年)
- 海原徹『近世の学校と教育』(思文閣出版、一九八八年)
- 『吉田松陰全集』(マツノ書店、二〇〇一年)
- 『萩の維新関係碑文拓本集』(萩市郷土博物館編、一九九八年)
- 吉田祥朔『増補近世防長人名辞典』(マツノ書店、一九七六年)
- 小川国治『転換期長州藩の研究』(思文閣出版、一九九六年)
- 小川国治・小川亜弥子共著『山口県の教育史』(思文閣出版、二〇〇〇年)
- 小川国治『毛利重就』(吉川弘文館、二〇〇三年)
- 小川国治「享保期長州藩の文教政策と藩校明倫館」(『日本歴史』五八九号、一九九七年)
- 須藤敏夫『近世日本積奠の研究』(思文閣出版、二〇〇一年)
- 文部省『日本教育史資料』(富山房、一九〇三年)
- 『山口高等商業学校沿革史』(山口高等商業学校、一九四〇年)
- 『山口大学三十年史』(山口大学、一九八二年)
- 『明倫館・山口明倫館・越氏塾旧蔵和漢書目録』(山口大学附属図書館、一九八九年)
- 『明倫館漢籍・準漢籍分類目録』(山口大学人文学部、一九八九年)
- 『明倫館国書分類目録』(山口大学人文学部、一九九二年)

※本論文の執筆にあたっては、以下の論文を基に各章を構成し、それぞれに加筆・修正を行った。

牛見真博「〈探訪〉長州の藩学」(第一章)

『新しい漢字漢文教育』第三十九号、全国漢文教育学会、二〇〇四年

牛見真博「山県周南の教育論における荻生徂徠の影響—『達材成徳』語および『民の父母』語を中心に—」(第二章)

『アジアの歴史と文化』九輯、山口大学アジア歴史・文化研究会、二〇〇五年
牛見真博「萩藩校明倫館の命名について—荻生徂徠の教育論の反映—」(第三章)

『新しい漢字漢文教育』第四十一号、全国漢文教育学会、二〇〇五年
牛見真博「旧蔵国書からみる萩藩校明倫館教育の特徴」(第四章)

『アジアの歴史と文化』十輯、山口大学アジア歴史・文化研究会、二〇〇六年
牛見真博「小倉尚斎と山県周南—学統学派をこえた親交—」(第五章)

『山口県地方史研究』九十六号、山口県地方史学会、二〇〇六年
牛見真博「長門国明倫館記訳注」(第六章)

『山口県地方史研究』九十五号、山口県地方史学会、二〇〇六年

あとがき

山県周南は、長州藩校明倫館の創設期から徂徠学の導入に尽力し、この防長の地に本格的な学問と教育の土壌を拓くうえで大きな役割を果たした。当時の藩校の多くが朱子学を重んじていたなかで、長州藩では百二十年を越える長きにわたり、徂徠学の影響の下で学問的風土が形づくられた。それが結果としてどのように反映したかはなお今後の課題であるが、たとえば松下村塾を主宰し、維新の原動力となった吉田松陰が、朱子学にとらわれることなく独自の思想を展開し得たのも、徂徠学が浸透していた藩内の学問的風土と無関係ではないと考えている。実際に、徂徠学と松陰の教育論には相通ずる点も見出せる。

私の研究関心は、幕末維新时期に長州藩から多くの有為な人材が輩出したのはなぜかというところにある。明倫館創設以来の徂徠学による人づくりの伝統が底流にあり、松陰のような人物もその流れの上にあられたと考えるならば、長州藩の学問と教育の展開を考える上で、周南はその源流としてもっと注目されてよい人物である。

そのような思いから本論文では、明倫館への徂徠学の導入をめぐる山県周南の教育実践に焦点をあてた。限られた領域における研究であり、まだまだ不備な点が多いことも自覚している。ただ、これまで等閑に付されてきた幾つかの点について自らの見解を提示できたことは、東アジア研究科という学びの環境のお蔭であると感謝している。

とりわけ、三年間特別研究において夜遅くまで熱心に御指導いただいた東アジア研究科教授の阿部泰記先生には、本当にお世話になりました。心から感謝申し上げます。毎回、文献資料の読解にとどまらず、徂徠学と朱子学の違いを考えながら、学問に対する姿勢や文学を学ぶ意義、教育談義にまで広がっていった時間は大変充実したものでした。そうした中から研究への示唆を与えられることもたびたびあり、高校教諭として現実の問題意識に繋げながら研究に取り組むことができました。そして小さな発見でも、その都度ほめていただき、励ましの言葉をかけられたことは、素直に嬉しく、研究の支えになるものでした。論文作成の過程で御指摘いただいた点をさらに掘り下げることができれば、よりよいものになったに違いありません。今後の研究課題とすることで、引き続き御指導を賜りたいと思います。

また、本論文の副査として御指導いただいた高木智見先生、根ヶ山徹先生、豊澤一先生、卒業論文の指導教官で公私ともにお世話になっている立命館大学名誉教授の笈文生先生、修士論文の指導教官で通信制大学院という環境の中でもきめ細かい御指導をいただいた佛教大学教授の中原健二先生にも、この場を借りて深く感謝申し上げます。多くの先生方を通しての学問との出会いがあればこそ、現在の自分があることを改めて実感しています。

最後に、かけがえのない両親と、いつも一番の理解者でいてくれる妻・沙也香に感謝しています。